

地主、他の一つは商工業の発展にもなつて當然發生し、ブルジョア革命にはブルジョアをたすけて舊封建勢力を破つたにも拘らずブルジョア政府が一度び政權を得たときには犠牲として饑餓と貧困に放り出された近代プロレタリア階級——の反對をもつよく押し切つて、自己の存在を維持・發展せしむべきあらゆる努力ををしまなかつた。獨立より千七百年の末期までは、實に、アメリカ合衆國の名のもとに獨立したブルジョアジーが、政治上に經濟上に、未來への飛躍の基礎をきづいた時期であつた。かゝる基礎のうへに、第十九、二十兩世紀のアメリカ・ブルジョアジーの榮華の夢が築き上げられたのであつた。

革命は、前に一言したごとく、一時的の好景氣をもたらした。しかし、それはそのままでは永續せずして、多くの障害が發生して、ブルジョアジーをしてやや周章せしめた。

その一は、貿易の頓挫である。イギリスはアメリカ反抗の復讐として千七百八十三年から八十七年にかけて航海條例を強行して、アメリカと西インド諸島との交易を禁止し、フランスとスペインとは相互的な通商條約を拒否した。またたとへ貿易行はるるとも、大陸會議は租稅徵收權を有さなかつたので對外信用が全くなかつた。かかる貿易の諸制限は不景氣を來らし、中央政府は

いまだ無力でこれを救済することが出来なかつたので、十三州の結合帶は漸次弛緩して來た。各植民地は高い關稅壁を設け、國境線についての論争が斷え間なく行はれた。海岸地帶と奥地との住民の間には利害關係の衝突が行はれた。

その二に、無産者たる債務者の反抗がある。「より強力なる聯邦政府を得んとする運動は革命の成果を救はんと欲する眞面目な愛國者によつてなされたのみならず、その經濟的利害關係が特に危險に瀕した多くの人達の群によつてなされたのである」憲法に對する反對は、憲法は富裕なる土地所有者、土地投機者、および商人の保護のために主として計畫されたものであるといふことを感知した小農者より起されたのであつた「憲法は農業および商業社會の富裕なる要素によつて起草されたので、それはデモクラティックな文書たる目的をもつて起草されたのではない」(註九)そこで無産者たる債務者から多くの反抗が起つた。彼等は主張した。「合衆國の財産がイギリスの沒收を免れたのは、すべての住民の協力一致による。ゆゑに、その財産はすべてのものの共有財産であらねばならぬ」(ノックス大將の報告)(註十)。かゝる反抗の最大なるものは、千七百八十六年マサチューセツツに起つた「シェイの叛亂」(Shay's Rebellion)である。ロード・アイラン

ドでも同様の事態を生じた。かゝる中央政府、または政權を奪取せる富裕階級に對する反抗は斷えず行はれた。

第三に重大なる財政上の問題がある。革命の結果アメリカは多大の國債を背負つた。千七百七十七年から八十三年の間に合衆國はフランスから六百三十萬ダラーの借款を行つた。千七百八十一年と八十二年にはスペインから十七萬四千ダラーの借債をした。革命の終りには百三十萬ダラーに達する國債をオランダの銀行家から得た。しかし、これらの額は、合衆國の財政的必要から言へばごく小である』(註十一) 内國債は、價值の下落せる通貨をもつて應募せられたので大した役に立たなかつた。その他、國家収入は僅少であつた。徵發 (Requisition) も小額であつた。信用證券 (Bills of Credit) も濫發のため價值が下落した。紙幣も濫發のため、下落して、物價騰貴を惹起して、人民を苦しめた。

新生の合衆國は、かくして、發生當時から多くの内憂外患になやまされた。これを救治するには先づ財政から立て直さねばならなかつた。

憲法は議會に次のごとき財政に關する權限をあたへた。

(イ) 諸税、關稅、賦課金 (Imposts)、國產稅 (Excises) を課徵し、負債を支拂ひ、合衆國の共通の防禦と一般幸福を計る權利。しかしすべての税、賦課金、國產稅は合衆國を通じて一樣なること。

(ロ) 合衆國の信用に於いて借金する權利。

(ハ) 外國との貿易、各州間の貿易、インディアン族との貿易を管理する權利。

(ニ) 貨幣を鑄造し、その價值を規定し、外國貨幣の價值を統制し、質量の標準を定むるの權利。

(ホ) 郵便局および郵便路を設くるの權利。

その他諸種の財政的權能が規定された。この權能を利用して、動搖しつつあつた合衆國初頭の經濟狀態を整理し、ブルジョア階級繁榮の基礎を立てたのは、初代大藏大臣 (Secretary of Treasury) たるアレキサンダー・ハミルトン (Alexander Hamilton) であつた。憲法制定後十二年間を、ハミルトン時代と呼ばれたほど、彼は、「商人および製造工業者の利益」のために働いたので

ある。彼のなした業績は大體次の三つに分たれる。

(一) 財政の整理。彼は先づ彼の計算による外債千七百七十一萬ダラーの完済と、革命に合力した以外の各州の債務の合衆國政府の引受を計畫した。前者は世界の信用を得るを目的とし、後者は中央権力への統一を目的とせるものである。次に、政務費を得るために徵稅の基礎を定めた。それには、マディソン (Madison) の提出せる稅法 (Tariff Law) が議會を通過せることがあつた。それによれば三十種の商品に特別の稅を課し他のものには低率の從價稅 (ad valorem) を課するのである。課稅物件の重なるものは、鐵及び鋼鐵、ガラス、亞麻、砂糖、茶、コーヒー、糖蜜、酒類、靴、ローソク、石鹼等であつた。課稅物件については、各州の利害關係から異論多く出で、中にはそれが暴動化したところもあつた。千七百九十四年のペンシルヴァニアのウィスキー叛亂 (Whisky Rebellion) は中でも最も大きなものであつた。

(二) 第一合衆國銀行 (The First United States Bank) の設立。遊金を集めそれを政府の財政に利用し、兌換券を發行し、經濟生活の安定を計るための諸證券を取扱ふには巨大なる中央銀行を必要とする。ハミルトンはそれを計畫した。ジェファソン (Jefferson) は反對したが、結

局、千七百九十一年に二十年の期間をもつて特許せられ資本金は千萬ダラーでそのうち政府は二百萬うけもつた。これは本社をフィラデルフィアに置き、ボストン、ニュー・ヨーク、ボールド・イモア、ワシントン、ノーフォーク、チャールストン、サヴァナ、ニュー・オルレアンスに支店を置いた。かくして、經濟生活の中心點が出来上つたのである。

(三) 通貨の制定。當時合衆國の通貨として使用されてゐたものは、價值の下落せる紙幣、イギリス、フランス、スペイン鑄貨等である。しかも各州で外國貨幣の價值が區々で統一なく商業上すこぶる不便であつた。そこでここに貨幣の統一を必要とした。千七百九十二年造幣令 (Mint Act) が出で、十進法により、金銀兩本位制による鑄貨を、大體スペイン・ミルド・ダラーに摸してつくることを決定した。しかし、カリフォルニアの金鑛發見までは合衆國の金銀の産出がすくなかつたので、實際の正貨で鑄造せられたものはすくなかつた。

(註I) Bolles Industrial History of the United States, p. 115.

(註II) Weeden, Economic History of England Vol. I. p. 326.

- (註三) Untermann, World Revolution, p. 104.
- (註四) Simons, Social Forces in American History, p. 53.
- (註五) Simons, Ibid. p. 42.
- (註六) Coman, Industrial History of the United States, p. 33.
- (註七) Simons, Ibid. p. 65—66.
- (註八) Simons, Ibid. p. 75.
- (註九) Faulkner, Economic History of the United States, p. 56, 57, 58.
- (註十) I. bing, Life of Washington, Vol. IV. p. 451.
- (註十一) Lippincott, Economic Development of the United States, p. 123.

第六章 資本主義の胎生期 (千八百年の初頭より千八百六十年頃まで)

第一節 千七百年末葉および千八百年初頭の産業状態

我々は、これから興味あるアメリカ資本主義のおどろくべき急足なる発展の描寫に入る前に、その發足點とも言ふべき第十八世紀末葉・第十九世紀初頭の幼稚なる産業状態を叙述して、アメリカが僅か一世紀の間に如何に飛躍的な發展をなしたるかを比較するに足る資料を提供しておかうと思ふ。

先づ當時の交通のことを一言しよう。當時の交通は凸凹きはまりなき道路、橋梁なき河川、泥土の沼澤等を通じて行はれた。従つて長距離の交易は、時間をとることによつて、殆んど不可能であつたと言つてよい。情報の傳達も不便をきはめた。獨立宣言當時、郵便局の数は全十三州で僅か二十八ヶ所であり、それから十四年後に至つても七十五ヶ所しかなかつたと言はれる。従つ

A. 1800-1860
E. 1760-1840

て郵税は非常に高價であつた。三十哩以内に於ける一枚の紙の郵税が六セントであり、四百五十哩以上の地に送るときは二十五セントを要した。だから、郵便物は殆んどすべて、公報であり、私信はごく稀であつた。

一萬以上の人口を有する都會は僅か四つしかなかつた。三萬のニュー・ヨーク、一萬八千のボストン、一萬六千のチャールストン、一萬三千のポールティモアがすなはちそれである。

住民の大部分は農民で、素朴なる農具、乃ち鋤、鎌、連枷をもつて原始的な農法に従つて耕作に従事してゐた。牛は肉と皮とのために飼養されたが、森林に放し飼の狀態であつた。千七百八十六年メッセンジャー (Messenger) 種の馬が輸入され、またジャスティン・モルガン (Justin Morgan) 種の馬が発生したが、この當時の馬は少數で貧弱なるものであつた。豚も放牧された。被服材料を供給するものとしての羊に對しては、比較的注意深い考慮が拂はれ、羊の屠殺禁止令、牧羊奨励費給與等の諸政策がとられた。メリノ (Merino) 種の羊が輸入されたのは千七百九十三年である。南部の農業の主作物は煙草で、プランテーションは漸次海岸をはなれて奥地に移りつつあつた。千七百九十三年エリー・ホイットネー (Eli Whitney) は綿繰機 (Cotton Gin) を發明した。

その後種々の工夫が加へられて鋸式綿繰機が完成した時には、從來一日に五ポンドの棉の實しかぬけなかつたのが、これによつて一日千ポンドまでに達した。しかし一般には、いまだ、棉の實抜きは手でなされた。ここ半世紀の間に木綿は一般大衆の重要な被服材料となりつつあり、千八百〇七年までには南部の棉の産出は激増し、主としてイギリスに輸出され、アメリカでは、ボストン、プロヴィデンス (Providence)、フィラデルフィアで使用された。煙草の栽培も土地の疲弊とともに一時利益すくなくなり、奴隸不要論がヴァージニア、メリーランド州等に起り來つた。稻の耕作は漸次進みつゝあつた。米の殻を籾る最初の機械は千七百四十九年に發明され、脱穀機は十八世紀の末葉に發明された。

工業も一般にはいまだ家内工業の段階にあつたが、そこには脈々たる變革の諸相がすでに見えてゐた。といふのは、十八世紀の末葉から、イギリスにはすでに産業革命がおこりつつあり、その波濤がアメリカにも押しよせ來りつつあつたからである。イギリスはそれらの發明を外國に輸出することを重刑をもつて嚴禁したにかかはらず、アメリカに渡來して來た。イギリスのアークライト工場で長年勞働したサミュエル・スレーター (Samuel Slater) は、頭の中にイギリスで發明

された紡機 (Spinning Machinery) をつめこんでアメリカに來り、千七百九十年にロード・アイランドのポーターケット (Porter) に工場を立て、機械を組立てて、木綿工場をたてた。千七百七十年までには、この種の機械を据ゑた小工場が多く出來た。七年以後は發達すこぶる急足で、ニュー・イングランド、ニュー・ジェルシー、フィラデルフィアはその中心地となつた。千八十年の調査によれば、八萬七千の紡錘 (Spindles) を有する二百六十九の木綿工場が存在し、千八百十五年には二十五萬の紡錘がすでにあつた。紡機はかくのごとき發達を示したが織機の方は未だに手織の手工業であつた。

製鐵・製鋼も舊來の方法で續いて行はれたが、この時代に、新らしき鍛錬法が輸入され、送風機が機械力をもつて動かさるるに至つた。釘の製造はニュー・イングランドの主たる家内工業で、各家庭には鐵床、鎔鐵爐、簡單なる器具があつた。これらの散在せる家内工業が大工場組織にまで發展するにはなほ當分の時日を必要とした。

ニュー・イングランドでは造船業が盛に行はれ、世界の海洋に浮ぶアメリカ製船舶の數は激増し、造船業者は多大の資本を蓄積しつつあつた。

アメリカには、封建制の殘滓等の、産業の發達を阻止する障害がなかつたので、機械の應用が開始さるるや、その發達はすこぶる急激であつた。ウェルスのごときは、アメリカの産業革命は千八百〇七年に始まつたと言つてゐる。千八百〇七年以後、イギリスに於けると同じやうな産業革命がアメリカに急足におこつた〔註一〕

しかし、アメリカの産業革命も、他の諸國のそれと同じやうに主としてイギリスよりの機械の輸入によつて行はれたと言つてもよい。しかし、アメリカ内地にも幾多の發明が行はれた。その重要な一として蒸氣船がある。いまボガルトの叙述〔註二〕をかりて、その發明の經過をのべてみよう。

オリヴァー・エヴァンス (Oliver Evans) は、千七百八十三年に早くも、蒸氣を車や船の推進動力にせんと努力したが、千八百四年までは成功を見なかつた。千八百四年彼は蒸氣によつて車を動し、フィラデルフィアの市中を横斷し、また Oruktor Amphibolos 號に水掻車 (Paddle Wheel) を据つけてシユイルキル河 (Schuylkill) 河を遡つた。同時にジョン・フィッチ (John Fitch) も蒸氣船を考案した。彼は千七百八十六年彼の考案になる蒸氣船を河に浮べデラウェアまで旅行

した。彼の案は、初めは水掻式で、次には両側に六個の櫓を附せる船を考案した。速力は一時間に八哩を出し得た。ペンシルヴェニア州は彼に十四年間の蒸汽船製作・使用特権を與へた。デラウェア、ニュー・ヨーク、ヴァージニアでも同じ特許を得た。千七百九十年の夏には、フィラデルフィア、ボーデンタウン(Bordenown)、トウレントン(Trenton)、ウィルミントン(Wilmington)間に定期航運が行はれたが、收支償はずしていくばくもなくして廢止せられた。千七百八十七年ラムゼイ(James Runsey)は新式の蒸汽船を發明してボトマック河に浮べた。速力は一時間四哩であつた。その他、サレムのナサン・リード(Nathan Reed)、コンネクタイカットのサミュエル・モニー(Samuel Morey)、ウィリアム・ロングストリート(William Longstreet)、エリア・オーンスピー(Elijah Ornsbee)、ジョン・ステイヴンス(John Stevens)等の種々の考案が現はれたが、何れも缺點多くして、未だ一般の交通手段としては使用され得なかつた。千八百七年のフルトン(Robert Fulton)のクレルモント號(Clermont)に至つて始めてその曙光がみとめられた。これは外輪によつて船を推進させる方法である。この船の所有者フルトンとリヴィングストン(Livingston)は二十ヶ年の特権を得た。ここに至つて蒸汽船は一般に使用せらるる機運に接

し、千八百九年には、シャンプレーン湖(Champlain)、ラリタン河(Raritan)、デラウェア河(Delaware)に一隻づつの船が航行した。二年後にはオハイオにも使用せられ、漸次一般交通に利用せらるるに至つた。

次に貿易状態について一言する。革命後一時貿易界が、イギリスの復讐によつて、不振に陥つたことについてはすでに前章に於いて一言したが、この不振は、千八百九十一年に勃興したフランス革命、それにつづくヨーロッパのナポレオン戦争のために除却せられて、貿易は再び上昇するに至つた。

このヨーロッパ戦争中は、イギリスがフランス、オランダ等を海上より追ひ拂つたので、アメリカは中立國として残り、貿易の利は専らその手中に流れ込んだ。ヨーロッパ諸國は、このアメリカの急足なる貿易發展を嫉視したが、交戦國は戦争にいそがしくして、貿易に従事する暇がなかつたので、ますますアメリカをして漁夫の利を得せしめた。アメリカのこの貿易繁榮は次の統計が明瞭に物語つてゐる。すなはち、千七百八十九年に外國貿易に従事したアメリカ船舶の噸數は、十二萬三千八百九十三噸であつたにもかかはらず、千八百七年には八十一萬百六十三噸に上り約七

倍し、輸出は千九百一萬二千ダラーから一億八百三十萬百五十ダラーに上り、輸入は二千九百二十萬ダラーから二億四千六百八十四萬三千ダラーにまで上つた。アメリカの船舶によつて行はるる貿易の割合は二十三・六パーセントから、九十二パーセントにまで上昇した。しかし、この貿易の好況は、千八百十二年のイギリスとの「第二獨立戦争」(Second War of Independence)のために一頓挫を來した。その代り、この戦争はアメリカの産業革命への重要な刺激となつて、將來に於けるアメリカ産業界の繁榮を約束する機縁となつた。

(要するに、第十八世紀の末葉、第十九世紀の初頭にはすこぶる幼稚であつた諸種産業も、千八百七年頃を劃期として飛躍的發展への門出をなした。アメリカには、産業の發展を阻止する強い封建的の桎梏のない上に、時たまたま世界産業の革命期にあたり、加ふるにアメリカはこれらの産業のために必要な諸材料を所有し廣大なる販賣區域を有するがゆゑに、こゝにエポック・メイキングな産業的革變を経験し、ブルジョアジーの輝しき時代を迎へるべき機會に接するを得たのである。)

第二節 西部發展運動と人口増加

西部發展運動(The Westward Movement)は、東方大西洋沿岸地方から内地への移住運動をいふ。この運動は合衆國の歴史の中で、その後の發達のため重要な一つの契機をなしてゐる。ターナー(Turner)は、その著「アメリカ歴史に於ける邊疆地方」(The Frontier in American History)なる本の中で、この運動の重要性を次のごとく言葉に於いて言ひ表はしてゐる。

「アメリカの歴史は、大部分、大西部の植民の歴史であつた。廣漠たる自由なる土地の存在、連続的な西行、西部へのアメリカ移住地の發展は、アメリカの發達を表現する」(註三)
また、リップピンコットも次のごとく言ふ。

「もし國力が産業の發展のうへにもとづくとするなら、我國力の基礎は大部分西部發展運動の結果に歸納し得る」(註四)

この西部發展運動は、植民地時代のごく初めから行はれてゐた。毛皮商人、宣教師等は内地の事情を東方の人達に知らした最初の人達であつた。それらの人達に續いて、牧畜者、鑛山探検家、

農民等が河川に沿って西部へ西部へと赴いた。そして、各地に素朴なる小家を建て、土地の交叉点、河川の灣入せる所、要害の地等には小村落が出来て、未來の都市の萌芽をつくつたのであつた。初期にはマサチューセッツに上陸した人達のあるものはコンネティカットの溪谷に赴き、同じ様な西行運動が、ニュー・ヨーク、ペンシルヴェニア、ヴァージニア地方にも行はれた。しかし、大規模な、アメリカの歴史に劃期的な進歩を促した西行運動は、アメリカ革命の終り頃から行はれたと言つてよい。

植民地がまだイギリスの支配下にある時代には、西部發展運動を欲しなかつた。なぜならイギリスはインディアンとの毛皮取引を獨占しようとしてゐたので西部運動の結果インディアンとの衝突をおそれたからであつた。また西部へ發展の結果、イギリスの支配が廣漠たるそれらの地方へ及ばないことを危惧したからでもある。千七百六十三年のイギリス政府の布告は中部分水嶺以西の土地の分與(Grant)を嚴禁してゐる。しかし、西部に於ける誘惑は、これらの布告・禁令にもかかわらず、多くの沿岸住民を奥地に引き入れた。そこで、千七百七十年に至つて、イギリス政府も、この趨向を察して、西行運動に對して興味をもち出したが、たまたま、アメリカ革命

が勃發し、西部運動に對する方針は、イギリス政府の手を離れて、新合衆國政府の掌中に歸した。

新政府の對西部方針は、西部發展策であつた。この發展策に應じて、大規模の西行運動がおこされた。それには多くの原因がある。その一は沿海地方の住民が債務、産業の不安定のために困窮に陥り、彼等はどこかよき活動區域を得んとしてゐた状態である。その二は、沿海地方では土地狹隘のうへに、土地所有權が確定して、新らしく土地を得ることが困難であつたことである。また、土地投機者、地券(Land Script)を有する兵士(軍功ある兵士に土地を與へた)、會社の株を有するもの等の邊境の土地に利害關係を有するものが多かつたことである。また冒険家、旅行者、商人等が邊疆地の利益多きことを宣傳、廣告したことも、多くの人を西部に誘導する有力なる原因となつた。新政府は、西部發展運動を奨励し、千七百八十五年の法令(The Act of 1785)は、西部の土地を六百四十エーカー以上の小區域に分割し、一エーカーを一ダラーで賣却することを規定したが、この區劃は邊疆民には廣すぎるので、千八百年には三百二十エーカー以上とし、千八百四年には百六十エーカー以上とした。千八百二十年には八十エーカー以上とし

た。千八百二十年には、土地賣買に便宜を與へる信用制度も設置されたが、これは土地投機者流に悪用せられたので、千八百十九年の恐慌の際に廢止せられた。西部の人達は、これら法令に認められた権利以外に更に先買權(The Right of Preemption)および政府による現實の土地贈與(Ac-tual Donation of land by the Federal Government)を請求した。(註五) 前者は測量に先立つて土地を先取し、支拂ひは後とする權利で、これは千八百四十一年に至つて始めて、法律で認定せられた。後者は千八百六十二年のホームステッド法令(Homestead Act)で獲得せられた。千七百八十七年以來毎年多くの開拓者たちが東部を去つて西部のオハイオ地方に出かけた。イムブレイ(Implay)の記するところによれば、千七百八十三年、八十四年に一萬二千の人達がケンタッキー(Kentucky)に赴き、西部河川地方には千七百九十年に四十萬の人達が移住したと言はれる。レッドストーン(Redstone)からピッツバーグ(Pittsburgh)の五十哩の間は、立派な移住地が形成された。千八百二年に西部を旅行したミチョー(Michaux)は、オハイオ河畔の驚くべき發展ぶりを報告してゐる。(註六)

西部發展運動がすすむとともに、更に多くの刺激が加はつた。インディアンとの交渉がより平和かつ安全となつたこと、諸種交通手段が改良・發達したこと、食料の獲得がより容易となり來つたこと等が、西部發展への刺激となつて、西行熱を煽つた。千八百十九年の最初の經濟界の恐慌は一時西行を阻止したが、それが平靜にかへるとともに再び盛となつた。移住の形態および段階について、ボガルトは三種の區別を認めてゐる。(註七) 第一は、歩行又は騎馬、車によつて移住した段階で、不便と資本の不足のために移住者の困難はなはだしかつた時代。第二は、通行税取立路(Turnpike)、運河、後代では鐵道等のより進歩せる交通手段によつて移住した時代。第三は、資本を有する人達が永久の移住の意思をもつて、家屋を建設し、工業をおこし、土地の富源を開發した時代である。

西部發展運動の狀勢を西北部、西中部、西南部の三つに分別して、大體の發展の歴史を觀察しよう。

オハイオへの移住は千七百八十七年頃から盛に行はれた。ニュー・イングランドの方面からはモホーク河(Mohawk)、ジネシー路(Genesee Turnpike)を通り、またはキャッツキル路(Catskill Turnpike)よりアレガニー山脈を超えてオハイオに赴いた。エリー運河(Erie)完成後は、

それによつた。また中部諸州からはペンシルヴェニアを横断するか、ボールドティモアからカンバーランド地方へ出た。南部諸州からはケンネッシー (Tennessee)、ケンタッキー (Kentucky) を経て北西部に移住した。かくのごとく西北部への発展が著増したので、千八百三年にはオハイオ州が成立し、千八百十六年にはインディアナ (Indiana) 州、千八百十八年にはイリノイス州 (Illinois)、千八百三十七年にはミシガン州 (Michigan)、千八百四十八年にはウイスコンシン州 (Wisconsin) が獨立なる州として成立した。

西中部のケンタッキー、ケンネッシー地方は、北西部以前よりヴァージニア、カロライナ等の南部の人々によつて移住せられ、前者は千七百九十二年、後者は千七百九十六年に獨立なる州となつた。

南西部は棉花の栽培が有望となるとともに、大資本、多数の奴隷を有する大栽培者が移住し來り、貧乏人も一緒に來住したが、大資本家との競争に堪へず、オハイオ州の北部、ミシシッピ河以西に更に移動した。南西部への移住盛となるにつれ、棉花栽培は沿海地方から更にミシシッピ河溪谷に移つた。かくして、スペインはフロリダ、テキサスより退いた。ルイジアナ (Louisiana)

は千八百十二年、ミシシッピ (Mississippi) は千八百十七年、アラバマ (Alabama) は千八百十九年、ミズーリ (Missouri) は千八百二十一年に、アルカンサス (Arkansas) は千八百三十六年に、フロリダ (Florida) は千八百四十五年、テキサス (Texas) は千八百四十五年、州として成立した。

かくして、千八百六十年には、國境線は、中部のミシガン、ウイスコンシンを超えて、西部、北部に延び、更に南部に至り、カンサス、テキサスにまで至り、經度九十七度線にまで及んだ。この西部の國境からミシシッピ河の東岸までの人口は、千八百三十年には、四百萬に達し、千八百六十年には千五百萬に達した。(註八) いま、千八百十年から六十年までの間の、各地方の人口増加を見れば次のごとくである。(註九)

地方	年度	一八一〇	一八三〇	一八六〇
東北中央部		二七二、三三四	一、四七〇、〇一八	六、九六六、八八四
西北中央部		一九、七八三	一四〇、四五五	二、一六九、八三三

西南中央部	七、六八	一、七七、六七
山岳地方		一七四、九三
太平洋地方		四四、〇五三
	二四六、二七	

また、西北部の人口の増加を見ると、「北西諸州——オハイオ、インディアナ、イリノイ、ミシガン、ウイスクンシン、アイオワ (Iowa) ——の人口は、千八百年の五萬二百四十人から、千八百二十年の七十九萬二千七百十九人へ、千八百四十年の二百九十六萬七千八百四十人へと著増した。(註七)

西部發展運動は、單に北アメリカ中部地方だけにとどまらず、更に太平洋沿岸にまで達した。それには、千八百三年から六年へかけてのレウイスとクラーク (Lewis and Clarke) の遠征探検が端緒をなしてゐる。アメリカ合衆國が、西部海岸に最初に足溜をつくつたのは、千八百十一年の鯨漁船のアストリア (Astoria) 建設である。移住者が利益ある地として眼をつけたのはオレゴン (Oregon) で、千八百三十二年のワイズ (Wyeth) の遠征以來移住が盛となつた。千八百十年

には毛皮採取人がカリフォルニア (California) に達し、二十年後には太平洋のサン・ディエゴ (San Diego)・サン・ペドロ (San Pedro)・サンタ・バルバラ (Santa Barbara) 等に達した。千八百四十八年にカリフォルニアに金鑛発見さるるや、水陸兩路をとつて、その地に多くの人達が押しよせて、所謂「ゴールド・ラッシュ」の時代を現出した。千八百四十八年のメキシコ條約 (Mexican Treaty) によつて、その地が平和に合衆國の有に歸し、千八百五十年に州として獨立した。ミズーリ河と大西洋の間は千八百六十年までの間に移住せられた。ユタ (Utah) は千八百四十七年に最初に移住せられ、ロッキー山 (Rocky Mountains) 地方は、千八百五十二年の金銀鑛發見以來移住が盛となつた。

いま、中部より太平洋地方の土地で、千八百六十年までに州として獨立せるものを擧ぐれば、次のごとくである。

ルイジアナ	千八百十二年
ミズーリ	千八百二十一年
アルカンサス	千八百三十六年

テキサス	千八百四十五年
アイオワ	千八百四十六年
ニュー・メキシコ	千八百五十年
カリフォルニア	千八百五十年
オレゴン	千八百五十九年

その他の地も、千九百七年のオクラホマを最後として、州として獨立した。かくのごとき發展は、全體としてのアメリカ合衆國の領土を擴張せしめた。いま領土擴張の事由と擴張領土面積を擧ぐれば次のごとくである。

事由	年度、面積	年 度	面 積 (方 哩)
千七百九十年の領土		一七九〇	八二、一五
ルイジアナのフランスよりの買収		一八〇三	八七、九八
フロリダのスペインよりの買収		一八一九	五、六六

スペインとの條約により得たる地	一八一九	一三、四五
テキサス地方	一八四五	三九、一六
イギリスとの條約により得たオレゴン	一八四六	二六、四一
メキシコより得たる地方	一八四八	五九、一八
メキシコより購入	一八五三	二九、六七

尙ほ、アメリカ合衆國全體としての人口の増加は次のごとくである。(註十一)

年 度	人 口
一七九〇	三、九九、二四
一八〇〇	五、三〇八、四八三
一八一〇	七、三三九、八八一
一八二〇	九、六六、四五三
一八三〇	二、八六六、〇二〇

第六章 資本主義の胎生期

二二二

一八四〇	一七、〇六九、四三三
一八五〇	二三、一九一、八七六
一八六〇	三、四四三、三二一

外國からアメリカ合衆國へ移住した人口表は大體次のごとくである。(註十二)

年 度	外來人口	人 口
一八二一—一八三〇	一五一、八二四	
一八三一—一八四〇	五九九、一二五	
一八四一—一八五〇	一、七二三、二五一	
一八五一—一八六〇	二、五九八、二一四	

また、全人口中に於ける外國人出生者率は次のごとくである。(千八百六十年に於ける)(註十)

三三

	メーセンテージ
ニュー・イングランド	一五・〇
ミッドル・アトランティク	二〇・八
東北中央部	一七・三
西北中央部	一六・〇
サウス・アトランティク	三・〇
東南中央部	二・五
西南中央部	七・三
山岳地方	一三・八
太平洋岸地方	三四・九

第三節 交通の擴延

生産力の發展は、必然的に交通機關の發生・發展をうながす。と同時に交通機關の發展もまた

反對に生産力の發展を誘起する。この兩者の作用は、生産力を基礎として、相互作用である。ここには、便宜的に先づ交通機關の發展を敘述する。

我々はすでに、本章第一節に於いて概略的ではあるが、第十八世紀末葉並びに第十九世紀初頭の交通状態を述べ、西部發展運動の章に於いてもいささか交通機關のことに觸れておいた。

第十九世紀の初頭に於いては、道路ははまだ不完備で、殊に西部との交通路は、野獸の通つた道、アメリカ・インディアンの獵夫の通過した路が、交通路として利用せられ、水行には小形の船、陸行には歩行、馬背、荷馬車等が交通機關として使用された。そして、陸行よりも水路による交通がより盛であつた。しかし、陸行のためにも種々の改良手段が採られつつあつたことは、例へばマサチューセッツでは千六百三十九年にすでに近隣都市を聯接する道路が計畫せられ、千七百七十五年にはボーツマス、ニュー・ハンブシャーからチャールストン、サウス・カロリーナに通ずる道路が開拓された事實によつても推察し得る。

西部發展運動の進行、それに伴ふ西部地方の産業の開發、領土擴大につれての行政の必要等は、千八百年の初期以後に交通機關の一大變革を必要ならしめた。ボガルトは、アメリカ合衆國の交

通史(千八百六十年代までの)を三時期に分別してゐる。第一期はアメリカ革命から千八百十二年の『第二獨立戰爭』までの税をとる道路(Turnpike Road)の時代、第二期は千八百十六年から千八百五十年までの運河及び河川(The River and Canal)の時代、第三期は鐵道時代(Railway Period)である。ここでは、交通機關の種類に従つて、簡単に發展の歴史を述べらる。

(イ) 道路。道路の開設は、先づ税道(Turnpike Road)の開設に始まる。これは私人がかかる道路會社に資本を投下して行つたもので、通行税(Tolls)を徴收した。ターンバイク路は、千七百九十二年——九十四年のフィラデルフィア・ランカスター間のマカダム式道路の開設にはじまる。この道路の成功は、道路開設熱を惹起して、多くの道路が設けられ、また多くの道路開設會社が特許せられた。千八百二十年にニュー・イングランドではかかる會社の数は百二十に達したと言はれる。かかる道路の發達とともにまた税橋(Toll Bridges)が多く設けられた。しかしこれらの道路・橋梁は、税が比較的高く、また大量のものを遠距離の地に運搬するには不便であつたので、更に廉價な大規模な道路計畫の必要にせまられ、それには、聯邦政府の助力を必要とするので、政府に對する助力訴願が盛となつた。その結果は、千八百〇七年の長官ガラティン

(Gallatin)の『道路、運河、港湾、河川の報告』(Report on Roads, Canals, Harbors and Rivers)となり、二千萬ダラーをもつて、次の如き計畫を實施せんとした。(一)半島を通ずる運河の開鑿。(二)メイン州よりジョルジア州までの大道路の開鑿。(三)大西洋岸の諸河川とミシシッピ河とを通ずる運河の開鑿。

この計畫は有名なカンバーランド路(Cumberland Road)の開鑿となつて現はれた。この道路は、カンバーランド、マリランダ、ヴァンダリア(Vandalia)、イリノイ間に開設せられたもので、ホイーリング(Wheeling)、ウェスト・ヴァージニア、ゼーンズヴィル(Zanesville)、コロンプス、スプリングフィールド(Springfield)、オハイオ、インディアナポリス(Indianapolis)、テール・オート(Terre Haute)、インディアナをも通過する道路で長さ八百三十四哩に達し、工費六百八十二萬千ダラーに達し、千八百十一年から五十二年までかゝつて完成した。一名ナショナル・バイク(National Pike)とも言はれてゐる。この道路の有用性について、マックジル(Mackay)は次の如くとく言つてゐる。

「カンバーランド路は、オハイオ河まで開發せられた後では、西部に對する主要路の一となつ

た。完成後は多くの交通がその道路によつて行はれた。この道路のおかげで、多くの商品がボールティモアからオハイオ河までより廉い運賃で運ばれ、ボールティモアはフィラデルフィアの費用で西部諸地方に於ける交易を増加することが出来た。ホイーリングも亦しばらくの間大に利益を得た。千八百二十二年にはホイーリングの五つのコミッションハウスのうちの一つだけでも千八十一車の荷をおろし、九萬ダラーの運賃を支拂つたと言はれる。古い旅店の上に更に多くの旅店が設けられ、それらには旅客が充満した。その道路の最大の功用は、郵便物の輸送であつた。それには、速力が必要であつた。強固な道路の地路、緩勾配は、カンバーランド路をしてワシントンより西部への郵便輸送の自然的道路たらしめた。〔註十四〕

しかし、聯邦政府の計畫は、費用のかゝることと、政府が補助するのは不適當なりとする意見が盛となつたこと、千八百三十七年の大恐慌とのために、ガラティンの大計畫は中止せられた。しかし、道路の開鑿・修繕は民間の資本をもつて徐々に行はれた。

(ロ) 汽船。汽船の發明、發達については、すでにのべた。フルトンのクラレメント號が出現するに及んで初めて、實用に適用せらるるに至つた。この汽船は、しかし東部よりもむしろ西部

諸地方の河川に使用せられた。乃ちオハイオ河、ミシシッピ河等に使用せられた。千八百二十五年には百二十五隻の汽船が往來し、千八百四十年には、ミシシッピ河の五分の四の荷は汽船によつて運搬された。千八百三十年から六十年までは、河川に於ける汽船の黄金時代であつた。東部の諸河川でも漸次汽船が使用せられた。その後、運河、鐵道が敷設されてからも、西部の交通は主として汽船をもつて行はれた。ミシシッピの遡河の日數、費用も、汽船が使用せられて以來激減し、この地方の産業の開発のために貢献した功は大なるものがあつた。しかし、汽船による航運は、主として北部と南部との間の交通を促進したので、東部・西部間の交通は、運河の開鑿をもつて始めて可能となつたのである。次に千八百六十年までの間に於けるミシシッピ河に使用せられた汽船の統計は左のごとくである。(註十五)

年	到着汽船數	噸數	積荷價格 (ダラー)
一八一四—一五	四	七、三三〇	
一八二四—二五	五〇一	一七六、四一〇	一九、〇五二、六四〇

一八三四—三五	一、〇〇五	三九、九〇〇	三七、五六一、八四三
一八四四—四五	二、五三〇	八六八、〇〇〇	五七、一九九、一三三
一八五四—五五	二、七六三	一、二四七、二〇〇	一七、一〇六、八二三
一八五九—六〇	三、五五六	二、一八七、五六〇	一八、三二一、二五四

(ハ) 運河。運河によつて東西を連絡せんとする計畫は長い間アメリカ人の希望であつた。初期には清教徒がコード岬に運河を建設せんと目論んだことがあつた。ワシントンは、かつて西部地方の測量師となつて大土地を西部に所有してゐるので東西連絡に利益を生じ、ボトマック河を利用して運河をつくらんとしたことがある。しかし、大規模の運河は、千七百八十七年に起工して九十四年に完成したデイスマル・スワンプ運河 (Disual Swamp Canal) にはじまり、千八百年までにはかなり多く運河が開鑿せられた。しかし、千八百十七年に工事を開始し、二十五年に全部開通したエリー運河 (Erie Canal) に至つて始めて、運河時代の絶頂に達した。これはその建設者の名によつてクリントン堀 (Clinton's Ditch) とも言はれる。これはハドソン河と大湖地方

を連絡するもので、長さ三百六十二哩で、バッファロ (Buffalo) からロックポート (Lockport)、ロッチェスター (Rochester)、シラキュース (Syracuse)、ローマ (Rome) からモホーク (Mohawk) 河に達してゐる。その後、多くの補助運河がつくられてニュー・ヨークにまで達した。この運河は西部と東部海岸とを連絡して、産業の開発、西部発展運動に貢献するところ頗る多く、ニュー・ヨークの人口は千八百二十年に十二萬四千であつたのが、千八百四十年には三十一萬三千に激増した。そして、ニュー・ヨークは大西洋岸唯一の大港となつた。このエリー運河の成功はその後數多くの運河建設を促したが、そのうちでも有名なのは、フィラデルフィアとピッツバークを連結する二百九十四哩に亘るペンシルヴェニア運河 (Pennsylvania Canal)、チェサピーク・オハイオ運河 (Chesapeake and Ohio Canal)、フィリップスブルグ (Phillipsburg) とチャーシュー・シティー (Jersey City) とを連結するモーリス運河 (Morris Canal)、ニュー・ヨークとフィラデルフィアとを通ずるデラウェア・ラリタン運河 (Delaware and Raritan Canal) 等である。その他湖水地方は湖水、河川を利用して運河を開鑿すること多く、千八百五十年頃には西北部は東海岸との間のみならず、ミシシッピー河上流との間に多くの運河が設けられ、それらの諸運河

網がアメリカ合衆國その後の社會的・經濟的發展のうへに寄與した成績は實に無限であつた。がしかし、この旺盛なる運河建設熱も千八百三十七年の大恐慌のために一時頓挫せざるを得なかつた。

(二) 鐵道。汽車は千八百年代の初期に、イギリスのトレヴェチック (Trevethick)、ステイヴンソン (Stevenson)、合衆國のオリヴァー・エヴァンス (Oliver Evans)、ジョン・ステイヴンソン (John Stevens) 等によつて發明・加工せられ、千八百二十七年に至つてステイヴンソンの汽車が實用に適することが一般に承認されるや、陸上の交通機關としてはじめて各國に使用されるに至つた。アメリカに於いては、運河事業、ターンバイク・ロード建設に資本を投じてゐたブルジョア達が反對したが、かゝる反對は日進月歩しつつあつた新發明の前には、やがて必然的に消滅せざるを得なかつた。汽車は交通機關として、アメリカでは次の理由によつて最も適當なるものであつた。(一) 敷設に要する勞賃は運河よりも廉價なること。(二) 速力が他のいかなる交通機關よりも迅速で、アメリカのごとき廣漠たる大陸には最も必要缺くべからざるものであること。(三) アメリカには鐵道の材料が、運河の材料よりも豊富で、鐵道敷設には最も適してゐる

こと。(註十六)

アメリカでは汽車が使用せらるる以前には、有帆車(Sail Car)、馬力車(Horse Car)等が交通手段として一時採用された。千八百二十八年七月四日、獨立宣言署名者の唯一生存者マリイラントのチャールス・キャロル(Charles Carroll of Carrollton)がアメリカ最初のボールドティモアとオハイオとの間の鐵道の最初の基石を置いた。千八百三十年に十三哩間の鐵道が動き、三十一年には更にフレデリックまで七十哩の鐵路が完成し、三十五年にはワシントン市に達し、三十九年にはニュー・ヨークにまで達した。これに續いて各州でも鐵道敷設が行はれた。千八百三十年には今日のニュー・ヨーク・セントラルの前身であるモハーク・ハドソン線が起工された。パツファロへの諸線が千八百四十二年に完成し、又ニュー・ヨーク、ボストンからアルバニーへの新線も完成した。マサチューセッツでは千八百三十年に鐵道が特許された。千八百三十四年にはフィラデルフィアとサスケハンナ(Susquehanna)とを通ずる線が出来た。アメリカで作られ最初に實用にされた機關車ベスト・フレンド・オブ・チャールストン(Best Friend of Charleston)は一時間に三十哩走り、サウス・カロリーナのチャールストンとハンブルグ(Hamburg)との間の線に使

用せられ、この新線は千八百三十四年に完成し、當時では合衆國最長の鐵道線路であつた。千八百四十年にはミシガン州に百三十九哩以上の鐵道が敷かれ、オハイオでは十哩、インディアナ州では九十五哩、ケンタッキーでは二十六哩の新線が敷設せられた。その他無數の線路が敷設せられて千八百六十年には、エリー湖とミシガンを中心として鐵道が放射せられ、ミシシッピー河には十個の線、オハイオ河には八個の線が通つた。千八百五十三年にはボールドティモア・オハイオ線はボイーリングに達し、ニュー・ヨーク・エリー線は千八百五十一年にダンカーク(Dunkirk)に達し、千八百五十二年にはペンシルヴェニア線がピッツバークにまで延びた。かくして、合衆國の鐵道は次のごとく發展した。(註十七)

一八三〇

開設

一八四〇

四五三四キロメートル

一八五〇

一四五一四キロメートル

一八六〇

五三九三五キロメートル

一八七〇

八五一三九キロメートル

鐵道敷設は、私人投資家、ヨーロッパの資本家、諸州の州債等によつて成り、各州政府はたゞ獎勵策を講じたることゝまる。鐵道敷設當時は、事故頻發したが漸次改良さるゝに至つた。

(ホ) 郵便・電信。鐵道の發達とともに郵便制度も亦發達した。最も邊陲な地と雖も、郵便局が先づ開設された。ボールスは言ふ。「新しい鑛山地方に於ける最初の三つの建設物は料理店、撞球店、郵便局である。」いま合衆國の郵便制度の發達を表示すれば次のごとくである。

	全 收 (ダラー)	總 支 (ダラー)
一八〇〇	二六〇、八〇六	二二二、九九四
一八三〇	一、九二九、三四	一、九三三、七〇八
一八六〇	八、五二八、〇六七	一、九、七〇、六一〇

電信は千八百三十五年、サミュエル・モールス(Samuel F. B. Mores)によつて發明せられ、千八百四十四年には議會は三萬ダラーを支出してワシントンとボールティモアの間に電信を敷設した。爾後二十年のうちに、殆ど各地に電信が敷かれた。千八百四十五年にはニュー・ヨークとフィ

ラデルフィアの間に、四十六、四十七年の間にはニュー・ヨークとボストン間、ニュー・ヨークとアルバニー間、アルバニーとバッファロ間が電信で連絡された。千八百四十八年にはニュー・ヨーク、クリヴランド、トレド、デトロイト、シカゴ間に敷設された。千八百六十一年には太平洋沿岸にまで電信が達するやうになつた。

第四節 農業・林業・牧畜の發達

西部發展運動の進行につれて、西部の開發いちじるしく、農業の進歩に對する條件の一たる豊富なる土地がますます増加した。そして西部が漸次アメリカ農業の中心となり來つた。西部に於いては、當時「開拓者農業」(Pioneer Farming)と稱する農業が行はれた。これは西部開拓者が、西部に赴いて最初に行つた農業で、最初はレンジ(Range)と稱する野菜の自然的成長に依存する農業生活をおくり、森林より木材を伐採し、野獸を狩して皮革をとり、それらをもつて、茶、コーヒー等と物々交換を行つた。生産は自給のためで商品生産ではなかつた。玉蜀黍、豆類、馬鈴薯、キャベツ等を生産した。「開拓者農業」の初期は、上のやうにごく素朴なものであつたが、

第二期になると單なる採集的の素朴農業からやゝ本格的な農業に移り、玉蜀黍、大麥、小麥、ライ麦、燕麥、煙草等を栽培した。時々、棉花、亞麻等を作つた。また穀物からウイスキーを作り、牧畜をも行つた。概して西部では土地は豊富であつたが、勞働力がすくなかつた。ヨーロッパでは、勞働力が多いので土地をつくるのが目的である。アメリカでは、土地は豊富なので勞働力を作ることが目的である」といふジェファアソンの言葉は當時に於ける西部の農業勞働状態を適切に言ひ表してゐる。土地の廣大なることは、その結果として、科學的農業の採用をおそからしめ、土地投機者の跋扈を盛ならしめ、従つて農業の進歩を一般におそからしめた。けれども、勞働力の僅少といふことは勞働力を節約する機械の發明の必要を促し、また運河、道路、鐵道等によつて東部及び南部との交通が盛となり、市場が廣大となるとともに、農業も漸次盛となつた。

南部に於いてはこの時代に棉花の栽培が盛となり、アメリカ農業に一生面を與へた。従來南部では三大主要農作物と言はれる、煙草、米、藍をプランテーション制度によつて栽培してゐた。しかし藍の生産、煙草の生産は漸次減少して來たので、南部住民は何か新しい主要生産物を見つけないければならなかつた。棉花の發見は、南部の農業を蘇生せしめた。棉花は従來アメリカで

Cotton gin 1837
Whitney

も栽培してゐたのであるが、未だ家内生産の範圍を出でなかつた。織物の材料としては、羊毛、亞麻等が使用せられ、棉花はスリナム (Surinam) のオランダ植民地、ジャマイカ (Jamaica) 等の西インド諸島から輸入してゐた。しかし、産業革命とともに棉花の需要が國外(主としてイギリス)、國內に於いて激増したので、棉花の栽培は更に緊急事となつた。棉花の栽培には高原と多くの體力勞働者が必要とする。南部はこの點に於いて最も適當した土地であつた。殊に千八百三十七年に於けるホイットニー (Eli Whitney) の綿繰機 (Cotton Gin) の發明は、木綿栽培に一大革命を與へた。この綿繰機の發明は次のごとき結果を産業界に與へた。(一) 棉花は南部最大の商品となり、南部繁榮の基礎をなした。(二) 棉花は一時アメリカの最大唯一の輸出品となつた。(三) 奴隸制度は煙草生産の減退とともに一時不必要とされたが、棉花栽培おこるとともに再び盛大となり、後年の南北戦争の一大原因を醸成することゝなつた。(四) 棉花栽培が盛になるとともに人口が南部に集中し、政治的紛争の種となつた。(五) アメリカ木綿工業を盛大ならしめた。(六) それ以後に於ける織物機械の發展・改良を促進した。

綿繰機の發明によつて、アメリカの棉花生産は激増した。いまその生産高の増加を表示すれば

次のごとくである。(註十八)

年 度	数 量	俵 数 (一俵五〇ポンド)
一七九〇	〇	〇,〇〇〇
一八〇〇	〇	七,三三三
一八一〇	〇	一七,八二四
一八二〇	〇	三三,七七八
一八三〇	〇	七三,二二八
一八四〇	〇	一,三四七,六四〇
一八五〇	〇	二,一三六,〇八三
一八六〇	〇	三,八四一,四二六

棉花生産の増加は、棉花輸出を激増せしめて、アメリカ輸出のうちに重要な地位を占むるに至つた。

年 度	輸 出 量 (ポ ン ド)	輸 出 額 (ダ ラ ー)	アメリカ全輸出物額 (ダ ラ ー)
一八〇〇	一七,七八九,八〇三	五,〇〇〇,〇〇〇	七〇,七七一,七八〇
一八一〇	九,二六一,四六一	一五,一〇八,〇〇〇	六六,七五七,九七〇
一八二〇	二七,八六〇,一五三	三三,三〇八,六六七	六九,六九一,六六九
一八三〇	二九八,四五九,一〇三	二六,六七四,八八三	七二,六七〇,七三三
一八四〇	七四三,九四一,〇六一	六三,八七〇,三七七	一三三,六六八,九三三
一八五〇	六三五,三六一,六〇四	七一,九八四,六二六	一四四,七五五,七二六
一八六〇	一,七六七,六六六,三三八	一九一,八〇六,五五五	三三三,五七六,〇五七

棉花栽培が盛となりつゝある一方、南部の主要農作物であつた煙草は絶對的にも相對的にも生産が減少しつゝあつた。千八百十三年の第二獨立戰爭に伴ふ輸出禁止 (Embargo)、外國競争品の出現等が、アメリカ煙草生産の減少の原因をなした。千八百三十年には煙草はミシシッピ河をこえてミズーリの地域にまで栽培せられた。その後新種の移入、保存法の改良、テンネッシー、

ケンタッキーへの發展等は、一時衰へた煙草生産を復活せしめ、千八百四十年ごろには、衰微以前の生産額に再び到達することが出来た。南北戦争當時にはアメリカは再び世界に於ける最大の煙草生産國となり、千八百六十年には、ヴァージニア、ケンタッキー、テンネッシー、マリラーンド、ノース・カロライナ、その他の南部西部の地を合して、四億二千九百三十六萬四千七百五十一ポンドの煙草を産出し、セント・ルイス (St. Louis) とルイスヴィール (Louisville) に煙草工業が起り、現に今日にいたるまで盛に煙草を作製してゐる。米はサウス・カロライナ、ジョルジア等が中心で、千八百五十年には二億千五百三十一萬三千四百九十七ポンドを産出し、以後漸次衰退の傾向を示してゐる。

オハイオ北部の諸州では穀物の栽培、牧畜等が盛に行はれ、大麥、小麥、燕麥を産出し、殊に東部、南部との交通が便利となると共に重要な食料品供給地となつた。

東部地方の農業は、以上の各地方に比してすこぶる振はず、土質も悪いし、方法も粗暴であり、従つて農民は土地を放棄して西部に走るものが増加した。殊にニュー・イングランド附近は工業地帯となつて、農場は放置せらるゝがごとき状態を呈した。

農業生産力の發達は更に科學的農法を必要ならしめた。ワシントン、ジェファソン、リヴィングストン等は西ヨーロッパ諸國の農法、農具、家畜種を輸入し、科學的手段の採用を獎勵した。従來は木製の鋤、鍬、大鎌等の素朴なる農具を主として手をもつて使用したのであるが、第十九世紀に入るとともに、ニューボルド (Newbold)、レーン (Lane)、ディール (Deere)、オリヴァー (Oliver) その他の人達によつて鋼鐵製の鋤が發明せられ、一般に使用せられた。マニング (William Manning)、ファセー (Obad Hussey)、マコーミック (Cyrus McCormick) 等は、それによつて千八百三十一年、千八百三十三年、千八百四十四年に刈草機 (Mower)、刈取機 (Reaper) を發明して專賣特許を得た。また脱穀機も漸次機械化して、千八百五十年頃には蒸氣力をもつて運轉さるゝに至つた。

千八百三十年以後は、従來放置して顧みなかつた牧畜に注意が拂はるゝに至つた。デヴォンス (Devons)、ダーハムス (Durhams)、ヒヤフォーズ (Herefords) 等のヨーロッパ種の家畜が輸入せられた。馬を機械運轉に使用する必要から馬匹の改良も行はれた。羊は千八百六十年に於いては、オハイオ、ニュー・ヨーク、インディアナ、ペンシルヴェニア、ミシガン等に盛に牧せられた。

千八百五十年に於ける家畜全部の總額は五億四千二百六萬七千ダラーに達し、六十年には更に十億九千八百八十六萬二千ダラーにまで増加した。

第五節 工業・鑛業の發達

千八百年の初頭から六十年代の南北戦争までの間はアメリカ工業の資本主義化時代で、この間に産業革命が成就されたのである。千八百〇七年から十五年までの間は、所謂ナポレオン戦争時代で、ヨーロッパ諸國の生産は杜塞し、貿易も行はれなかつたので、アメリカの生産界、貿易界は異常の活氣を呈した。このことについては、すでに前に述ぶるところがあつたからこゝでは略する。

ヨーロッパの戦雲が鎮靜に歸するや、イギリスはじめヨーロッパ諸國の生産は再び發展し、貿易も行はれ、加ふるにイギリスではすでに産業革命が行はれて機械工業、工場制度もアメリカよりも發達してゐたので、生産される商品もアメリカよりも廉價で、従つて、世界市場に於いて、アメリカ商品は再び驅逐せられ、國內の生産も萎微するに至つた。しかしこの萎微も長く續かなか

つた。十五年になつて、イギリスよりの機械の輸出が解禁となるや、アメリカは逸早くそれらを採用して、すでに發生しつゝあつた大工業的工場制度に應用した。また政府は千八百十六年および十八年の保護關稅によつて内國産業を保護し、ヨーロッパ諸國より水力タービン車 (Turbine Water Wheel)、輪狀紡機 (Ring Spinner) 等を輸入して生産力を増加せしめた。加ふるに、アメリカは粗原料を多く包藏し、資本家も漸次工業に投資するに至つたので、アメリカの工業は再び立直つて躍進的な發展を示すに至つた。そして、外國の廉價なる商品にまけぬだけの廉い價格で賣却することが出来るに至つたので、ヨーロッパ製品とも對抗することが出来るやうになつた。いま各種工業の叙述に入る前に千八百五十年、千八百六十年に行はれた國勢調査によつて産業一般の發達を表示しよう。(木材業および漁業をふくむ) (註十九)

事項	年度
經營數	一八五〇年
資本額	一八六〇年
	11,111,011,111
	1,009,856,000
	5,111,111,000
	ダラー

労働者、雇傭者数	九五七、〇五九	一、三二一、二四六
租 原 料 費	五五五、二四〇、〇〇〇 ダラー	一、〇三一、六〇五、〇〇〇 ダラー
生 産 品 價 格	一、〇一九、一七三、〇〇〇 ダラー	一、八八五、八六二、〇〇〇 ダラー

次に各種工業の状態を略述しよう。

(イ) 繊維工業。先づ紡績業がおこり、つゞいて織物業が起つた。千八百十四年ローウエル(Lowell)は力織機(Power Loom)を携へてアメリカに來つて、ボストン資本家の援助のもとにマサチューセッツのウォルサム(Waltham)にウォルサム工場(Waltham Mills)を建設し、紡機および力織機を設備して大規模の紡績業を經營して、後年アメリカ繊維工業の基礎を築いた。

(二) 繊維工業のうち先づ注目すべきは木綿工業(Cotton Industry)であらう。木綿工業の重要な材料たる棉花は南部アメリカから莫大に産出せられたので、この點ではアメリカは他の諸國よりも恵まれてゐた。當時第一の木綿工業國たりしイギリスも材料のほとんど大部分はこれを

アメリカから仰いでゐたのである。千八百〇三年には木綿工場は僅か四個しかなかったが、千八百〇八年には十五個に達し、八千の紡績を持つた。ローウエルの工場の成功は、各地に木綿工場を簇出せしめ、ナシユア(Nashua)、マンチェスター(Manchester)、ローレンス(Lawrence)等のニュー・イングランドの地に大工場が設立せられた。プロヴィデンス(Providence)、ニュー・ベッドフォード(New Bedford)、フォール・リヴァー(Fall River)等はその中心地であつた。ニュー・イングランドは木綿工業最古の發生地であり、千八百六十年までの期間中、アメリカ第一の生産地であつた。千八百五十年には全國産額の六十七パーセント、千八百六十年には六十九パーセントを占めた。ニュー・イングランド以外の地ではマサチューセッツ、ニュー・ハンプシャー、ロードアイランド、コンネティカット、ペンシルヴェニア、ニュー・ヨーク等も木綿工業が盛んであつた。いま木綿工業の發達を表示すれば次のごとくである。

(A) 第一表 (註二十)

年 度	紡 績 數	消費棉花棉數
-----	-------	--------

一八四〇年	一八五〇年	一八六〇年
一八 一五	一八 一五	一八 一五
一、一四六、〇〇〇	一、一四六、〇〇〇	一、一四六、〇〇〇
二、二八五、〇〇〇	二、二八五、〇〇〇	二、二八五、〇〇〇
三、九六八、〇〇〇	三、九六八、〇〇〇	三、九六八、〇〇〇
五、二二六、〇〇〇	五、二二六、〇〇〇	五、二二六、〇〇〇

(B) 第二表 (註二十一)

経営者数	一八四〇年	一八五〇年	一八六〇年
投資額	三、一〇〇、 三、一〇〇、三五九 ダラー	七、〇三三、五七八	九八、五八五、〇〇〇
紡績数	二、二六四、〇〇〇	三、六三四、〇〇〇	五、二二五、七七
消費棉花	三六、〇〇〇、〇〇〇 ポンド	一	四三、七〇四、九七五
生産木綿額	四六、三三〇、四三三 ダラー	六五、五〇一、六八七	一一三、六八一、七七
労働者数	七二、二一九	四、九六六	一一〇、〇〇〇

(11) 羊毛工業 (Woolen Industry)。羊毛工業は、家内工業が盛大であつたためと、イギリスの羊毛工業が世界市場を支配してゐたために、アメリカでは木綿工業ほど急足なる進歩を見せなかつた。千八百三十年までは見るべき生産をなさなかつた。千七百九十三年にメリノ (Merino Sheep) の羊種が輸入され、千八百十二年第二獨立戦争後よりやゝ盛となつたが、二十年頃は、工場は百個計りであつた。羊毛工業の起つたのは羊毛の供給の多い中部諸州であつたが、羊毛工業品の三分の二は、後年ニュー・イングランドで生産せられ、ペンシルヴェニア、ニュー・ヨーク、オハイオがそれについだ。

経営者数	一八四〇年	一八五〇年	一八六〇年
投資額	一、四〇〇、 一、四〇〇、〇〇〇 ダラー	三、九七一、六三二	六、八二四、四三三
労働者数	二二、四三三	四、四三八	五〇、四一九
生産額	二〇、六九七、〇〇〇 ダラー	四八、六〇八、七七九	七三、四四四、〇〇〇

(三) 亞麻工業 (Flax Industry)。被服材料としての木綿、羊毛の工業が発達するとともに亞麻工業は漸次衰へた。しかし、網具 (Cordage)、帆布 (Sail-cloth)、囊類 (Bassing) 等の特種製麻品の生産は、オハイオ州で行はれた。

(四) 絹工業 (Silk Industry)。植民時代に養蠶を企てたが失敗したので、絹工業はそれ以後あまり振はなかつたが、千八百四十年頃に至つて、リール (John Ryle) はニュー・ジャージーのバタースン (Paterson) に、チェニー兄弟 (Cheney Brothers) はサウス・マンチェスター、コンネクティカットに絹工場を設けたので、この工業もやゝ盛になつたが、材料は大部分これをイギリスに仰いでゐた。

(ロ) 鑛業 (Mining)。金屬工業の記述に入るに先だつて、この國の鑛業の發達を先づ一瞥する。けだし、金屬工業は、一般に、その材料たる鑛石の産出を前提とするからである。千八百年の初頭から六十年までの間に於いて、この國に於いて採掘された重なる鑛物は鐵、石炭、銅、鉛および金である。いまその各のものについて略述する。

(一) 鉛 (Lead)。鉛は南東ミズーリおよび北西イリノイ及びウイスコンシン、アイオワ等

の地に産出する。ミズーリでは千七百三十年ごろすでに採鑛並びに加工が行はれた。イリノイ以下の地は千八百十二年後採掘並びに加工が盛となつた。鉛は、鉛板、鉛管、及び白鉛の作製の材料となつた。鉛の一部は東部およびヨーロッパに輸出せられたが、大部分はミシシッピ溪谷で加工された。千八百年——千八百五十四年の間に十二萬一千噸の鉛鑛が採掘され、千八百二十二年、——千八百五十一年の間に三十一萬六千噸の鉛鑛がガレナ (Galena)、イリノイから輸出された。

(二) 銅 (Copper)。千八百四十八年に於けるミシガン州のクリップ鑛山 (Climb) よりの銅の採掘が著名であつて、その大部分は海外に輸出された。それ迄は國內の産出すくなく、チリ、キューバから輸入した。千八百四十五年のアメリカ銅産出量は僅か百トンに過ぎなかつたと言はれる。千八百六十年ごろには、ミシガンの産出が全國産出額の約七十五パーセントを占め、五千三百噸を出した。それに續いたのは、テンネッシー、ノース・カロリーナ、ヴァージニアおよびマリーランド等であつた。

(三) 鐵。北部ミシガンの鐵鑛の發見が、アメリカ鐵鑛業に劃期的な變革を與へた。それは千

八百四十五年前後である。ミシガンは千八百五十四年に三千噸しか産出しなかつたが、千八百六十年には十一萬四千噸に到達した。ペンシルヴェニアは千八百六十年に百七十萬噸の鐵礦を出した。オハイオ、ケンタッキー、テンネッシー等にも早くから採礦され、後年にはシンシナチ、ルイスヴィル、ピッツバーグ等の鐵工業地に賣却せられた。その他、東部諸州では、マサチューセッツ、コンネクティカット、ニュー・ジャージー、ニュー・ヨーク等に産出せられた。千八百六十年の全國産出額は二百五十一萬四千二百噸であつた。

(四) 石炭。 森林の伐採に伴ふ薪の減少と他の燃料に對する需要の増加、鐵鑄解のための燃料の必要、ガス製造のための必要、蒸汽機關の採用等は、石炭に對する激しい需要をよび起した。無煙炭 (Anthracite) はすでに千七百六十二年にペンシルヴェニア州のワイチミング (Wyoming) に發見され、續いて千七百九十一年にリーハイ (Lehigh) に發見されたが、採礦の困難と、運搬の不便とのために、一般に採用されなかつた。無煙炭が一般に使用されるに至つたのは蒸汽機關が一般に使用された千八百二十五年以後で、千八百三十七年の鑄鐵法實施以來殊に需要を増した。千八百十五年には無煙炭の産出額五十噸に過ぎなかつたのが、千八百二十年に至つて四百

五十噸に達し、千八百三十年には二十一萬五千二百噸、千八百六十年には千四十八萬八千噸を産出するに至つた。有煙炭又は瀝質炭 (Bituminous Coal) はすでに千七百九十四年ごろ、ピッツバーグ (Pittsburgh) に蒸汽機關が輸入されたころ使用されたが、千八百以後は、ピッツバーグ及びその附近の工業都市、オハイオ河畔の工業都市へ盛に輸出された。千八百五十五年のピッツバーグの石炭使用量は二千二百萬ブッシェルに達し、石炭の輸出は千四百萬ブッシェルに達した。その輸出は、セント・ルイス、シンシナチ、ルイスヴィル、ニュー・オルレアンスに向つてなされた。大湖地方の諸都市もオハイオ、ペンシルヴェニア地方から運河によつて多量の石炭を輸入した。石炭はまたガスを製造するために使用され、それは大體千八百三十四年以後からである。イリノイの石炭産出額は千八百六十年には五十六萬八千噸に達し、オハイオは百十三萬三千五百噸に達した。他の中部諸州の石炭採掘額は千八百六十年以前は少量であつた。

(五) 金。 アメリカに於ける大量の金の採掘は千八百四十八年に於けるマーシャル (James Marshall) の手によるカリフォルニアのサター金鑛 (Sutter's Mill) の發見以後に屬する。千八百四十九年の採掘額は五百萬ダラーであり、千八百五十三年には、六千萬ダラーに達した。それ

以後カリフォルニアの金の採掘は減少したが、しかもアメリカ第一の金礦たる地位を失はなかつた。千五百八十二年にはコロラド (Colorado) の金礦が発見された。その他、各地方の山地に於ける漁金者流の活躍はすこぶるめざましいものがあつたが、大なる金礦の発見はなかつたといつてもよい。カリフォルニアの金礦発見は、世界金礦史の最初の重大なる一頁を占めるもので、續いてオーストラリアの金礦発見 (千八百五十一年および千八百七十年)、トランスヴァール (Transvaal) の金礦発見 (千八百六十八年)、クロンダイク (Klondike) の金礦発見 (千八百九十六年) 等が行はれた。

(ハ) 金屬工業 (Metal Industry)。金屬工業は、この時代では主として製鐵業を指す。製鐵業は主として鐵礦存在地に發達した。西部マサチューセツツ、コンネティカット、東部ニュー・ヨーク、東部ペンシルヴェニア、ニュー・ジャージー、マリランド、ヴァージニア、ピツパীগを中心とする西部ペンシルヴェニア等が主要なる製鐵業中心地であつた。アメリカでは製鐵には初め主として木炭を燃料として使用した。コークスを使用するに至つたのは千八百五十年以後に屬する。千八百三十年と四十年の間に無煙炭が木炭に代用せらるるに至つた。無煙炭を利用

する衝風爐 (Blast Furnace Method) の使用は、ネイルソン (James B. Neilson) の功績に歸する。千八百五十五年には、無煙炭を利用して作つた鐵の量の方が木炭を使用するものよりもはるかに激増した。千八百五十一年にはケンタッキーのケリー (William Kelly) が獨立でベッセマー法 (Bessemer Principle) を考案して、製鐵業に應用した。熱風爐の使用、鐵道の敷設、機械製造の發達等のために、鉄鐵 (Pig Iron) の製造が増加した。(註二二二)

鉄鐵生産量(トン)	
一八一〇	五、九〇八
一八三〇	一六、〇〇〇
一八四〇	二六、九〇〇
一八五〇	五三、七〇〇
一八六〇	八二、一〇〇

鐵の精練法も漸次進歩し、千八百十七年には、攪練及び廻轉法 (Pudding and Rolling Process)

がイギリスから輸入された。鋼鐵 (Steel) の製造は千八百六十年以前にはあまり發達しなかつた。それはいまだ研究時代に屬してゐた。千八百三十年にはストーヴが發明せられて、やがて一般に廣く使用せらるるに至つた。ストーヴの一部は鑄鐵 (Cast Iron) より成るので、鑄鐵事業の盛なる地方にストーヴ生産がおこり、千八百五十年ころには、四十七萬五千個のストーヴが生産せられた。産業革命が進歩するとともに、機械の發明が相次いだ。千八百五十年と六十年の間に二萬八千の新らしい特許が特許局 (Patent Office) に出願された。そのうちでも、有名なるものはハウ (Elias Howe) の裁縫機 (Sewing Machine) および前にすでにのべたマッコミックの農業機械である。これら機械の相次いでの發明は、製鐵事業の發展をますます促進した。先に綿繰機を發明したホイットニーは、インターチェンジャブル・パーツ法 (Principle of Interchangeable Parts) を發明して、製鐵事業の發達に貢獻した。かくして製鐵法に於ける標準化 (Standardization)、特殊化 (Specialization) 等が進歩した。

いま、生産額を示せば次のごとくである。(註二十三)

	外國よりの輸入	内國生産
一八五〇	1M*000 千	2M*000
一八六〇	1M*000	10M*000

(ニ) ミート・パッキング工業 (Meat Packing)。これははじめ東部に行はれ、材料は西部より送られたが、後代には、西部が中心地となり、シカゴ、オハマ、カンサス等が中心となつて、今日に至つてゐる。

(ホ) 木材工業 (Lumber Industry)。機械の發明とともに、木材は廉價となり、家具その他の木製用具に對する需要が増加し、それらを生産する職場も漸次大工場組織となつた。

以上、千八百年初頭から千八百六十年までの間に於ける主要なる工業として、織維工業、鑛業、金屬工業の大體の發達をのべた。尙この外、例へば皮革工業 (Leather Industry) のこともいついても述べべきであるが、既述のものに比して、さして重要なものと思はれざるがゆゑに既述

のもの以外の工業については、ここに記述を略する。

第六節 商業及び貿易の隆盛

商業および貿易の發達をのぶるに先立つて先づ、それを可能かつ促進せしめた諸前提条件について二三の記述をなすであらう。それらのうちの一つである交通機關の發達についてはすでに本章第三節において取扱つたがゆゑに、ここでは爾餘の前提条件である銀行、通貨等のことについて若干の叙述をなすであらう。

先にのべた第一合衆國銀行は千八百十一年南部および西部の反對に會つて解散した。この銀行解散後は、中心となるべき銀行なく、諸州に小銀行が分立したが、これら銀行はほんとの銀行事務を營むものでなく、多くの過誤を侵し、それらの銀行の資産は、急に現金に直し得ない投資物又は政府發行の債券類であつたので、到底満足に金融事務を果して行く能力を有さなかつた。加ふるに、合衆國銀行解散後は正貨の流出はなほだしく、七百萬ドルが正貨の形態で海外に流出して終つて、國家の財政がはなほだしく紊亂し、加ふるに政府を支持する銀行がなく財政事務の

不便が極度に達したので、當時の大藏卿ダラス (Dallas) は、政府に財政的援助を行ふ目的と通貨整理を行ふ目的とで、第二合衆國銀行 (The Second United States Bank) を設立せんとした。この銀行は千八百十六年資本金三千五百萬ドルをもつて二十年の期限付で特許せられた。政府はそのうち五分の一を引うけ、他は一般から募集した。資本金に達するまで紙幣發行權を有し、その紙幣はすべての取引に授受さるべきものと定めた。大統領は二十五人の重役を指命し、二十五個の支店が設置された。開業後三年間は銀行の行政甚しく當を失し度々破産に瀕したが、千八百十九年新總裁就任とともに、成績は一新した。しかし、南部および西部よりはこの銀行に對する反對多く、殊にジャックソン (Andrew Jackson) は、國立銀行は政治的目的に利用せらるること多く、それは危険なる獨占なりと駁撃したので、マーシャル (Marshall) の擁護説にかゝはらず、千八百三十六年期限終了後は再び特許せられず、千八百三十七年の恐慌襲來とともに停止し、千八百四十一年清算されるの運命となつた。そして政府は獨立的な國庫制度を設立して、それによつて、國家の財政事務を行つた。そして、一般民間の金融は再び各州立銀行によつて行はれることとなつた。千八百三十六年から六十年までの間に於ける金融界の主要なる特徴は、二

ユー・イングランドのサフォーク (Suffolk Bank System)、ニュー・ヨークのセーフティ・ファンド制度および自由銀行制度 (Safety Fund System, Free Banking System) および前に述べた獨立國庫制度 (Independent Treasury System) であつた。

サフォーク銀行制度とは、最初ボストンに千八百十八年設立されたサフォーク銀行によつて創始せられた制度で、その主義としては、當時行はれた銀行券の濫發を制限・整理するために、「各銀行券を蒐集し、それを正貨で償還する政策」をとつた。この制度は、その後ボストンのみならず、ニュー・イングランドの各地に採用せられて、亂れた金融界を整理するに一つの貢獻をなした。

セーフティ・ファンド制度は一名「通用せる銀行券の相互保證」とも言はれるもので、千八百二十九年ニュー・ヨークで採用されたものである。その制度は、「すでに設立せられ、或は爾後設立せらるべき銀行は、支拂が資本金の三パーセントに達するまで、毎年資本金の一パーセントの半分にあたる額を寄附する」ことを要求し、「失敗の場合には、この基金は銀行の負債支拂に充當する」制度である。しかし、この制度は、次に述べる自由銀行制度の發達によつて、阻碍された。千八百三十八年以前に於いては、ニュー・ヨークでは銀行は特別の特許 (Charter) のもとに始

めて設立が許可されたが、千八百三十八年には自由銀行制度法が敷かれて、いかなる人、あるひは團體でも、一定の抵當物を各州の計算役 (State Comptroller) に提供すれば、その代りに一定の額の通用する證券をうけることが出來た。この制度は、後代のナショナル・バンキング制度に類似したもので、ニュー・ヨーク州のみならず各州に採用され、ある州では、もつと具體化して州有銀行 (State-Owned Banks) とまで發達した。

第二合衆國銀行没落後、政府はその資金をあづけ財政を援助するために二つの策を採用した。その一は各州のうちの最も良い銀行を選んで、それを政府の銀行とする制度であるが、これは一時採用せられたが、まもなく廢止せられて、獨立國庫制度が採用され、千八百六十四年ごろまで、時々の中斷をのぞいて繼續した。

銀行制度に次いで述べべきは貨幣制度である。千八百四十八年以前は、金がアメリカで大量に採掘されなかつたので、硬貨幣の流通はごく稀であつた。千七百九十二年の貨幣法で、金と銀の比率は十五對一と定められたが、金は低く價值つけられたため貨幣として使用されず、地金として使用された。千八百三十七年にこの比率を變じて、十六對一としたので、今度は反對の現象を

生じて、銀が流通界から姿を消した。千八百五十三年には新貨幣法が發布されて、通貨も漸次整理さるるに至つた。

交通機關の完備、生産の發達、農業の發展、銀行及び貨幣制度の整理等は、アメリカの内外商業を飛躍的に發展せしめた。次に内國商業、外國貿易の二つに大別して、この時期に於ける商業發展の大略をうかがはう。

(イ) 内國商業 (Domestic Commerce)

運河、鐵道等の交通機關が完備せざる以前には、内地商業はハドソン河、モホーク河、デラウエヤ河、サスクハンナ河、ポトマック河等を利用してなされ、海岸地方は沿岸交易によつて行はれた。しかし、西部發展運動によつて西部の開拓せられざりし以前は、内地貿易ははまだ充分發展しなかつた。しかし、エリー運河を初として大小多くの運河が開設せられ、道路・郵便制度が漸次整備し、鐵道が敷設せられ、汽船が大湖地方の湖水やミシシッピ河を上下するに及んで、アメリカ内部に於ける商品の移動は盛となつた。内地の諸生産物は東部へは、ニュー・ヨーク運河、ニュー・ヨーク・セントラル線、ニュー・ヨーク・エンド・エリー線、ペンシルヴェニア線、

ボールティモア・オハイオ線等の五つの大動脈によつてニュー・ヨークに集中、そこで更に内地又は外國に賣却せられた。ニュー・ヨークとともに西部及び奥地の生産物の集散した地はミシシッピの河口、ニュー・オルレアンスであつた。いま奥地からニュー・オルレアンスに集まつた生産物統計表をかゝれば次のごとくである。

	メ タ ラ ー 標 準
一八一四—一五	八、七九、〇〇〇
一八一九—二〇	三、六七、〇〇〇
一八二四—二五	一九、〇四、〇〇〇
一八二九—三〇	三、〇五、〇〇〇
一八三四—三五	三七、五六、〇〇〇
一八三九—四〇	四九、六三、〇〇〇
一八四四—四五	五七、一九、〇〇〇
一八四九—五〇	六、八九七、〇〇〇
	一一五一

第六章 資本主義の胎生期

第六章 資本主義の胎生期

一八五四—五五
一八五九—六〇

二五二

一七、〇六、〇〇〇

一八五、二二、〇〇〇

次にかゝる表は、所掲アメリカ四重要地よりの外國貿易の表である。(ダラー)

	マサチューセツツ	ニュー・ヨーク	ペンシルヴェニア	マリーランド
一八二〇	三、八六二、四三〇	八、二五〇、六七〇	二、九四八、八七〇	四、六八一、五九〇
一八三〇	三、五九九、九三〇 <small>ダラー</small>	一三、六二八、二七〇	二、九四四、四四〇	三、〇七五、九九〇
一八四〇	六、二六八、一五〇	二二、六七六、六〇〇	五、七三六、四四〇	五、四九五、〇三〇
一八五〇	八、二五三、四七〇	四二、五〇二、八〇〇	四、〇四九、四六〇	六、五八九、四八〇
一八六〇	一三、七四七、九四〇	八〇、〇四七、九七〇	五、五二六、九六〇	八、九四〇、一〇〇

またニュー・オルレアンス乃ちルイジアナ州よりの外國貿易の發達は次の表に明かに表はされてゐる。

一八一〇	一、七五三、九七〇
一八二〇	七、二四二、四一〇 <small>(ダラー)</small>
一八三〇	一三、〇四二、七三〇
一八四〇	三二、九九八、〇五〇
一八五〇	三七、六九八、二七〇
一八六〇	一〇七、八二二、五〇〇

要するに、千七百九十年から千八百六十年までに於ける商業の發達は、從來の如何なる時代にも見得ざるほどであつた。千七百九十年にはオハイオ河流域の征服がはじまり、湖水地方の湖水を利用する商業は千八百二十五年にその端緒を置いてゐる。毛皮取引商人は千八百十年—六十年の間にミシシッピ—河以西の地に侵入してつひに太平洋岸に達した。その他の商業も千八百五十年以後太平洋に漸次延びた。

(ロ) 外國貿易 (Foreign Trade)

第六章 資本主義の胎生期

千八百十五年ヨーロッパの戦亂が鎮まるとともに、ヨーロッパ諸國の貿易は再び盛となり、アメリカもそれらの諸國と通商條約を締結して大に貿易に従事した。千八百二十年から四十年までの期間は多くの點に於いて、アメリカ商業史の上に於ける最も榮えたる時期であつた」(註二十四) 千八百二十六年にはアメリカ生産物の九十二パーセントが貿易せられたと言はれる。造船術も進歩し、捕鯨業を獨占し、大西洋の船運に貢献する所大であつた。かくのごとき貿易繁榮時代にあつたつて將來の貿易の發達を妨ぐる多くの事實が生じつあつた。關稅の設置に伴ふ船材の高價になつたことはアメリカの造船業を頓挫せしめ、資本家たちは、海外貿易に投資するよりも内國の諸産業に投資する方が有利なりとして、海外貿易に無關心の態度を示した。これらのことは、アメリカ造船業の發達、アメリカ外國貿易の進展を阻碍することすくならざるものがあつた。

當時アメリカは快帆走船(Clipper)を利用して、外國貿易に従事し、イギリスの商船をその速力に於いて凌駕したが蒸氣を船舶に利用し、木材の代りに鐵材を利用することに於いては、アメリカは躊躇し、イギリスのために凌駕された。千八百四十年にはイギリスのキューナード會社(The Cunard)は、イギリス政府援助のもとに、鐵材・蒸氣を利用する汽船をもつて外國貿易及び

郵便物輸送を行つた。

アメリカの海外貿易は、輸出禁止および千八百十二年の第二獨立戰爭のために一時停滯した。しかし平和克復後は再び盛となつたが、千八百十八年ごろから三十年ごろまでは再び外國貿易が停滯した。それは關稅政策、内國に於ける諸産業の發展に伴ふ投資家の外國貿易に對する無關心、イギリスに於ける穀物條例(Corn Law)の通過、ヨーロッパ諸國の保護關稅の設置等による。しかし、棉花生産の發展(棉花は當時のアメリカ輸出の約半分を占めてゐた)、外國資本家のアメリカ投資のために、千八百三十六年には三億ダラーの外國貿易額を示して從來では最高の額に達したが、千八百三十七年の恐慌のために一億二千五百萬ダラーに下つた。しかし千八百四十七年以後六十年までは、千八百五十七年の恐慌を除いて、外國貿易はますます發達した。千八百六十一年には外國貿易總額六億八千七百八十萬二千七百七十六ダラーに達し、そのうち輸入は三億五千三百六十一萬六千九百九十九ダラー、輸出は三億三千三百五十七萬六千五百七十七ダラーを占めた。これら輸出品のうち、半分は棉花、地金、農産物、加工生産物が三分の一を占めた。いま輸出、輸入の構成をパーセンテージをもつて表示すると次のごとくなる。(註二十五)

	輸		出		輸	
	生産原料品	加工を要する生産品	すぐ消費する生産品	すぐ消費する生産品	輸入	輸出
一八二〇	六〇・四	九・四	五・六	五・八		
一八三〇	六三・三	七・〇	九・三	五・九		
一八四〇	六七・六	四・三	九・四	四・〇		
一八五〇	六三・二	四・四	一三・七	四・九		
一八六〇	六三・三	三・九	一一・三	四・六		

外國貿易の主要なる輸出港は、ニュー・ヨーク、ニュー・オルレアンス、ボストン、ボールテイモア、モービル、チャールストン、フィラデルフィア等であつた。

イギリスが西インド諸島とのアメリカの貿易を禁止した後、ニュー・イングランドは直接に東洋と貿易を開始したが、千八百六十年までにはいまだ大なる發展を見なかつた。アメリカ商品の輸出先の重なるものはイギリスで、三十パーセント乃至五十パーセントを占めた。その他主要な

る輸出先は、ハンザ同盟諸都市およびドイツ、オランダ、フランス、スペイン、アルゼンチン、チリ、ペルー、ブラジル等であつた。南アメリカへの輸出は千八百五十年には六百萬ダラーでその約半分はブラジルへ向つてなされた。中央アメリカへの輸出額は十五萬ダラーであつた。

以上、内國商業、外國貿易について大體の輪廓をのべた。次に、商業全體について大なる影響を與へた二つの事實についてのべる。

その一つはアメリカの關稅制度 (Tariff System) であり、他は千八百六十年までのアメリカの恐慌史である。

(イ) 關稅制度。ハミルトンはかつて保護關稅制度を高調したが、當時は單に國家收入を増加させるためになへたのに過ぎなかつた。

千八百十二年の戰爭中に國內産業が非常に發展したが、戦後ヨーロッパ諸國との商戰にアメリカが敗るるや、ここに保護關稅案が提唱された。クレイ (Henry Clay) を首領とするアメリカ國民主義者は、保護關稅は産業の發展を助長し、従つて工業都市を勃興せしめ農業生産物の市場を

開拓するがゆゑに、それは國家の繁榮にとつて必須なることを力説した。木棉、羊毛、鐵を保護する千八百十六年の關稅は、諸州が支持して成立した。續いてこの關稅を擴張する千八百十八年および千八百二十四年の關稅法が議會を通過した。しかしこの時には、すでに千八百十二年の戰爭後十數年を経過し國民主義も衰へ、各州の利害が衝突しはじめたので、關稅案についても意見の相違を來した。千八百二十八年に工業保護關稅が工業家達によつて提唱され、議會を通過したが、これは大統領選舉に利用せられたもので各方面よりの批難が多かつた。千八百三十二年に更に關稅法が提出されたときには、南部の反對おほく、サウス・カロリナ州のごときは關稅廢止法案(Nullification Ordinance)を發布したくらゐである。そこで各地方に、保護關稅論者と自由貿易論者との間に衝突がおこり、叛亂が勃發したので、千八百三十三年に、兩者を協調する法 (Compromise Tariff of 1833) が出來た。ホイッグ黨は千八百四十二年更に、もとの千八百三十二年の關稅にもどしたが、デモクラットは千八百四十五年のウォーカー關稅 (Walker Tariff) によつて、ホイッグ黨案を葬り、千八百五十七年には關稅を更に低下せしめた。かくしてその後も、兩論者の論争は利害關係によつて激しく行はれた。この關稅問題は内國に於ける政争を劇甚なら

しめ、外國貿易、その他諸産業にも影響するところすくなくなかつた。

(ロ) 恐慌。資本主義制度の發達は、必然的に恐慌の危険を内在せしめ、勃發せしむる。いまや、資本主義上向線上にあるアメリカも、從來のカタストロフィー以外に、周期的な恐慌におそはれる運命を有つた。千八百六十年までのうちに三回の大恐慌がアメリカの經濟界を驚愕せしめた。第一回の恐慌は千八百十九年に來つた。この恐慌の直接の原因と目すべきものは、千八百二十年戰爭中の工業のあまりの發展、西部地方に於ける過度の土地投機、ヨーロッパ市場の喪失と外國貿易に於ける他國との激争、第一合衆國銀行没落後に於ける多くの山師銀行の跳梁等である。第二回の恐慌は千八百三十七年に來つた。その主なる原因は、道路、運河等のあまりに莫大な建設、西部地方の過度の土地投機、第二アメリカ合衆國銀行の没落等であつた。その他の原因としては、アメリカの重大な御得意であるイギリスの二大銀行の破産、千八百三十五、三十七、三十八年に於ける農業不作、千八百三十六年に於ける政府の金銀以外の支拂拒絕等が算へられる。千八百四十年代に至つて、經濟界は順調に歸り、千八百四十八年のカリフォルニア金礦の發見は産業界を更に膨脹せしめ、工業おこり、西部土地の發展は更に盛となり、鐵道の敷設相次いだ。

かゝる繁盛の反動として千八百五十七年には又第三回の恐慌がおこり、経済界の機構を混乱せしめた。

- (註一) Wells, *Industrial History of the United States*, p. 151.
- (註二) Bogart, *Economic History of the United States*, p. 128—130.
- (註三) Faulkner, *Economic History of the United States*, p. 75.
- (註四) Lippincott, *Economic Development of the United States*, p. 156.
- (註五) Faulkner, *Ibid.* p. 82.
- (註六) Lippincott, *Ibid.* p. 158.
- (註七) Bogart, *Ibid.* p. 191.
- (註八) Lippincott, *Ibid.* p. 159.
- (註九) Lippincott, *Ibid.* p. 160.
- (註十) Bogart, *Ibid.* p. 193.

- (註十一) Lippincott, *Ibid.* p. 149.
- (註十二) Lippincott, *Ibid.* p. 154.
- (註十三) Lippincott, *Ibid.* p. 152.
- (註十四) MacGill, *History of Transportation in the United States before 1860*, p. 18.
- (註十五) Wells, *Ibid.* p. 171.
- (註十六) Faulkner, *Ibid.* p. 113.
- (註十七) 石濱知行著、『資本主義の成立とそれ以後に於ける経済の發展』(経済学全集第三十二卷)、第二九六—二九七頁。

- (註十八) Lippincott, *Ibid.* p. 173.
- (註十九) Bogart, *Ibid.* p. 180.
- (註二十) Lippincott *Ibid.* p. 221.
- (註二十一) Bogart, *Ibid.* p. 181.
- (註二十二) Lippincott, *Ibid.* p. 224.

(註二十三) Wells, Ibid. p. 194.

(註二十四) Faulkner, Ibid. p. 142.

(註二十五) Lippincott, Ibid. p. 290.

第七章 資本主義の爛熟期

第一節 南北戦争前後

千八百六十一年から六十四年までのアメリカ南北戦争 (Civil War, Secessions Krieg) は、アメリカ経済史上より見れば、一の重大なる劃期的の一大事件であつた。フォールクナーの言ふがごとく「南北戦争はアメリカに於ける産業革命を生産しはしなかつたが、工業發展の速度をはやめ、新時代を創始したものだといふことが出来る。たしかに、政府の政治的統制は戦争中農業的利益から工業的利益にうつり、その状態はながくその通り続いたのである」(註一) またベヤードの言ふがごとく「南北戦争は政治上の舊舞臺を急激に變化せしめた。この戦争は工業および鐵道敷設に一大刺激を與へた。戦争中に制定せられた關稅法は外國との競争に於いて工業者にはなほだしい保護を與へた。軍需品、鐵、鋼鐵、鐵道材料、織物、食料品に對する需要は北部に於いて各種の

企業を促進し、かつ財政上の投機、政府給與品の請負、土地の拂下げ等によつて生れた大富豪は戦争終了後の産業の發展を計畫せんために莫大なる資本を個人の手に掌握したのである」(註二) またこの戦争の結果として「北部の工業および商業資本主義は南部の農業貴族主義に打克つた」のである。(註三)

従つて南北戦争は、アメリカ資本主義發達のテンポを急速に促進せしめた點に於いてアメリカ史上重要な地位を占める。

南北戦争の原因は、南北兩部に於ける經濟的基礎の相違より發生した。北部には諸工業鑛業等の大部分が行はれ、南部では専ら農業が行はれた。それら主要産業の相違及びそれに必然的に隨伴する諸條件の相違が、兩部分の利害關係を背反せしめたのである。いまそれらの條件の相違する點を指摘する。

(イ) 奴隸制度。アメリカに於ける勞働力の不足から、アフリカの黒人を奴隸として輸入しはじめたのは遠く千六百十九年の昔である。これら輸入せられた奴隸は大部分南部の農業地帯に於いて、米、藍、煙草等の栽培に於いて使用せられ、それは千八百年度に於いて急激に増加した。

しかし、前にもすでにのべた通り、煙草栽培業が一時おとろへ、奴隸に對する需要が減少し、苛酷なる勞働制度に對する社會の非難も増加したので、千八百八年にはアフリカよりの奴隸輸入は法律をもつて禁止さるるに至つた。しかし、千七百九十三年にホイットニーが綿繰機を發明し、つづいてそれに幾多の改良が加へられて一般に使用せらるるに至るや、棉花の生産は急激に増加し、煙草に代つて棉花栽培が南部地方に行はるるに至つた。而して棉花の生産はアメリカ合衆國全體の生産にとつても主要なる地位を占むるに至つた。棉花栽培は、千八百六十年までに南部大西洋岸のみならず南西部方面、テキサス方面にまで發展し、その生産額は千八百四十年から六十年の間に約三倍の増加を示した。棉花栽培の發展は當然それに要する勞働力の増加を必要とした。棉花栽培はその行程がすこぶる簡單であり、力を要する事大であつたので、知識的な勞働者よりもむしろ無智でも力のある盲從的な勞働者をより適當とした。その點に於いて黒人奴隸は最もそれに適したる勞働者であつた。そのために奴隸制度は再び復活した。奴隸輸入は法律で禁止されたるにもかゝはらず (一) 黒人の密輸入 (二) すでにアメリカに輸入せられた黒人の自然の出生による増加 (三) 従來奴隸を使用した但现在に至つて不必要となりし地方例へばマリーラ

ンド、ケンタッキー、ヴァージニアよりの他州への奴隷輸出等によつて、奴隷の数は増加してそれが南部地方の棉花栽培地に集中せられた。『奴隷制度の發展が棉花の發展に如何に依存するかは棉花栽培地方に於ける奴隷の集中によつて容易に示しうる。千八百四十年には奴隷人口の三分の二以上が棉花栽培を行へる十州に存在し、千八百六十年には約四分の三が同じ地方に存在してゐた。』(註四)南部に於ける奴隷絶対數も亦増加した。

一七九〇年	六七七、八九七
一八三〇年	二、〇〇九、〇四三
一八六〇年	三、九五三、七六〇

千八百六十年に於ける奴隷の人口は、全人口の三分の一を占めてゐたことによつても奴隷の人口が如何に大部分を占めてゐたかが推察し得る。

奴隷に對する需要は奴隷の價格を騰貴せしめた。千七百九十八年には二百ダラー、千八百六十年には七百ダラー、その後最高二千ダラーにて賣買せられたこともあつた。奴隷はかくのごとく、

南部に多數集中して使用せられたが、ここに注意すべきことは、それらの奴隷が少數の貴族主義者によつて使用せられてゐたことである。乃ち千八百六十年に於いて三十八萬の白人に使用せられ、そのうち十萬人が十人以上の奴隷を所有してゐた。三十八萬人を除いた他の六百萬人の人は一人の奴隷をも有せざる小農であつた。多數の奴隷を有する富者はますます富み、奴隷を有せざる小農はますます貧困に陥つた。以上のべた様に北部は工業、礦業を主として、比較的知識的な労働者が雇傭せられたるにかゝらず、南部は奴隷制度を絶對的に必要なるものとした。ここに奴隷制度を維持するに頑強なる南部と、同制度廢止を主張する北部の間に鬭争の原因があつた。

(ロ) 關稅問題。北部は工業を主とし、従つて外國品の競争に於いて保護關稅を主張し、南部は反對した。千八百三十二年にサウス・カロリナが關稅法に對し『廢法案』と發布して、南部が勝利を占め關稅の低率を主張して以來、兩者の同問題に對する意見はつねに對立した。

(ハ) 棉花栽培を主とする南部はつねに廣大なる土地の擴張を必要とし、従つて西部發展、土地獲得の自由を主張せしに反し、北部はかゝる事に利害關係を有せざるがゆゑに、反對の主張を持し、南部に對立した。

以上三つの理由が、南北戦争勃發の直接の動機をなした。しかし、要するに、北部工業資本家の南部への侵入に對する南部大土地所有階級の反抗・嫉視が、根本的原因であつたと言つてよい。換言すれば、新興ブルジョアジーと封建的臭味を有する反動的南部貴族主義者との最後の闘争であつた。南部は北部の經濟的繁榮が南部の利益を侵害することを恐れて抗争するうち、千八百六十年に至つて、南部代表者が政治上の権力よりはなれて聯邦政府を支配し得ざるに至るや、武力をもつて立ちここに四年間に亘る南北戦争の勃發を見たのである。そして北部は南部に對抗して經濟的封鎖を斷行し、南部をして屈服せしめた。

南北戦争の結果は如何なる状態をもたらしたか。一言にして言へば、南部に對する北部の勝利であり、ブルジョアジーの勝利・躍進であり、近代的國家の成立である。いまこの戦争の結果を各方面より觀察すれば次のごとくである。

南部に於いては奴隸制度が破壊せられ、大栽培地制度が終末を告げたことである。大土地は小分けられて従来の労働者たりし黒人に小作せしむるに至つた。棉花栽培は依然として行はれたがそれは従來のごとき大栽培地制度たるプランテーション制度によつてではなく、近代小作制度に

類似する方法をもつて行はるるに至つた。

北部は南北戦争の結果、各種工業の發展に飛躍的拍車が加へられた。そのうちでも、羊毛、皮革工業、農業機械生産の發展はおどろくべきものであつた。千八百五十九年、ペンシルヴェニアに油井が発見せられて、諸種の礦業も著しく發展した。戦時中の自給經濟の必要は、北部の産業の獨自の發展を急速ならしめ、從來輸入せられてゐた商品も自國に於いて生産するに至つた。手工業も殆んど工場制度となり、機械の利用はいちじるしく促進された。

合衆國一般の農業の發展も著しかつた。外國に於ける不作、内國に於ける食料品・諸材料品の需要の激増は農業の進歩を刺激し、苜取機、打穀機の一般的採用、千八百六十二年のホームステッド法 (Homestead Act) の實施も農業の發達に寄與する大なるものがあつた。この法令の原則は、五年間の現實の移住者に無料で無占取地を與へることである。これは容易にそして利益あるやうに小資本をもつて農民に土地獲得を可能ならしむる法律であつて、土地は主として西部地方であり、統計によれば、千八百六十年以後二十年間に六千五百萬エーカーの土地が個人に與へられた。この法律の發布後、千八百八十年ごろには、西部發展の結果、國境の消滅 (End of Frontier)

を見るに至つた。

南北戦争中及び直後は、商品に對する需要の激増、通貨膨脹等のために物價の高騰いちじるしく、従つて利潤多く、資本家の利する所莫大なるものがあつた。従つて諸種の事業熱がおこり、そのうちでも鐵道敷設熱はことに甚しかつた。それに反して勞賃の増加は平行せずして、勞働者は勞賃の相對的減少に會ひ高い物價の爲に一層困窮した生活に追ひつめられた。この時代に至つて勞資の利害の對立は漸次明確を加へ來つた。戦争中に於ける高率なる消費税も勞働階級に對して更に苦しい負擔を加へた。

南北戦争中には多くの費用を必要としたので、聯邦政府は多くの財政に關する法令を發布した。これらの政策・法令は戦争終息後も廢止せられずして、その後ながくアメリカ合衆國の經濟政策の基調をなしたのであつた。

いまこれらの法令のうち重要なものを擧ぐれば、第一に千八百六十二年のホームステッド法がある。これは前述したからここには述べぬ。第二に、千八百六十二年のモリル法 (Morrill Act) がある。この法律は、農業および工業教育の必要を認識・強調したもので、爾後の農業教育、工

業教育機關の基礎をなしたものである。その三は、國民銀行法令 (National Banking Acts) である。議會は戦争中經費を得んとして、グリーンバック法定紙幣 (Greenbacks legal tender paper money) を四億六千萬ドルだけ印刷して發行したが、その發行に何等の準備金屬がなかつたので價値の變動いちじるしく、一ドル紙幣が四十三セントにて通用するがごとき暴落ぶりをしめたので、それらの通貨を統制するために議會は千八百六十三年から四年にかけて國民銀行條例を發布した。この法例は、従來行はれた混亂せる危険なる州銀行發行の銀行券を整理し、銀行券は金又は政府公債のごとき強固なる準備を必要とすべきことを規定し、合衆國內に額面通り通用すべきものなることを定めた。この條例は、従來多く存したいかさま銀行 (Wild Cat Banks) を一掃した點に於いて大なる效果を得た。

次に政府は、高率なる關稅法を發布した。千八百五十七年には、従來の高率なる關稅を排して自由貿易となすべきやうに關稅法が訂正されたが、南北戦争始まるとともにこの主義は放棄されて、再び高率なる關稅法が採用された。戦争の初期に議會は先づ輸入税を課し、國家收入増額の必要より更に稅率の高進、課稅物件の増加を行つた。戦争の末期には、課稅物件大に増加し、木

綿、羊毛、絹、鐵製品、羊毛製品等は高率の保護關稅で保護された。

又關稅のみならず、國內品に對しても稅を課徵することが千八百六十五年より行はれた。消費稅 (Excise Taxes) 所得稅 (Income Taxes) 等がそれである。これらの諸稅は戰爭の終極とともに廢止されたが、酒精飲料、煙草等に對する消費稅、關稅はその後も維持された。

南北戰爭とは直接關係なきも、戰後に行はれた注目すべき事象として、千八百六十六年のロシアよりのアラスカ買収がある。買収當時は大して利益をもたらさなかつたが、その後この地に多くの石炭、金、木材等が産出され、漁業の好適の地なることが發見され、アザラシ (Seals) の漁獲いちじるしきことが明白となり、アメリカの一つの重要な富源をなすに至つた。のみならず對外的に言へば、アラスカ買収は實にアメリカの太平洋進出の第一歩をなしたものであると言ひ得る。その點からも注目すべき事件であつた。

南北戰爭は、かくして、この節の始に記したるがごとく、アメリカ資本主義發達史の主要なる一劃期となり、これを境として、商工業方面の發達はめざましき躍進を遂げたのであるが、それは後節に記することとして、ここでは、それらに洩れるべき、西部のその後の發展と人口の増加

の大體を粗描する。

(一) 西部發展運動のその後。千八百六十二年に發布された、土地獲得を容易ならしむるホームステッド法、外國人移住の増加、ミシシッピ河以西の富源、太平洋岸に於ける企業の發達、後で述べる交通機關殊に大西洋と太平洋とを連結する大陸鐵道の敷設等は、その後の西部發展運動發展の主要なる原因をなした。千八百六十年當時の國境線は、ミシガン、ウイスコンシンを経てミネソタ州に達し、南部はカンサス、テキサスに至つてゐたが、その後の西部發展運動は、アリゾナ、ネバダ、コロラド、南北ダコタ、モンタナ、ワイオミング、アイダホ、ウオシントン、ユタに及び、千九百年までには、太平洋岸に至るまでの土地は、全く移住せられ、ここに、西部發展運動は終つた。これ國境の消滅 (End of Frontier) と言はるる現象である。國境の消滅は、二つの意義を有する。その一は國內的の意義である。西部發展運動は、ミシシッピ以西の土地を開發する最大原因の一であつた。人口の流入とともに、農業は發達し、鑛山は發掘せられ、工業が建設せられ、交通網は新しい工業的需要を満足させるほどに發展した。この地方は今やアメリカ合衆國に於ける食料品および鑛物の大部分の資源となつてゐる。森林、原野、鑛山の開發、利用

は、この地方を富裕ならしめたるのみならず、他の地方——その完成品はミシシッピ河以西の地の粗原料と大部分交換せられるのであるが——の工業を繁榮ならしむるに貢献することすべからざる大であつた。(註五)その二は對外的の意義である。乃ち國境の消滅とともに、アメリカは、今度は手を外國に延すに至る動機が與へられたことである。乃ち、國內の全土の開發は更に國外地への發展を引きおこし、アメリカ帝國主義の端緒をなしたのである。

(二) 人口の増加。商工業の發達、西部の發展、移民の増加は、合衆國の全人口の増加をおどろくべく増大せしめた。次に統計をかゝけよう。

パーセンテージ		
85.6	14.1	0.3
86.2	13.5	0.2
86.5	13.1	0.3
87.5	11.9	0.6
87.9	11.6	0.5
88.9	10.7	0.4
89.7	9.9	0.4
白 人	黒 人	そ の 他

年度	人 口 数			
	1860	31,443,321	26,922,537	4,441,830
1870	39,818,449	34,337,292	5,392,172	88,985
1880	50,155,783	43,402,970	6,580,793	172,020
1890	62,947,714	55,101,258	7,488,676	357,780
1900	75,994,575	66,809,196	8,833,994	351,385
1910	91,972,266	81,731,957	9,827,763	412,546
1920	105,710,620	94,820,915	10,463,131	426,574
調 査 年 度	全 人 口	白 人	黒 人	印 度 人、日 本 人、 支 那 人 お よ び そ の 他

人口の増加につれて、都會と地方との人口密度は激變して、千八百八十年度では全人口に對する都會の率は地方のそのの四分一、千八百九十年には二分一弱、千九百年にはほぼ同等となり、千九百二十年には都會の方が地方より大となつた。簡單なる統計を左にかゝける、

國 全 人 口		
1900	1890	1800
75,994,575	62,947,714	50,155,783
30,797,185	22,720,223	14,772,438
45,197,390	40,227,491	35,383,345
100	100	100
40.5	36.1	29.5
59.5	63.9	70.5

	合 衆	
	1920	
總 數	105,710,620	
都 會	34,304,603	
地 方	51,406,017	
パーセン テージ	100	
都 會	51.3	
地 方	48.7	

商工業の發達、交通機關の建設とは、勞働者階級の人口を激増せしめた。

例へば、千八百五十年には總人口二千三百萬人中勞働者は約九十五萬人であり、千八百六十年は約三千萬中百三十萬人であり、千八百七十年には三千八百萬人中二百萬人であり、千八百八十年には五千萬人中二百七十萬人であり、千八百九十年には六千三百萬人中四百二十五萬人であり、千九百三十年には七千六百萬人中五百三十萬人であり、千九百十年には九千百萬人中六百六十萬人であつた。

人口の増加につき、特に留意するを要すべきは、外國よりの移住民の問題である。工業の發達、

西部の開発に伴ふ勞働力に對する需要は、内國に於ける勞働力をもつてしては充し得なかつた。元來合衆國は昔から常に勞働力の不足を嘆じ、遂には白人奴僕、黒人を海外より輸入せざるべからざるがごとき勢を馴致したのであるが、南北戦争以後の各種産業の飛躍的發展は、更にこの嘆を深くした。ここに外國人のアメリカ移民の増加の原因があるのであるが、その他直接の原因としては、勞賃がアメリカでは他の諸國より高いこと、出世すべき機会が多くめぐまれてゐること、勞資對抗が他國よりすくないこと、土地の獲得が容易なること等がある。アメリカへの移民の増加は次表のごとし。

一八六一—一八七〇	二、三四、八二四
一八七一—一八八〇	二、八二二、一九一
一八八一—一八九〇	五、二四六、六二三
一八九一—一九〇〇	三、八四四、四二〇
一九〇一—一九一〇	八、七五五、三六六
一九一一—一九二〇	五、七三三、九一一

南北戦争中、千八百七十三年の恐慌には、移民はやゝ減少したが、その後益々増加して、千八百六十一年から千九百十六年までには、二千七百七十七萬二千人に達した。而して、移民の大部分は、イギリス、ドイツ、スカンジネヴィア、フランス、ベルギー、オーストリア、ハンガリー、イタリー、ロシア、ギリシヤ、ルーマニア等からであつた。

なほこれらの移民の外に、支那人日本人移民がある。千八百四十八年のカリフォルニア金礦の発見は、支那人移民を招致した。千八百五十一年から六十年までの間には、支那移民の数は、四萬一千三百人に達し、千八百七十一年から千八百八十年には、十二萬三千二百一人に及び、この時期が最も多數の時であつた。千八百八十二年に支那人排斥法案が通過して、以後減少した。日本人移民の数は、千八百九十九年以前は支那人と混ぜられて明瞭でないが、千九百一年から十年までの間には、約十三萬人に達した。日本人排斥案もその後、度々議會および西部諸州の問題となつたことは人の知る通りである。

第二節 工業・商業の飛躍的發展

南北戦争以来のアメリカ経済史のうちで最も重要な特徴は、工業の發達であらう。アメリカの工場制度は千八百十二年頃から盛となり、漸次發展して南北戦争を期として跳躍的發展を見せたが千八百五十年ごろは、生産はなほ家族的な或は個人的な組織のもとで行はれることも多く、千八百八十年に至つてもアメリカ國富の第一のものは農業であつていまだ工業ではなかつた。八十年代に至つて初めて工業がアメリカ立國の基礎となり、工業的生産が農業的生産を凌駕するに至り、爾後工業の發展は全く驚異的であり、第二世紀に入るや、イギリスを超えて世界第一の工業國になつた。次に工業發達の統計を示すであらう。(註七)

	一八五九	一八七九	一八九九	一九一九
人口	三二,四四三,〇〇〇	五〇,一五五,〇〇〇	七五,九四四,〇〇〇	一〇五,七一〇,〇〇〇
農産物價値	—	二,三三三,〇〇〇,〇〇〇 ダラー	四,七七七,〇〇〇,〇〇〇	三,七八三,〇〇〇,〇〇〇
工業生産物價値	一,八八六,〇〇〇,〇〇〇 ダラー	五,三七〇,〇〇〇,〇〇〇 ダラー	一一,〇〇七,〇〇〇,〇〇〇	六二,四一八,〇〇〇,〇〇〇
投資額	一,〇一一,〇〇〇,〇〇〇 ダラー	二,七九〇,〇〇〇,〇〇〇	八,八九五,〇〇〇,〇〇〇	四四,六八八,〇〇〇,〇〇〇

勞賃支拂額	三〇八,八七九,〇〇〇 ダラー	六四八,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇八,〇〇〇,〇〇〇	一〇,三三三,〇〇〇,〇〇〇
勞賃取得者	一,三三三,〇〇〇	二,七三三,〇〇〇	四,七三三,〇〇〇	九,〇六六,〇〇〇

フォルクナーは、かゝるアメリカの工業的進歩を可能ならしめた根本的原因として、

- 一、粗原料の豊富
 - 二、動力源泉の豊富
 - 三、勞働力供給の増加
 - 四、交通の發達
 - 五、保護關稅の存在
 - 六、勞働力の不足による機械の發明、使用の増加
 - 七、傳統のないこと
 - 八、工業と農業との關係密接にして、農業的生産物豊富なること
- 等の八個を擧げてゐる。(註八)

いま、工業的發展を述ぶる前に、それを可能ならしめた原因の一としての鑛業の發達を一瞥しよう。

(一) 各種鑛業とその中心地。いま左に千九百二十一年に於けるアメリカの採掘鑛物とその主要なる採掘中心點の表を掲げて、もつて、その一般をうかがはう。

鑛物	主要採掘地
アルミニウム	ニューヨーク、ノース・カロライナ、テネシー
アスファルト	カリフォルニア、テキサス、オクラホマ、イリノイ
鐵礬土	アルカンザス、ジョルジア、アラバマ、テネシー
セメント	ペンシルヴェニア、インディアナ、カリフォルニア、ミシガン
粘土	オハイオ、ペンシルヴェニア、ニュー・ジャージー、イリノイ
粗粘土	ニュー・ジャージー、ミズーリー、ペンシルヴェニア、ジョージア
生産物	ペンシルヴェニア、ウエスト・ヴァージニア、イリノイ、ケンタッキー
瀝青炭	ペンシルヴェニア
無煙炭	ペンシルヴェニア

銅	鐵	鉛	石	マンガン	自然	石	燐	鹽	銀	硫	亞		
鐵	鐵	鐵	灰	鐵	瓦	油	鐵	鐵	鐵	鐵	鉛		
アリゾナ、ミシガン、アラスカ、モンタナ	カリフォルニア、アラスカ、コロラド、サウス・ダコタ	ミネソタ、ミシガン、アラバマ、ニュー・ヨーク	ペンシルヴェニア、オハイオ、インディアナ、イリノイ	ミズーリー、アイダホ、ユタ、オクラホマ	ペンシルヴェニア、オハイオ、マサチューセツツ、ミズーリー	モンタナ、アルカンザス、ヴァージニア、コロラド	ウエスト・ヴァージニア、ペンシルヴェニア、オクラホマ、オハイオ	カリフォルニア、オクラホマ、テキサス、カンザス	フロリダ、テネシー、ケンタッキー、アイダホ	ミシガン、ニュー・ヨーク、オハイオ、カンザス	ユタ、ネヴァダ、モンタナ、アイダホ	テキサス、ルイジアナ、ネヴァダ、ユタ	オクラホマ、ニュー・ジャージー、カンザス、モンタナ

(二) 石炭。今より約百八十年以前には、石炭はまだ世界に知られてゐなかつた。アメリカでは千八百三十七年には約一百万トンを探掘したが、千八百四十年以後殊に著増した。石炭はあらゆる工業の母で、工場に於ける燃料、鐵その他の礦物の生産に必要な材料、點燈のためのガス及び熱の生産、汽車汽船の燃料等に使用せられた。探掘法には多くの動力、機械が使用された。アメリカの石炭産出額の統計は次のごとくである。(瀝青炭及び無煙炭を包含して)。

年 度	總 ト 数
一八六〇	一四、六一〇、〇〇〇
一八七〇	三三、〇三三、五〇〇
一八八〇	七二、四八一、五〇〇
一八九〇	一五七、七七〇、九〇〇
一九〇〇	二六九、六八四、〇一〇
一九一〇	五〇一、五九六、三〇〇
一九二〇	六四八、六六五、一〇〇

(三) 石油。石油は第十九世紀の中葉以前にも知られてゐたがそれは工業に應用せられたのではなかつた。初めは、ペンシルヴェニアの藥種商によつて藥品として販賣されたにすぎなかつた。千八百六十一年以來それは點燈用に使用さるるに至つた。七十年代にロシアで石油が燃料として使用され、千八百八十二年には同じくロシアで石油が汽關車の燃料として使用せられて以來、アメリカでも同じ用途に利用され續いて汽船にも應用せらるるに至つた。だが石油の用途は、ガソリン (Gasoline) ナフタ (Naphtha) として精製せられて、自動車、ディーゼル・エンジンに利用せられて重要な動力となるに及び、經濟的にも軍事的にも異常なる必要物とさるるに及んだ。アーノットはその著『石油の政策』(P. Arnot, The Politics of Oil) に於いて石油の用途の重要性につき次のごとく言つてゐる。

『第十九世紀までは、バラフィン石油の主要なる産物であつた。然るに新世紀は、石油工業に一の革命をもたらした。先づ第一に、内燃發動機の發明は、石油の比重小なる部分に一の用途を見出した。けれども精練の殘滓、即ち、器の底の比重大なる部分は依然として其まゝ殘滓であつた。然るに、二つの改良策がすべて之を變更した。第一に、ディーゼル・エンジンが發明された。第

一二に、石油は美事な散滴となつて石油燃料に代つて蒸汽機関の中で、燃焼されるやうになつた。又重油は之を強く壓搾すると、恰度ベトロールのやうに爆發するといふ事が発見された。かくてディーゼル・エンジンには莫大なる新需要を喚起したが、それは、最初据置装置に、後には船舶に使用された。この發動機船の数は、間断なく増加しつゝある。ロイド船舶登記簿によると、千九百十四年には、全噸數の三・一〇パーセントが驅逐され、千九百二十四年には二九・八八パーセントが驅逐された。

しかし一層重要な事は、工場機關車又は商船及海軍のいづれかに於ける燃料としての石油の用途である。……石油は石炭に比すると數等の利益があつた。先づ第一に、石油の能率は同量の石炭四に對し七に匹敵することが證明された。……かくて、帝國主義戰爭の當初に於いて帝國海軍の船艦の約三十パーセントが燃料石油を備へてゐた。しかるに休戦までにその比例は九五パーセントに達した。海軍を除外すれば増加率は一層大である。……更に今一つの利益は、港灣に於ける燃料の節約であつた、といふのは、石油の積込よりも遙かに迅速になし得るからである……」(註九)

次にアメリカ市場に現はれた石油産額の表をかゝける。

年 度	四十二ガロンの樽數	價 値 (ダラー)
一八六〇	五〇〇,〇〇〇	四,八〇〇,〇〇〇
一八七〇	五,一六〇,七〇〇	一〇,五〇三,七〇〇
一八八〇	二六,二六六,一〇〇	二四,六〇〇,六〇〇
一八九〇	四五,八三三,五〇〇	三五,三六五,一〇〇
一九〇〇	六三,六〇〇,五〇〇	七五,九九九,三〇〇
一九一〇	二〇九,五五七,一〇〇	二七,八九九,六〇〇
一九二三	七三三,二六〇,〇〇〇	九三〇,七六〇,〇〇〇

なほ、今日ではアメリカは、メキシコと合せて現在總産額の八十五パーセントを占めてゐる。他の諸國の石油産額と比較するときは次のごとくなる。(單位千ガロン)(註十)

年 度	世界總産額	アメリカ合衆國	メキシコ	イギリス
一九一三	五五、一七五	三五、四九二	三、七七三	一、五五二
一九一四	五八、三八四	三七、九六六	三、八五三	一、五二六
一九一五	六一、七二〇	四〇、一七〇	四、八三三	一、六七四
一九一六	六五、五二二	四三、六六六	五、九六二	一、七七八
一九一七	七一、七四五	四七、九〇二	八、二三一	一、七五二
一九一八	七二、六八九	五〇、八四六	九、三三三	一、八三六
一九一九	七九、七〇九	五四、〇五二	一三、三六三	一、八五五
一九二〇	九六、六五六	六三、二七五	二二、六七五	一、九三三
一九二一	一一一、一四九	六七、四五四	二九、六五五	一、九六八
一九二二	一三三、六二〇	九七、六七七	二六、〇三九	二、三三三
一九二三	一四四、四〇〇	一〇七、六六四	三二、三六一	二、四三〇

(三) 鐵鑛、鐵は石炭とともに工業發達に缺くべからざる素材である。近代資本主義の發達を可能ならしめたものは實に鋼鐵である。機械、機關、鐵道、橋梁すべてのものは鐵鑛より精練せられたるものよりなる。その點で、それらの素材としての鐵鑛の採掘は、アメリカ工業の發展の上で重要な地位を占むる。いま、アメリカに於ける鐵鑛採掘額をかゝれば次のごとくである。

年 度	産 額 (ロンダ・トン)
一八六〇	二、八七三、四六〇
一八七〇	三、八三一、八九〇
一八七九	六、三〇七、八八三
一八八九	一四、五一八、〇四〇
一九〇〇	三三、五六七、四一〇
一九〇九	五一、九四七、二二〇
一九一九	六一、一七三、二五〇

尙ほ、鋼鐵その他は後述製鐵業の所で述べるであらう。

(四) 銅。千八百九十年以來、銅の生産は、全世界に於いて最高のものとなつた。千八百六十年に於ける電氣工業の發生以來、銅の生産は激増し、また、眞鍮工業、自動車工業の發生は銅に對する需要を更に促進した。多くの銅鑛の發見、従つて銅價の下落は、銅を一般生産界に廣く利用せしむるに至つた。銅の生産額の發展は次の統計の示す通りである。

年 度	生産高 (ポンド)	生産額 (ダラー)
一八四五	三三四,000	三,七一九,000
一八六〇	一六,二八,000	五,九七七,000
一八七〇	二八,三三,000	一三,九四三,000
一八八〇	六〇,四八〇,000	四〇,五三三,000
一八九〇	二五九,七三,000	一〇〇,六一五,000
一九〇〇	六〇六,二七,000	一三七,一八〇,000
一九一〇	一,〇八〇,一六〇,000	

一九一五	一,三八八,〇〇〇,000	
一九一六	一,九二七,八五〇,000	
一九一九	一,二〇九,六二五,000	二二〇,九四五,000
一九二三	一,四三三,三三〇,000	

その他、鉛、亜鉛、金銀、石灰等についても述ぶべきであるが、以上のべた石炭、石油、鐵鑛、銅が主要なる四大鑛物であるが故に、それだけの敘述にとどめて、他は略す。たゞここに、すべての鑛物をこめての五年毎の平均年産採掘額をかゞぐれば次の表のごとくなる。

年 度	金 (ダラー)	非 金 (ダラー)	そ の 他 (ダラー)	總 (ダラー)
一八八〇	一八七,八八〇,八〇〇	一七三,五八一,九〇〇	六,〇〇〇,〇〇〇	三六七,四六二,七〇〇
一八八五	一九一,一三三,五〇〇	三二九,一五三,一〇〇	五,九〇〇,〇〇〇	四六六,一七七,六〇〇
一八九〇	二四八,一三三,一〇〇	二九一,三六一,三〇〇	九〇〇,〇〇〇	五三〇,四七四,四〇〇
一九一五	二四四,四四四,五〇〇	三四六,八五七,四〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	五九一,三〇一,九〇〇

一八九六—一九〇〇	三六五, 四〇一, 〇〇〇	四六二, 三四〇, 七〇〇	一, 〇〇〇, 〇〇〇	八七五, 七四三, 〇〇〇
一九〇一—一九〇五	五八〇, 〇〇〇, 五〇〇	八三三, 八二六, 四〇〇	七六〇, 〇〇〇	一, 三九二, 六三三, 〇〇〇
一九〇六—一九一〇	七六九, 一六六, 九〇〇	一, 一八九, 六七九, 三〇〇	三三〇, 〇〇〇	一, 八八九, 〇七六, 一〇〇
一九一一—一九一五	八三三, 八七六, 二〇〇	一, 三九九, 〇〇五, 八〇〇	一, 八八八, 〇〇〇	二, 三三三, 七〇二, 〇〇〇
一九一六—一九二〇	一, 七九六, 四七八, 二〇〇	五, 二二三, 七五〇, 六〇〇	六, 九二〇, 三三八, 八〇〇

なほ、各種礦物の産出量をパーセンテージを以て表示すれば次のごとくである。年度は千九百十九年である。

瀝青炭	三六・三	鉛と亜鉛	二・四
石油及自然ガス	二九・五	金・銀	二・二
無煙炭	一一・五	石灰	一・七
鐵礦	六・九	その他	三・八
銅	五・七		

次に、工業並に商業の發展を可能ならしめた第二の條件としての交通の發展について略述する。

(一) 鐵道。千八百六十年から千九百十四年までは、アメリカ鐵道網の建設時代であつた。毎年平均約四千哩の鐵道が敷設せられた。千九百十年頃には、ヨーロッパ全土の哩數よりも大となり、全世界哩數の三分の一をアメリカが所有した。

年 度	哩 數
一八六〇	三〇, 〇〇〇
一八七〇	五三, 〇〇〇
一八八〇	九三, 〇〇〇
一八九〇	一六七, 〇〇〇
一九〇〇	一九九, 〇〇〇
一九一〇	三三〇, 〇〇〇
一九二〇	三三三, 〇〇〇

鐵道に對する敷設熱は多くの疑獄、不正事件、特權漁り等の事件を發生せしめ、そのために、

或は不用な、或は重複せる鐵道を敷設したがために經濟界を混亂せしめたこと多く、千八百七十年、千八百九十三年の大恐慌のごときは、鐵道の過剩敷設のために發生したと言はれ、殊に後者の場合には三萬哩の鐵道が破産のために放棄せられたと言はれてゐる。鐵道敷設にあつては、政府は、多くの利権、特權を與へ、土地を讓與し、資金をもつて扶助する等の獎勵策をとつた。この敷設熱は、過剩敷設、不良管理、不良財政、自動車の出現等のために、世界大戰前後にはやうやく下火となり、千九百十六年以後は、建設せらるるよりも廢棄せらるる哩數の方が増加した。千九百十三年には總キロメートルが四十一萬あつたのに、千九百二十二年には四十萬に減少する現象を見せてゐる。鐵道敷設についてこの時代に注目すべきは大陸横斷鐵道の開設である。すでに千八百四十年ごろ、ホイットニー (Asa Whitney) によつて計畫せられ、カリフォルニア金礦發見後は殊にかゝる鐵道に對する要望が盛となり、千八百六十二年、六十四年の修正案等によつて、議會は、ユニオン・パシフィック鐵道會社 (Union Pacific Railroad Company) を建設し、それにネブラスカ以西の鐵道敷設をなさしめ、カリフォルニアよりのセントラル・パシフィック (Central Pacific) 線と連絡せしめんとした。この工事は千八百六十九年に、兩線がユ

タ州のプロモントリー (Promontory) にて合したるときをもつて完成した。續いてノーザン・パシフィック (Northern Pacific) が議會によつて特許せられ工事に着手したが、會社の失敗、千八百七十三年の恐慌のために、やゝ遷延したが後ドイツ資本家ヴィラード (Villard) の援助をうけて、千八百八十三年に完成した。千八百八十四年には、グレート・ノーザン・システム (Great Northern System) が計畫せられ、千八百九十年にいたつては、トランス・ミシシッピ・ウエスト線が企畫せられた。今日では八個乃至十個の大陸鐵道が敷設せられてゐる。由來鐵道はブルジョア利権屋によつて喰物にされる歴史を有してゐる。今その一例として、ユニオン・パシフィック大陸横斷線工事にまつはるクレディ・モービリエ (Credit Mobilier) 事件を述べて見よう。ユニオン・パシフィック會社に關係せる漁利者流は、別にクレディ・モービリエなる會社を組織し、鐵道の利益を獨占的に掌握せんとした。このからくりを成就せんがために、會社はマサチューセッツ州代表議員オークス・アムスを通じて、議員を懐柔して株券を贈與した。その陰謀は遂に露見したが、アムスのみが議會の懲罰に附せられたるにとゞまつて、結末を告げた。この種の疑獄は、鐵道建設に常につきまとはつたもので、經濟界を毒するもの甚しきものがあつた。

(二) 河川および運河。鐵道網の建設は、河川及び運河の發展を梗塞した。距離、速力、運賃の運河もあまり利用されなかつた。議會は河川及び港灣法 (Rivers and Harbor's Bill) によつて十億ドルを支出して河川航行を補助せんとしたが充分目的を達しなかつた。鐵道は、もし競争せんとする河川航行、運河ある時は、それを買収するの策をとつて、獨占を保持せんとした。しかし、千八百八十年、九十年代には、ルーズヴェルト (Roosevelt) の内國河川委員會 (Inland Waterways Commission) の設置、パナマ運河 (Panama Canal) の建設等があつて、内國の水運が商業の發展とともに、再び復活し、多くの小運河が開設せられた。

こゝで一言パナマ運河に觸れる。アメリカ商工業の發展に伴つて大西、太平兩洋を連絡する運河をニカラグア又はパナマを通じて建設せんとする希望・計畫は長い間の宿望であつた。カリフォルニアの金礦發見後はその希望がますます熾烈となつた。千八百五十五年にパナマを通過する一鐵道が敷設せられて東西兩洋連絡を助けた。千八百八十年代に一フランス會社が運河開鑿をなさんとしたが失敗した。やがてハワイはアメリカに合併せられ、スペインとの戦に克ち、ポルト。

リコ (Porto Rico)、フィリッピンを併有し、アジアとの交易は重要を加へて來たので、運河開設の必要はますます増加し、その結果イギリスとのヘイ・パンスフォート條約 (Hay-Pauncefote Treaty) によつて、運河開設權をアメリカが獲得し、續いて前記フランス會社の權利を買収して、千九百四年パナマ運河起工に着手し、十年後に最初の船舶が、この運河を通過した。この運河は、アメリカの資本主義的發展、帝國主義的發展にとり頗る重要な地位を占めてゐる。千九百二十年—二十一年の間に千百五十萬噸の貨物が、この運河を経由してゐる。(後述帝國主義の節參照)

(三) 電車。アメリカに於ける最初の電車は千八百八十四年にカンザス市に敷設せられた。それより以前、市街を通る交通機關は蒸汽又は馬力を動力として運轉せられてゐた。電車は始め、架空線車 (Overhead Trolleys) と言はれてゐた。一度開設せらるゝや、各地に熱狂的に迎へられて、都市内部又は都市と都市とを連絡する交通機關として利用せられた。千九百十六年には、四萬七千六百五十哩に達した。

(四) 自動車。アメリカに於ける自動車製造の濫觴は千八百九十年代の初期である。初めは富

裕なる人士の贅澤物であつたが、世界大戦後は一般に使用せられて、千九百四年には、二萬一千六百九十二臺であつたのが、千九百二十四年には四百三十二萬五千臺が生産せられた。完成生産物では今日自動車はアメリカ工業の最前線に立つてゐる。尙自動車については自動車工業の項を参照せられ度し。

以上、工業發展の前提條件としての二つの重要なもの、鑛業と交通機關とについて、一應略述するところがあつた。續いて、各種の重要工業について、若干の頁を割くであらう。

(イ) その概観。千八百四十九年に或るイギリスの著述家はイギリスとアメリカとの工業を比較して、次のごとく言つてゐる。「アメリカ合衆國は諸國民の總生産物の三分の一を生産し、穀物・麥に於いても三分の一を生産しつゝあるに拘らず、人口は六分の一よりなほすくない。……千八百四十年以後ヨーロッパの生産は二倍しただけなのにも拘らず、アメリカは二十倍に増加してゐる。ヨーロッパの生産物は半分は手工業によつて行はるゝにかゝはらず、アメリカの製品は殆んど全部機械による生産品である。」(註十一)だからアメリカの生産品はフランスの陶器や絹、東洋

の絨氈、日本の織物のごとき精巧なるもの、美術的なるものでない。またイギリスの羊毛織物や木綿織物のごとき高級のものでなくして、格一的な、大量の生産である。千八百十八年には、その大量生産は十八億八千五百八十六萬一千ダラーなりしにかゝはらず、千九百十九年には六百二十四億千八百七萬八千ダラーに達し、まさに三十四倍の増大を見せてゐる。千八百八十年より現代に至る間が最も工業の發達した時期である。千八百六十年には、工業生産品に於いてイギリス、フランス、ドイツに次いだが、千八百九十四年には、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの順序となつた。いま千八百六十年から千九百十九年までの生産統計を示すと次のごとくなる。

生産額 (ダラー)
1,885,861,676
3,385,860,354
5,369,579,191
9,372,378,843
11,406,926,701
20,672,051,870
24,246,434,724
62,418,078,773

年 〇 六 八 一										位順	生産價值 (ダラー)
印	砂	羊	皮	被	鐵	靴	木	本	麥		
刷、製	糖精製	毛製品	革	服	の鑄造機		材	綿製品	粉、玉蜀黍		
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
三、〇六三、〇〇〇	四、一四三、〇〇〇	六五、七〇六、〇〇〇	七五、六九八、〇〇〇	八八、〇九五、〇〇〇	八八、六四八、〇〇〇	九一、八八九、〇〇〇	一〇四、九二八、〇〇〇	一一五、七三六、〇〇〇	二四八、五〇〇、〇〇〇		

なほ、千八百六十年と千八百二十年とを對比して、各種工業の順列を示せば次のごとし。

年度	經營數	勞者 働數	資 (ダラー)
1860	140,433	1,311,246	1,009,855,715
1870	252,148	2,053,996	1,694,567,015
1880	253,852	2,732,595	2,790,272,606
1890	355,405	4,251,535	6,525,050,759
1900	207,514	4,712,763	8,975,256,496
1910	263,491	6,615,046	18,428,269,706
1915	275,791	7,036,337	22,790,979,937
1920	290,105	9,096,372	44,466,593,771

一		二		九		〇	
屠殺及ミート・パッキング	1	4,246,200,000					
鐵及鋼鐵	2	2,288,900,000					
自動車	3	2,277,000,000					
鑄造所及機械工場製品	4	2,269,500,000					
木綿製品	5	2,135,200,000					
麥粉、玉蜀黍	6	2,052,400,000					
精油	7	1,632,500,000					
造船材鋼鐵	8	1,456,800,000					
木材	9	1,377,700,000					
車輛及一般工場製作品	10	1,279,300,000					
婦人被服	11	1,208,500,000					
男子被服	12	1,162,900,000					
靴	13	1,152,000,000					

マン	14	1,151,800,000
羊毛製品	15	1,065,500,000

(ロ) 製鐵・製鋼業。千八百五十六年イギリス人ベッセマー (Bessemer) 及びムシエットによつて發明されたベッセマー法は千八百六十四年アメリカに輸入せられ、千八百六十五年、七十五年には、トロイ、ニュー・ヨーク、ピッツバーグ、ジョーンストン、クリーヴランド及びシカゴにベッセマー會社が設立せられ、鋼鐵の製造を行つた。そのためにベッセマー鋼鐵の産額増加し、千八百六十七年には二千六百七十九トン、千八百八十年には百萬トンのベッセマー鋼鐵を産出し、千九百六年には千二百萬の鋼鐵を産出した。ベッセマー法は未だ不完全な製鋼法で、鐵礦の中ではこの方法によつては利用し得ざるものあり、その後、トーマス及びギルクリスト (Messrs. Thomas and Gilchrist) 法が渡來して、それを改良したが、鋼鐵生産に更に大變革を與へたのは千八百六十七年アメリカ人ヘウィット (Abraham Hewitt) がイギリスより持つて來たオープン・ハース法 (Open Hearth) 一名發明者の名によつて命名されたマーティン法 (Martin Process) である。

ある。この法は、ベッセマー法を凌駕し、千九百八年以後は専らこの方法が使用せらるゝに至つた。鋼鐵の生産とともに、この鋼鐵を、使用しそれに力を加へた形態にするために、更に種々に鍛冶する事が必要である。その一の方法は鍛へること (Forging) であり、三十乃至四十噸のハンマーをもつて鍛へることで、第二の方法は壓搾 (Pressing) であり、これは水素壓搾法を用ひて密度をこまかくすることであり、第三の方法は輾動 (Rolling) で、これを以て種々の形態をつくることである。この三種の方法が行はれて鋼鐵の利用が更に躍進した。

鋼鐵製造に必要な銑鐵 (Pig Iron) の生産に千八百五十年衝風爐 (Blast Furnace) が利用せられ、爐はその後改良せられて一般に使用せられた。銑鐵の生産は千八百六十年には九十八萬七千噸、千八百九十年には九百三十五萬噸、千九百年には千四百一萬噸、千九百十年には二千七百七十四萬噸、千九百二十年には三千七百五十二萬噸に達した。千九百十九年には、鐵および鋼鐵の生産額は總計九十四億ダラーに達しアメリカ全工業生産物の十分の一を占めた。

(ハ) 纖維工業。こゝに纖維工業とは、木綿、羊毛、絹織物、メリヤス、編物類、亞麻、黃麻、染物、被服工業を指稱する。これらの生産も他の工業と同じく發達いちじるしきものがあつた。左

にその發達を示す二つの統計をかゝける。

年度	一八八〇	一八九〇	一九〇〇	一九一〇
經營數	四〇一八	四二七六	四三二二	五三三三
資本(ダラー)	四二二、七二二、四九六	七七七、七〇五、三三〇	一、〇四二、九九七、五七七	一、八四一、三四二、三三一
労働・雇傭者數	三八二、一三六	五二七、二七七	六六一、四五一	八八一、二八
材料費(ダラー)	三〇二、七〇九、八九四	四四七、五四六、四四〇	五二二、三四五、二〇〇	九九二、六三三、二九九
生産額(ダラー)	五三三、六三三、四八八	七五九、二六二、二八三	九三二、四九四、五六六	一、六八四、六三六、四九九

千九百十九年に於ける各種纖維工業生産物價值表。

木棉製品	11,117,171,000 弗
羊毛製品	1,027,454,000
メリヤス及編物	713,112,000

絹織物	六八、四六九、〇〇〇
染織工業及仕上業	三三、九六七、〇〇〇
絨氈	二五、二五三、〇〇〇
婦人被服	一、二〇八、五三三、〇〇〇
男子被服	一、二六二、九五五、〇〇〇
婦人ホーシ、レース	二五、七四四、〇〇〇
シヤツ	二〇五、三三七、〇〇〇
靴	二二四、〇五九、〇〇〇
男子裝飾物	一〇七、八三四、〇〇〇

(二) 電気機具工業。千八百六十年代には電気機具としては電信だけであつたが、千八百七十年以來多くの電気工業が発生し、ことに千八百七十一年來のエディソン (Thomas Edison) およびトムソン (Elihu Thomson) 兩氏の發明相次ぐに及び、電信機、電話器、電車、電気シグナル、電気モーター等の工業盛となり、更に電線、ダイナモ、その他多くの電気機具が出現し、その工業

が發展した。殊にアメリカには、それらの材料たる鐵、銅、鉛、アルミニウム、亜鉛等の産出が多かつたのでこの工業も發展した。生産額は千七百七十九年には二百六十五萬五千ダラーであつたのが、千九百十九年には九億九千七百九十六萬八千ダラーに達した。

(ホ) 自動車工業。自動車工業がアメリカに於ける主要なる工業となり初めたのは千八百九十五年以後のことである。フォード自動車會社は千九百三年から十六年までの間に百三十八萬六千臺の自動車を作製してゐる。自動車のうちで大部分を占むるものは、乗用車である。千九百十九年に作製された百六十八萬三千九百十六臺のうち百五十五萬七千四百八十臺は乗用車で他は荷物運搬用トラックである。いま自動車工業發展の統計をかゞぐれば次のごとくである。

年	經營數	資本(ダラー)	労働者	生産額(ダラー)
一八九九	七五	五、七九、〇〇〇	一一、三三一	四、七四、〇〇〇
一九〇四	一、九一	三三、〇四、〇〇〇	一一、〇七二	三〇、〇三三、〇〇〇
一九〇九	七、三三	一七三、八三三、〇〇〇	七五、七三三	二四九、二〇三、〇〇〇

一九一四	一九一九	一、二七一	四〇、七三〇、〇〇〇	一七、〇九二	六三、八三一、〇〇〇
		二、八三〇	一、七八〇、九四八、〇〇〇	三、四三、一五	三〇、〇七三、〇〇〇

	乗 用 車		荷 物 用 ト ラ ッ ク	
	生 産 数	價 値 (ダ ラ ー)	生 産 数	價 値 (ダ ラ ー)
一九〇四	二、三六一	二、三六四、〇〇〇	四二	九四七、〇〇〇
一九〇九	二七、七二	一五、九八、〇〇〇	三、二五五	五、三三〇、〇〇〇
一九一四	五三、六七九	四二、八五九、〇〇〇	二五、三七五	四五、〇九八、〇〇〇

千九百二十四年の自動車製作数は四百三十二萬五千臺に上つてゐる。同年登録したる自動車数は二千萬臺に及ぶ。自動車工業は今日のアメリカの産業のうちで最も重大なるもの、一である。最近十年間にアメリカの自動車生産高は急激に三倍化した。千九百二十七年の統計によると世界自動車製造高の八割一分がアメリカで生産されてゐる。千九百十八年の自動車輸出数四萬四千臺だ

つたのが、千九百二十八年には一躍して五十萬臺に達してゐるのを見ても、アメリカ自動車工業の發展が如何に眼覚ましいものであるか、察せられる。これらの自動車工業は近來、獨占トラストへの結合の傾向が顯著である。今日、自動車トラストのうちで最大なるものは三個ある。ゼネラル・モーターズ・カンパニーを中心とする一群、フォード・モーターズ・カンパニーを中心とする一群、クライスラー自動車會社を中心とする一群が即ちそれである。第一のゼネラル・モーターズ・カンパニーは財産十億ダラーと稱せられ、モルガン及びザ・ファーストナショナル・バンク財閥の金融資本の支配下にあつて、アメリカ及びカナダ自動車生産額高の三割、輸出自動車の三分の一は實にこのトラストの生産する所である。フォード・モーターズ・カンパニーは始めフォード家の私企業であつたが、漸次他社を合併、結合して、大トラストとなり、一年五千ダラーの配當を看板にして株式を募集した。クライスラー自動車會社もその資本をウォール街より仰いで、中小會社の合併を行つてトラスト化してゐる。以上三個のトラストのうち最も重大なのは前二者で、この兩會社はトラストを結成して、世界に於ける自動車工業を獨占せんとて競争劇甚を極めてゐる。十年前まで自動車の市場を獨占したのは廉價を賣物にしてゐたフォードであつた。ところが最近に

至つてゼネラル・モーターズの進出頗る著るしいので、フォードは千九百二十七年には休業して千萬ダラーを投じて新型自動車作製の考案をめぐらした。翌年フォード新型が市場に出現するや、ゼネラル・モーターズの方では自社製の自動車の価格を半減した。フォードも負けずに価格半減した。今度はモーターズの方では価格を据置にして六個のシリンダー付の自動車を販賣した。かくして兩トラストは、あらゆる方法によつて競争を行ひ、世界市場の獨占を計畫した。ドイツはフォード、イギリスはゼネラル・モーターズといふ工合に、世界に向けて獨占區域の爭奪を始めた。日本に兩會社の工場が出来たのも實にかゝる兩社の獨占への競争結果である。「資本は自由を嫌忌し、支配を欲する」といふヒルファディングの言葉は、自動車工業を通じての兩社の競争によく表現されてゐる。

(へ) 農業機械工業。農業機械は千八百六十年ごろから使用され、蒸汽鋤は千八百六十一年頃に發明された。それ以後に於ける農業の發展(後述)に伴うて農業機械の生産は、次のごとき増加を示してゐる。

	經營數	資本(ダラー)	労働者雇備者數	生産額(ダラー)
一八六〇	二、二六	一三、八六六、〇〇〇	一七、〇五	一〇、八三、〇〇〇
一八七〇	二、〇六	三、八三四、〇〇〇	二五、二四九	三二、〇六六、〇〇〇
一八八〇	一、九四	六二、一〇九、〇〇〇	五、八八〇	六八、六四〇、〇〇〇
一八九〇	九〇	一四四、三三三、〇〇〇	八、八七	八一、二七一、〇〇〇
一九〇〇	七五	一七五、七〇七、〇〇〇	四六、五八二	一〇一、一〇七、〇〇〇
一九一〇	六〇	三三八、五三三、〇〇〇	四八、四九	一六四、〇八七、〇〇〇
一九二〇	三二	三六六、九六二、〇〇〇	五、三六八	三〇四、九六一、〇〇〇

(ト) 屠殺業・肉包装業。この工業は千八百六十年ごろからいちじるしき發展を遂げ、今日アメリカ工業のうちでは最高の地位を占めてゐる。千八百六十年まではシンシナチが中心であつたが、西部發展運動とともに、シカゴに中心が移つた。冷却機 (Refrigerator)、包装方法、罐詰方法、その他の技術の進歩とともにこの工業の發展はすこぶるいちじるしくなつた。

	經營數	労働者雇傭者數	資本(ダラー)	生産額(ダラー)
一八五九	二五九	五,〇五八	一〇,一五八,〇〇〇	二九,四四一,〇〇〇
一八七九	八七三	二七,二九七	四九,四一九,〇〇〇	三〇三,五六一,〇〇〇
一八九九	九二	六八,五三四	一八九,一九〇,〇〇〇	七八五,五二一,〇〇〇
一九〇九	一,三三二	八七,八三三	三〇八,三九〇,〇〇〇	一,三五五,五四四,〇〇〇
一九一九	一,三〇四	一〇,九六六	一,二六,四八三,〇〇〇	四,二四六,二九〇,〇〇〇

以上のべた各種工業の外に、包装肉業以外の食料品工業、製靴工業その他多くの種類の工業あれど、ここには省略して、たゞ千九百十九年のその他工業の統計のみをかゝける。

	生産額(ダラー)
印刷及出版業	一,五三六,四〇七,〇〇〇
木材工業	一,三七七,四七二,〇〇〇

煙草製造	一,〇二二,九三三,〇〇〇
銅の精煉	六五二,一〇一,〇〇〇
リキユール	三七九,九〇五,〇〇〇
精油	一,六三三,五三二,〇〇〇
皮革	九一,五五四,〇〇〇
製紙業	六八,〇九九,〇〇〇
家具	五七一,三五六,〇〇〇
瓦斯(點燈及熱)	三三九,二七〇,〇〇〇
鉛精煉	一六,七九四,〇〇〇
車輻	九一,四六三,〇〇〇

アメリカの工業は、原料、市場、動力、氣候、勞働力、投資の便不便等によつて、地方化の傾向がいちじるしい。すべての工業を通じて、總生産額により主産地の順列を作れば、ニュー・ヨーク、ペンシルヴェニア、イリノイ、オハイオ、マサチューセツツ、ニュー・ジャージー等である。そのうち最

初の四州は所謂北東部に属する州で、全生産の四十三・五パーセントを占めてゐる。ニュー・イングランドには、繊維工業、製靴工業、金屬工業が行はれ、ニュー・ヨークには被服工業、精糖業、包装肉工業が行はれ、ニュー・ジャージーでは精油、精銅、絹織物業がいとなまれ、ペンシルヴァニアでは製鐵・製鋼業、中西部は農産物、石炭、鐵の産出、食料品工業が盛で、イリノイス、ウイスコンシン、ミズーリ、アイオワ等は屠殺業、肉包装業の中心であり、オハイオ、ミシガン、インディアナには製鐵業盛である。太平洋沿岸諸國には木材工業、食料品工業行はれ、南部地方では、鐵、石炭、木棉が豊富なので、それらを材料とする工業が盛である。以上、アメリカの工業の地方化 (Localisation) の素描である。

かゝる各方面に於ける生産力の發展は、商業の活動をうながし、商業と工業との相互作用は、この國の經濟的發達をますます急速ならしめた。次に商業方面の一般情勢を述べる。

(一) 通貨問題。この當時に於ける通貨問題として注目すべきは、グリーンバック紙幣と銀貨問題との二つである。銀貨問題は其の結果として金本位制度の確立を伴つた點に重要さをもつ。

南北戦争當時、法定紙幣としてグリーンバック (The Greenbacks) 紙幣が發行されたことについて、さきに一言した。グリーンバック紙幣は、政府の約束手形に類するもので利息のつかない強制國債の性質をおびたものである。紙幣の表面には「アメリカ合衆國はこの紙幣所持者に表記の額を支拂ふであらう」と書かれ、裏面には「この紙幣は、輸入税および公債の利子をのぞいたすべての公私負債のための表記價格の法定貨である」と印刷されてゐる。發行當時は、戦争最中であつたので、國民中には反對はなかつた。しかし、この紙幣の流通は多くの缺點をその後暴露するに至つた。(イ) この紙幣の流通は金銀等の正貨の流通を阻止した。(ロ) この紙幣の流通はその紙幣の價值の減少の結果物價騰貴の一因をなした。(ハ) この紙幣は政府の信用を害し、それ以後に於ける政府の負債を不可能ならしめた。時日の経過とともにこれらの缺點が明白となり、民間からこの紙幣の發行に對しての反對論が出た。その結果、グリーンバックの發行停止を唱ふるものが多く、一般の輿論となつた。同紙幣發行停止に對して最も有力なる反對は、中西部 (ミッドル・ウエスト) の反對であつた。その地方では元來、資本がすくなく、負債者多く、ナショナル・バンク並びにその發行にかゝる銀行券 (ナショナル・バンク) については後述) も非常

に稀であつた。従つて、この地方の人達は、負債者が多い關係上、もし、グリーンバックの發行が停止され、グリーンバックが引き上げられ金銀貨が流通することとなると、紙幣價值の廉い時に借りた金を、貨幣價值の高くなつた貨幣をもつて支拂はねばならぬことになり、非常の損害を蒙ることとなる。従つて、同紙幣の發行停止・引き上げに對しては猛然として反對した。その結果、グリーンバック黨 (Greenback Party) の活動となり、その主張を貫徹するがためには、大統領選舉に自己の主張を維持する大統領を出さんとして、千八百七十六年、千八百八十年、千八百八十四年の選舉に活動した。グリーンバック黨は、千八百六十七年ケリー (Oliver Hudson Kelly) によつて設立され、鐵道統制のために戦つた農民の團體であるグリーンジ (Grange) —— 一名 The Patrons of Husbandry —— の團體員 (Granger. グレーンジのこの運動を稱して Granger Movement と言ふ) の後身である。かゝる、グリーンバック黨の活躍の結果、グリーンバック廢止論者と維持論者との間に妥協が成立し、千八百七十五年、議會は、法令を出して三億ダラーだけのグリーンバックの流通を許容した。同令は又同時に、千八百七十九年一月以後、同紙幣を金にて引き替へることを大藏大臣に命じた。そのために、大藏大臣シャーマン (Sherman) は、引き替への

ため國庫に一億三十三萬ダラーの金貨を準備した。しかし、引き替へるものはすくなかつたと言はれる。千八百七十八年、流通せるグリーンバック紙幣の總額が三億四千六百六十八萬一千ダラーに下落するや、議會は、以後グリーンバック紙幣の發行を禁止した。

グリーンバック紙幣問題とともに朝野の問題となつたのは銀貨問題である。千八百四十三年の通貨法 (Coinage Act of 1834) は、金ダラーよりもすこし價值のある銀ダラーの發行を規定した。そのために、銀ダラーはグレイシャムの法則によつて影をひそめ、千八百七十三年までの流通額はすこぶるすくなかつた。事實千八百六十年に於ける西部の銀山探鑛までは銀の産出すこぶるすくなく、主として外國より輸入してゐたので、従つて銀貨の流通も僅少で、千七百九十二年から千八百七十三年までは、八百萬ダラーの銀貨が鑄造されたに過ぎなかつた。千八百七十三年に通貨法が改訂された。その改訂法によると、銀ダラーは、アメリカ合衆國において鑄造される鑄貨表からは除外されてゐた。銀貨維持論者は、この改訂法を、一般民衆の利益を無視する東部の銀行家および立法者の陰謀の結果であるとし、『千八百七十三年の犯罪』 (Crime of 1873) と呼んで、それを攻撃した。しかし、この改訂法は、銀貨の流通が事實上すくなかつたに起因すると言はれ

てゐる。千八百六十年以後、西部地方に於ける銀の産出盛となつた。千八百六十年には、アメリカに産する銀の価格が十五萬六千八百五十ダラーであつたのに、千八百七十年には千六百四十三萬四千ダラー、千八百九十年には五千七百二十四萬二千ダラーに達した。かゝる産額の激増、ヨーロッパ諸國の銀の自由鑄造中止、インドの銀需要の減少は、銀の價值を小ならしめ、金銀比價は大なる變化を見た。長い間比價は一六對一であつたが、千八百七十五年には一六・六二對一となり、千八百八十年には、一八・〇四對一となり、千八百九十五年には三一・六〇對一とまでなつた。しかし、銀貨維持論者の勢力が案外つよかつたので、千八百七十八年にはブランド・アリソン法 (Bland-Alison Act) が出た。この法は、大蔵大臣をして、二百萬ダラー以上四百萬ダラー以下の價值を有する地金銀を毎月市價で購入させ、毎月、四百十二半グレン (Grain) の重量を有する銀貨を鑄造せしめた。この法令は千八百九十年まで行はれ、それまでの十二年間に、三億七千八百十六萬六千銀ダラーが鑄造された。千八百九十年に至つて、シャーマン法 (Sherman Act) が發布された。これは、前法をやゝ變へるもので、大蔵大臣をして、毎月四百五十萬オンス (Ounce) の地金銀を購入せしめ、それに對する支拂ひは、金又は銀をもつて償還される法定

大蔵省省券 (Treasury Notes of full legal Tender) をもつてせしめた。千八百九十一年七月一日以後は、省券を償却する必要以外に、銀貨は通用しなかつた。しかし、その後も銀貨問題は常に論争、大統領選挙の題目となつた。レブブリカン黨 (The Republican) は銀の自由鑄造に反對で、デモクラティック黨 (The Democratic) は銀の自由鑄造論に賛成であつたが、この論争はレブブリカン黨の勝利に歸して、千九百年には金貨本位制法 (Gold Standard Act) が發布され、アメリカ合衆國はここにはじめて、金本位制の上に立つ國家となつた。

(二) 銀行制度の發達と金融資本の成立。千八百六十三年、ナショナル・バンク法 (National Bank Act) が發布されたことについては、先にすでに述べた。この法令によれば銀行は五萬ダラー以上の資本をもつて設立せられ、銀行はアメリカ合衆國國債を購入してそれを國庫にあづけ、國庫からその預け入れ國債の額面價格の九十パーセントに當る大蔵省券をうけとる。それを基礎として銀行券を發行するのである。銀行は、中央準備都市銀行 (Central Reserve City Bank) 準備都市銀行 (Reserve City Bank) 地方銀行 (Country Bank) の三つに大別せられしめる。一般には、ナショナル・バンクは政府の機關であるかに思はれてゐるが、さうでなくて、それは私立

のボルレーションで、たゞ聯邦政府によつて特許せられ、法令によつて統制されてゐるに過ぎない。ナショナル・バンク法は、ナショナル・バンク制度の行政について一定の権限を與へられた通貨管理者 (Comptroller of the Currency) を任命して、各所屬銀行を監督せしめた。州銀行も進んでナショナル・バンク制度に加入するもの増加した。この制度の設立とともに銀行業はますます發展し、小切手、手形等が貨幣の代りに取引に利用せられ、信用制度が一般に廣く行はれるに至つた。がしかし、このナショナル・バンク制度も、信用制度の發達につれて多くの缺點あることが指摘されるに至つた。(イ) 銀行券發行の不弾力性。(ロ) 信用の不弾力性。(ハ) 大なる財政的中心への資本の偏倚的集中。かゝる弊害を矯正せんとして、千九百八年にアルドリッチ・ヴリーランド法 (Aldrich-Vreeland Act) が發布せられたが、これは千九百七年の恐慌の後の一時的の緊急法で、永續的性質を有するものではなかつた。改革は、千九百十三年の聯邦準備銀行制度法 (Federal Reserve Act) の發布によつて完成した。

この新法によれば、從來のナショナル・バンク制度の加盟諸銀行は、新法による新銀行制度の單位基礎をなした。組織委員會 (Organization Committee) は、大藏大臣、農業大臣、通貨管理

者より成り、八個以上十二個以下の聯邦準備都市 (Federal Reserve City) を指示し、アラスカを除いた合衆國領土を各地方に分け、各地方には一個の聯邦準備銀行をおいた。聯邦準備都市は、ボストン、²⁾ ニュー・ヨーク、フィラデルフィア、クリーヴランド、リッチモンド、アトランタ (Atlanta) シカゴ、セント・ルイ、ミネアポリス (Minneapolis) カンサス・シテイ、ダラス (Dallas)、サンフランシスコ等であつた。各地方の加盟銀行は拂込資本の六パーセントをその地方の聯邦準備銀行にストックとして記入する。それ故、聯邦準備諸銀行はアメリカ合衆國によつて特許せられた法人である。資本金はすべて加盟銀行によつて所有せられる。各聯邦銀行は A、B、C の三つの階級ある九人の重役を有する。

この銀行制度の上には七人によつて組織せらるゝ聯邦準備委員會 (Federal Reserve Board) がある。大藏大臣および通貨管理者もそれに加はる。この委員會は銀行事務でない銀行の行政を委託されてゐる。その外に、各聯邦準備銀行の代表者より成る聯邦審議會 (Federal Advisory Council) がある。聯邦準備銀行制度は、從來アメリカに存した第一、第二合衆國銀行やヨーロッパの中央銀行と異つて、一國の中央に集中化されないで、地方的に集中された。加盟銀行は準備銀

行を援助者とした。聯邦準備銀行は、聯邦準備銀行券 (Federal Reserve Bank Note) および、商業證券 (Commercial Paper) によつて保證される聯邦準備券 (Federal Reserve Note) を發行した。これらの銀行券は、すべてのナショナル・バンク、聯邦準備銀行およびその加盟銀行に強制的通用をなし、すべての税、關稅、手数料等は、この銀行券をもつて支拂つた。これらの銀行券は、いつでも金貨と引換へることを得た。聯邦準備銀行は、預金に對して金又は法貨で三十五パーセントの準備金を有するを必要とし、銀行券に對しては金にて四十パーセントの準備金を有することを必要とした。加盟銀行もそれぞれ準備金を必要とした。この新しい法律は、アメリカの銀行制度および銀行券發行、準備金等に於いていちじるしい變革をなさしめた。他の新しい特徴は、商業證券の割引、加盟銀行による外國支店の設置、聯邦準備銀行の支店等に關する規定であつた。〔註十〕千九百十七年の修正で州銀行は加盟銀行となり、二百五十の州銀行とトラスト・コンパニーが聯邦準備組織に加入し、以後増加して、千九百十九年には總資本七十三億三千八百八十一萬三千ダラーに達した。聯邦準備都市も増加した。外國に於ける支店も激増し、南アメリカ、中央アメリカ、東洋、ヨーロッパに設けられ、加盟銀行たるナショナル・シティ・バンク (National City Bank) は、南アメリカ、キューバ、ボート・リコ、ロシア、イタリー等に二十一箇の支店を設けた。また聯邦準備委員會は、ベルギー、スイス、ポルトガル、スペイン等に支店を設けることを公許した。爲替手形の引受業務は、アメリカ銀行史では新しい業務であるが、これも増加して、千九百十五年には、六千四百八十四萬五千ダラー、千九百十八年には十八億一千八百三十五萬四千ダラーに達した。

聯邦準備銀行制度によるアメリカ銀行の發展は、頗る顯著であつた。經濟界に於ける銀行の勢力は増加して來た。かゝる銀行の發展は、その結果として金融資本の成立、金融寡頭政治の確立をもたらした。

當時企業方面に於いて、プール、トラスト等の企業の間、結合が行はれて、小數の資本家の手に企業が獨占せられる傾向が漸次盛となりし (後述) と同じ理由で、銀行もまた合同または聯合が行はれ、小數金融家の手に銀行業が統制せらるるに至つてゐる。しかして企業の間、聯合と銀行業の結合・合同とは、利害關係による相互作用によつて、兩者の結合・聯合を更に大ならしめた。銀行業の合同はマネー・トラスト (Money Trust) と言はれ、かゝる傾向は、千九百十

二年の議會の調査によつて證據立てられた。例へば、大都市に於いては、銀行事務は何十倍か増加したにかゝはらず、銀行数は千八百六十年當時より多くはなつてゐない。大都市では、二個あるひは三個の大銀行が、その都市の銀行事務の半分以上を獨占してゐるのである。法律は資本の十分の一以上を貸出することを禁じてゐるが、顧客の数が増加するとともに、十分の一では充分でなくなり、その結果、大銀行は中小銀行を合併して資本を増加するのである。かくして、銀行業に於いても漸次トラスト的結合が形成せられて行くのである。

銀行は、單に從來銀行が營んでゐた銀行事務にのみ満足せずして、更に一步をすゝめて銀行が産業を直接支配するに至る。信用制度を通じて産業が銀行に隸屬するに至つて、銀行資本は單に産業資本として貸出されるにとどまらず、金融資本 (Finanzkapital) として作用するに至つた。アメリカに行はれたかゝる徑路は、投資會社 (Investment Companies) 及び參與制度 (Interlocking Directorates) によつて行はれた。前者は、從來の銀行事務のほか、銀行が、債券や株を賣つたり、新しい企業を組織したりする方法である。後者は銀行の重役が多くの企業に重役となつて參與してそれらの企業を統制する方法である。乃ち前者は主として資本を通じて、後者は主

として人的關係を通じて、銀行が企業を支配してゐるのである。例へば、ナショナル・シティ銀行の例を見れば、重役二十一人は、一流工業會社の重役となつて、それらの企業に參與してゐる。その主なるものを擧げると次のごとくである。

ウイリアム・ロツクフェラー

バーシー・エー・ロツクフェラー

オグデン・アーモア

クリーヴランド・エッチ・ドッゲ

サイラス・エッチ・マツコーミック — 國際收穫機會社

フィリップ・エス・フランクリン — インタナショナル・マーカンティル・マリオン會社長

アール・デイ・バブスト — アメリカ精糖會社長

エッガー・バーマー — ニュー・ジャーシー錫商會社長

ナタン・シー・キングスバリ — ユニオン・パシフィック鐵道會社副社長

フランク・クルンボール — チエサビーク・オハイオ鐵道會社社長

かくのごとき方法によつて、銀行は、企業の支配を行ふに至つた。ナショナル・シティ・バンクがスタンダード・オイル・カンパニー (Standard Oil Company) や、合衆國製鐵會社等を支配せるはそのいちぢるしい例證である。

かくして、アメリカ銀行業の總力の四分の一、或はそれより以上がニュー・ヨークおよびシカゴの大銀行に支配され、従つて、それらに關係ある商業上、工業上の諸企業は、兩都市の大銀行の手によつて統制されてゐるのであると言つてよい。「ウォール・ストリート」の投機の指揮者は同時に又アメリカ工業の無制限の支配者である。〔註十四〕いま、ニュー・ヨーク、シカゴの銀行が他の銀行及それを通じて企業を如何に支配せるかの一例を見よう。

アメリカでは、企業の結合殊にトラスト等が非常に行はれてゐることは周知の事實であるが、それにも増して盛んに行はれてゐるのは、就中二大都市たるニュー・ヨーク、シカゴの銀行に於ける資本の集中である。例へば一九二四年度に於ける八〇八五個のナショナル (National) 銀行の總預金額の約四〇パーセントは、ニュー・ヨーク、シカゴ兩都市の十六個の大銀行の手に集中

されてゐる。しかしこれら僅かの大銀行も又直接に間接に、あるひは明白にあるひは裏面的に、極く僅かの私人銀行家の手によつて操られてゐる。その金融寡頭政治家の巨頭は、モルガン (Morgan) である。彼はニュー・ヨークに、ヂェー・ビー・モルガン・エンド・コンパニー (J.P. Morgan & Co.) を有し、單にアメリカを支配するのみならず世界の各地に同系の會社を設置した。例へばロンドンのモルガン・グレンフェル・エンド・コンパニー (Morgan, Grenfell & Co.) バリーのモルガン・ハリス・エンド・コンパニー (Morgan, Harris & Co.) の如き、ローマ、ミラノの支店、一九二二年參與したるオーストリア土地信託銀行の如きその例證である。

ニュー・ヨークに於ける次の重要な銀行は、皆モルガン系の銀行から發達せるものである。

(一) ザ・ナショナル・シティ・バンク (The National City Bank) —— この銀行は、自己資本に於いて世界最大の銀行である。この銀行はモルガンの海運トラストたるザ・インタナショナル・マーカンティル・マリン・コンパニー (The International Mercantile Marine Co.) 及びスタンダード石油會社 (Standard Oil Co.) の銀行であり、その他多くの大企業と密接な關係がある。

(二) ザ・ガランティ・トラスト・コンパニー (The Guaranty Trust Co.) —— この銀行は、合衆

國第三の大銀行で、銅山王グッゲンハイム、アメリカン・スメルティング・エンド・リファイニング・コンパニー (American Smelting and Refining Co.) クーレン・ロフ・エンド・コンパニー (Kuhren Loeb & Co.) ハリマン・エンド・コンパニー (Harriman & Co.) 等と密接なる関係があり、海外では一九二〇年にオーストリアの信用銀行、一九二四年には、ロッテルダムの銀行聯合に參與した。

(三) ザ・ファースト・ナショナル・バンク (The First National Bank)

(四) ザ・バンカース・トラスト・コンパニー (The Bankers' Trust Co.) — この銀行は、ゼネラル・モーターズ・コーポレーション (General Motors Corp.) ゼネラル・エレクトリック・コンパニー (General Electric Co.) や最大の電気トラストと密接なる関係がある。

(五) ザ・チエース・ナショナル・バンク (The Chase National Bank) — この銀行は、一九二六年メカニックス・エンド・メタルズ・ナショナル・バンク (Mechanics & Metals National Bank) と合併することによつて合衆國第二の銀行となつた。この銀行は、ゼネラル・モーターズ・コーポレーション、アナコンダ・コパー・コンパニー (Anaconda Copper Co.) スタンダード・オイル・コンパ

ニー、ザ・ウエスティングハウス・エレクトリック・エンド・マニファクチュアリング・コンパニー (The Westinghouse Electric & Manufacturing Co.) (合衆國第二の大電気會社) 等と密接なる関係がある。

モルガン自らは、ザ・カーネギー・スチール・コンパニー (The Carnegie Steel Co.) より發達し來れるザ・ユナイテッド・ステーツ・スチール・コーポレーション (The United States Steel Corp.) アメリカン・テレフォン・アンド・テレグラフ・コンパニー (The American Telephone & Telegraph Co.) スタンダード・オイル團の銀行家となり、それらを直接に金融資本で統制し、更にモルガン系の銀行およびそれより發生せる多くの大銀行を通じて、小銀行を結合し、同時に多くの企業を操縦してゐるのである。(註十五)

(三) 關稅問題。次に内國の産業および外國貿易に重大の關係を有する關稅問題に觸れよう。保護關稅政策は合衆國の成立當時から、續いて行はれてゐたが、千八百三十二年から六十年までは比較的率が低くなつたが、南北戦争によつて國の歳入を高めるため、率を再び高めた。千八百五十一年は平均關稅十九パーセントなりしを、千八百六十四年には四十七パーセントとなつた。

千八百九十年に至つて、マッキンレー法 (McKinley Bill of 1890) が出た。これは、その時までの最高の關稅を規定し、四九・五パーセントとした。その後、千八百九十六年ディングリー法 (Dingley Act) は更に率を高めて、平均五七パーセントとなつた。千九百十二年デモクラティック黨が大統領選舉に勝つや、關稅を引下けんとして、千九百十三年、アンダーウッド—シモンズ法 (Underwood-Simmons Act) を出し、率を下けんとしたが、十分に目的を達せず、千九百二十二年レバブリカン黨は、フォードネイ・マッカーバー關稅法 (Fordney-McCumber Tariff) を出して率を更に高めた。南北戰爭以來の高率なる關稅はアメリカ經濟史の永久的特質となつた。低率論者は、南部、西部の農民であつたが、工業家の勢力が大なので、その説は有力となつて一般を動かすに足らなかつた。

(四) レイセ・フェヤの轉落。アメリカは産業革命以來、自由放任政策をとり、關稅のみが、政府による唯一の産業方面への干渉であつた。しかし、自由放任政策の結果は、多くの弊害、殊に工業の横暴を招來し、社會一般の經濟的權衡を破ること大であつた。殊に鐵道のごときは、放らつ極まる政策を行つて、勝手な行爲をすることが多かつたので非難多く、遂に千八百八十七年

の國內商業條例 (Interstate Commerce Act of 1887) の發布とともに、政府の干渉が行はれた。續いてシャーマンの反トラスト法 (千八百九十年) 千九百六年のヘッバーン法 (Hebburn Act) 千九百十四年のクレイトン法 (Clayton Anti-Trust Act) 千九百十六年のアダムソン八時間法案 (Adamson Eight Hour Act) 等が發布されて、レイセ・フェヤの代りに政府の干渉が漸次増加して來た。世界大戰に至つてその傾向はことに顯著である。

(五) 恐慌は、千八百七十三年、千八百九十三年の兩度來つた。その後、それより回復して商業繁榮したが、千九百七年更に恐慌が來た。これら恐慌は、資本主義には固定的のもので、資本主義の上昇期には、恐慌終れば、商工業は再び回復する。

商業上の設備としては、商業會議所 (The Chamber of Commerce of the United States)、外國に於けるアメリカ商業會議所 (Foreign Chambers of Commerce)、貿易省 (Board of Trade) 等が設けられて、内外商業・貿易に貢獻するところ大であつた。いま千八百六十年から、千九百十四年までのアメリカの貿易統計をかゞぐれば次のごとくである。

	輸 出 (ダラー)	輸 入 (ダラー)	總 額 (ダラー)
一八六〇	三三、五七六、〇五七	三三、六二六、二一九	六六七、一九二、二七六
一八七〇	三九二、七七一、七六八	四三三、九八八、四〇八	八二八、七〇〇、一七六
一八八〇	八三五、六三八、六六八	六六七、九五四、七四六	一、五〇三、五九三、四〇四
一八九〇	八五七、八二八、六八四	七八九、三二〇、四〇九	一、六四七、一四九、〇九三
一九〇〇	一、三九四、四八三、〇二二	八四九、九四一、一八四	二、二四四、四二四、二〇六
一九一〇	一、七四四、九八四、七三〇	一、五五六、九四七、四三〇	三、三〇一、九三二、一五〇
一九一四	二、三四、五七九、一四八	一、八九三、九三三、六五七	四、二二八、五〇四、八〇五

以上、工業および商業について、その発展の概略をのべた。次に農業について一言のべることにする。

南北戦争は南部の農業的發展に障害を與へたが、その代り、北部および西部の農業の發達を促

進した。西部發展運動の結果、國境が盡きるとともに、從來の放肆なる農法に代つて集約的な農業が行はれた。

南北戦争以來の農業的進歩は、二つの重要な横杆によつてなされた。

(イ) 農具機械の發明とその一般的採用。前にも述べたやうに、南北戦争直前に、鋤、收穫器、脱穀器等の機械的發明がなされたが、これらの諸機械が一般的に使用されるに至つたのは南北戦争以後のことである。マーシユ式收穫器 (Marsh Harvester) は千八百五十八年に發明され、戦後一般に使用されたが、それは一定時間に收穫さるる穀粒を倍加せしめ、千八百七十八年特許せられたトゥワイン・ビンダー機 (Twine Binder) は收穫の速力を八倍化したと言はれる。その他、播種から收穫までの徑路に要する器具は全部機械化し、それらは、蒸気、ガソリン、および電力等の動力で使用された。大農場で進歩した農業機械をもつて行つた當時の大規模の農業は、農業史上、ボナンザ農法 (Bonanza Farming) として有名である。

(ロ) 科學的農法、これは、農業學の應用、政府、農業團體、農業新聞、農業教育による科學的發見の宣傳によつて行はれた。機械の一般的使用は、比較的早く行はれたが、科學の農業への

應用は、仲々急速には進捗しなかつた。

かくして農業の發達の機運と條件とが備はつたが、一般人が工業的發展にのみ留意して農業を省みるものすくなく、加ふるに南北戦争以後は主なる農業地方たる西部には通貨が涸渇し、又農作物の價格が暴落したので、農業の發展思ふにまかせなかつた。そこで、政府も反省するところあつて、多くの法令を出して農業の發展を補助した。千八百六十二年のモリル法 (Morrill Act) は農業教育機關としてランド・グラント・カレッジ (Land Grant College) を設けて農業教育を行つた。續いて、千八百八十七年にはハッチ法 (Hatch Act) 千九百十四年には、レヴァー・エックステンション法 (Lever Extension Act) を出して農業教育を奨励した。千八百八十九年以後は農務省に、天候局 (Weather Bureau) 畜産局 (Bureau of Animal Industry) 園藝局 (Bureau of Plant Industry) 昆蟲局 (B. of Entomology) 生物研究局 (B. of Biological Survey) 土壌局 (B. of Soil) 化學局 (B. of Chemistry) 收穫調査局 (B. of Crop Estimates) 等の専門分局を置いて、農業振興策を講じた。又農業金融の必要から千九百十六年には、聯邦農業借款法、(Federal Farm Loan Act) を發布し、十二都市に聯邦農業銀行 (Federal Land Bank) を設置し、ま

た株式農業銀行 (Joint Stock Land Banks) を特許して、從來資金に涸渇した農民の金融に便宜を與へた。その他、調査、研究を怠らず發表して農業への注意を喚起した。

かくして農業は發達した。ニュー・イングランドでは果樹、都市の食料としての穀物、南部では棉花、煙草、馬鈴薯、ピーナット、半熱帶的作物、中西部は穀物、畜産、大麥、太平洋沿岸は諸種の農作物、ことに果樹等が栽培、産出せられた。歐洲大戰後は、南北戦争後と同じく、資金涸渇したが、農業黨 (Farm Bloc) をつくつて政治的活動を行ひ、農業的利益のために努力した。次に農業的生産物増加の統計をかゝける。

	農産物總價値 (ダラー)
一八七〇	一、九六、〇三〇、九七
一八八〇	二、三二、五四〇、九七
一八九〇	二、五九〇、一〇九、二四
一九〇〇	三、七七一、〇六、九七

一九一〇	八、四九八、三二一、四二三
一九二〇	二一、四二五、六三三、六一四

いま古い統計であるが、アメリカ國富の増加の統計を左に参考までにかゝける。(註十六)

	富の總額 (ダラー)	一人について (ダラー)
一八五〇	七、三三三、七六〇、三三八	三〇八
一八六〇	一六、一五九、六六六、〇六八	五二四
一八七〇	三〇、〇六八、五八八、五〇七	七六〇
一八八〇	四三、六二二、〇〇〇、〇〇〇	八七〇
一八九〇	六五、〇七〇、〇九一、一九七	一、〇三六

第三節 生産の集中・企業結合・独占組織

アメリカ合衆國に於ける企業結合は、ドイツとともに世界で最も發達してゐる。しかし、この國ではカルテル (Cartel) は法律上禁止されてゐるので、企業結合は主として大トラスト (Trust) 組織である。だが一時的の利益協定や、變則的な生産及び價格協定は、諸種の形式のもとに於いて行はれてゐる。ヴァルガが正當に指摘してゐるやうに「カルテルはアメリカで禁じられてゐる。然しながら、一九〇七年以來デーリーは規則正しく獨立の鐵資本家を午餐に招待してゐる。——それは如何なる法律も禁するわけには行かない——ここで必要な價格及び生産協定がなされるのである。」

アメリカに於ける企業結合の發達は、第十九世紀の最後の二十年に於いて急激なる勃興の歴史を見せた。先づプールに於いて、續いてトラスト、持株會社の形式に於いて。

これらの企業結合の成生は、それらの發生及び繼續を可能ならしめたる三つの前行條件を有してゐる。その第一は、一八六〇年殊に南北戦争後に於ける急激なる經濟的發達である。アメリカの産業革命は、一八四〇年前後に於いて東部に於ける紡績業に始まり西部發展運動の進捗とともに西部および南部にまで擴大し、南北戦争以後その進展殊に著しく、一八七五年に於けるカーネ

ギーによるイギリスよりのベッセマー法の輸入以來、重工業方面に於ける所謂第二産業革命が行はれた。かゝる經濟的發達は、小資本を擁する古い小規模の生産方法の代りに、その形態および複雑さに於いて數段の飛躍を示す大企業の經營を必要かつ可能ならしめたのである。その第一は、經濟的發展の結果として生じた諸種の條件、例へば機械及び生産方法の標準化、適應せるアツカウンテング・システム (Accounting System) の創始、電信、電話、タイプライターの完成および殊に重大なのは交通手段としての鐵道の發展等が考へられる。いまこれを鐵道哩數の發達について見るに、一八二八年にオハイオ・ボールティモア間に始めて鐵道の開通を見て以來、一八四〇年には、四五三四キロメートル、一八五〇年には、一四五一五キロメートル、一八七〇年には、八五一三九キロメートル、一八八〇年には、一五〇七一七キロメートルに達してゐる。これらのことは、小企業的經營の不可能従つてまた大仕掛の生産組織の發生の必然性をあたへる。乃ち機械および生産方法の標準化は、勞働の分業および統一化を容易ならしめ、アツカウンテング・システムの創始は大生産組織經營の可能を促進せしめ、電信、電話、タイプライター、鐵道等の廣義に於ける交通手段の發展は商品の販賣區域の擴大粗原料收集、勞働力取得等の上に大なる便宜

を與へ、それぞれ企業結合の發生の必然と可能との上に大なる貢獻を與へた。企業結合發生の前行條件の第三は、コルポレーション (Corporation) 殊に有限責任のコルポレーションの發達である。合衆國の初期に於いては、各州政府および聯邦政府が交通運輸の事業、商業工業の發達のために力をつくしたが、その後に至つて失敗するに至り、それに代つて個人または組合が州政府または聯邦政府より便宜、特權、補助金等をうけてそれらのことに従事した。一八六〇年以前に於いてはこの個人または小規模の組合が、小資本をもつて、生産、交易を行つてゐた。しかし、それと同時に、多くの資本を獲得するためと企業の危険を分擔するためとからして、時々コルポレーション組織が、鐵道、銀行、海運業等に於いて採用された。コルポレーションの行はれた初期には州政府はそれが獨占的機能を有し自由競争を排除するといふ理由をもつて、それを嫌惡した。一七七七年の憲法には、コルポレーションに對する何等の規定もなかつたが、千八百二十一年の憲法はそれを許可し、また、それを嫌ふこと甚しかつたニュー・ヨーク州に於いても、一八四六年の州憲法に於いてコルポレーションを合法的なる存在として認容した。かくしてコルポレーションは、漸次發達し來り、從來の個人または小組合による經營に代ふるに、株式による資金の徴收、

經營の統一等の便を有するコルポレーションが一般的となり來つた。一八四八年のマーチャント・マガジンは、「かくしてコルポレーションは、社會の進歩を、小數の富豪から、多數の比較的貧困人にまで移轉せしめた」と言つてゐる。一八六〇年以來に於いては、生産品に對する商域の擴大、交通手段の發展、國富の増進等のために、更に盛となつた。一九一九年の統計によれば、コルポレーションは生産諸業經營の三一・五にすぎないのに、全勞働者の八六パーセントを雇傭し生産品の八七パーセントを生産してゐる。製靴工業、汽罐車工業、店舗建設及び車輛修繕工業は全部コルポレーション組織であつた。かくの如くコルポレーションが盛に行はれた原因は、前述した經濟上の變革に根據するのであるが、更にコルポレーションの組織そのものの有する特徴にもよる。即ち(一)資本を得るに便なること(二)投資家と經營者は別なるが故に投資家をして事業に没頭する必要ならしめること(三)事業の危険は、有する株に丈局限局されてゐること(四)組織そのものはメンバーの死去、退會等により消滅せざること(五)株が賣買されうること。

——以上のべた三つのことが、單なる個人、組合、コルポレーションによる經營に代ふるに、それら單獨なる企業も多くを一つの監督のもとに統一する企業結合の勃興及び繼續發展を促進した

のである。

企業結合は、各種の産業部門に及んだが、殊に鑛山業、運輸會社、鑛鑛爐、製鋼製鐵業、金屬工業、商業等に主として行はれた。企業結合の利益として考へらるることは、生産業者をして、原料の獲得、商品の販賣についての不安を渺ならしめ、多くの不用なる仲介者を必要ならしめ、自由競争より來る冗費(宣傳、廣告等)をばぶき獨占利潤を獲得せしめ、副生産品の利用、銀行、運輸業との交渉を容易ならしめ、勞働力の獲得を安全ならしむる等のことである。

一八六〇年以前に於いても企業結合がごく僅か行はれてゐたが、何等大した重要性を有してゐなかつた。例へば一八三〇年に西部ヴァージニアのカナワ河畔の製鹽業者が生産の制限、價格の維持の目的をもつて企業結合を行つたことが記録に見えてゐる。しかし、これは永く續かなかつたらしい。アメリカの企業結合の歴史は一八七二年の恐慌以來からはじまる。

アメリカの企業結合の發達史は、リップレイ(Ripley)によれば四期に分たれてゐる。

その第一期は、一八七三年から一八八七年までである。この時期には諸産業及び鐵道方面に企業結合が行はれ、プール(Pool)がその代表的形態であつた。プールは、利益ある事業を分配し

価格を支配するためにする一時的利益協定である。ブールは、蒸溜工業、製鋼製鐵工業、綱索工業等に行はれたが、要するに一時的手段であつて價格及び企業の堅實の安全を永く保證する效力を有さなかつた。この期間に於いて注目すべきは、今日トラストの最大なるものの一として知られてゐるスタンダード・オイル・カンパニー(Standard Oil Company)が一八六五年設立せられ、一八八二年に至つて公然とトラストたることを宣言し、獨占體となつたことである。

第二期は、一八八七年から一八九七年までである。この期間に於いては、ブールに代つてトラストが優勢となつた。トラスト濫觴は前に述べたスタンダード・オイル・カンパニーである。續いて蒸溜工業、精鑛工業、鐵道等にも行はれた。トラストの形成及び發達は、一方に弱小企業の滅亡、獨占の發達を來すこと甚しかつたので、聯邦政府は一八九〇年有名なシャーマン・アンチ・トラスト法(Sherman Anti-Trust Law)を發布して、有力なるトラストを解散せしめた。一八九三—九七年は經濟界の恐慌時代で、企業結合の運動は中絶した。反トラスト法、それに續く改訂等のために企業結合の形態は變化しつつあつた。いま、一八六〇年から一九〇〇年までの間に於ける商工業ガス業に於けるトラストの統計を掲げると次の如くである。

年 度	ト ラ ス ト 数	資 本 總 額
一八六〇—一八六九	二	13,000,000
一八七〇—一八七九	四	15,000,000
一八八〇—一八八九	八	26,000,000
一八九〇—一八九九	一七	150,000,000

トラストは、反トラスト法のために解散せられたが、一八九〇年以後も諸種の形態のもとに存續して、トラストの實體は今日に至るまで繼續發展を續けつつある。

第三期は一八九七年から一九〇四年に至る期間である。この期間には、反トラスト法と、新しい法律發布の結果として、企業結合は持株會社の(Holding Company)形態をとつた。一億ダラーの資本を有するフェデラル・スチール・カンパニー(Federal Steel Company)が成立を見たのは一八九八年であり、その翌年には、七千五百萬ダラーの資本を有するアマルガメテッド・コパ―・ロンズニー(Amalgamated Copper Company)が成立し、今日、スタンダード・オイル・カンパ

ニ一とともにアメリカに於ける二大トラストと言はるるユナイテッド・ステイール・コルポレーションが^{一四億}廿億四千萬ダラーの資本をもつて成立したのは實に一九〇一年であつた。鐵道會社にして持株會社の形式を有するものもすくなくなかつた。いま、ボガルトの調査にかゝる一九〇〇年に於ける企業結合の統計をかゝれば表の如くである。

産業の種類	企業結合数	包含部門数
鐵及鋼	40	447
食料品及糖	22	282
小兒食糧	15	250
化學工業	11	89
金屬(鐵鋼を除く)	23	219
飲料品	6	65
車輛	4	41
タバコ	5	100
皮革品	7	116
紙品印刷	15	180
灰硝子・石製品	8	61
木材	16	118
雜種工業	16	118
計	185	2040

第四期は一九〇四年以後今日に至るまでの期間。この間には企業結合にからまる疑獄が續出し、

反トラスト法によつて解散せらるるトラストが多かつた。一九二一年の大審院判決によつてスタンダード・オイル・カンパニー及びアメリカン・タバコ・カンパニー(American Tobacco Company)の二大トラストが解散の判決をうけた。

企業結合に関する法令としては、前にのべたシャーマン・アンティトラスト・ローがあり、その他に、クレイトン法(Clayton Act, 1914)がある。これもトラスト監督法であつて、他のコルポレーションの株を有するを禁じ、銀行業では一つ以上の銀行の重役たることをも禁じてゐる。同年、フェデラル・トレード・コミッション・アクト(Federal Trade Commission Act)が發布せられて、それは聯邦通商委員會を創始し、それが諸種の權能、搜索、文書の提出請求權、等によつて企業結合を監視することとなつた。その他ウェブ・エックスポート法(Webb Export Law)なるものが發布せられ、外國貿易のための企業結合にはシャーマン法は適用されざることとなつた。その他多くのトラストその他の企業結合に関する法令及びそれらの修正、改訂等が行はれた。またトラストに関する判決(例へば一九二五年の有名なる判決)にも企業結合に對する一般の見解を窺ふことが出来る。

かくの如く、今日ではトラスト、カルテルは法律上禁止されてゐるにかゝらず、トラストは諸種の形態のもとに法網をくゞつて存在を續けてゐる。例へば、スタンダード・オイル・トラストは、一九一一年の判決によつて解散を命ぜられたが、その後同トラストは、表面上六十三の獨立會社を立ててはゐるが、實質上は、これを裏面的に統一して、巨大なるトラストを形成してゐるのである。その他、前に述べたユー・エス・トラスト(U. S. Trust)の他に砂糖トラスト、銅トラスト、煙草トラスト、自動車トラスト(ジェネラル・モーターズ・カンパニー)が依然として力強き存在を續けてゐる。

ヴァルガは『アメリカ資本主義の中心勢力をなしてゐるのは大トラストであつて、ヨーロッパの如く大銀行ではない。』(註十七)と言つてゐる。しかし、ユー・エス・トラストの背後にはモルガン(Morgan)財閥があり、スタンダード・トラストの背後にはロックフェラー(Rockefeller)が金融資本の糸を引いてゐること、多くのトラストは同じく大財閥の金融寡頭政治のもとに服従してゐるのである。(註十八)

第四節 アメリカの帝國主義的發展

近代の帝國主義は、歴史的に三段の變化を經過してゐる。帝國主義は、資本主義一般の根本的特徴の、一層の發展および直接の繼續として發生せしものであるから、帝國主義は、豫め、資本主義の存在及び發展を豫定條件とする。

近代帝國主義的發展の第一段階は、經濟史上に於ける所謂發見時代であつて、この時代は、行詰つた中世の經濟が、新大陸の發見、新航海路の開拓によつて、その突出口を發見し、金銀鑛の採取、原料の獲得、商品販賣區域の掠取、過剰なる人口の捌口のために、西ヨーロッパ諸國が領土獲得に熱中した。カナダに於けるイギリス及びフランス、ニュー・イングランドに於けるイギリス、中部アメリカ及び南アメリカに於けるスペイン、ポルトガル、及びフランス、南部アフリカに於けるオランダ及びイギリス、オーストラリアに於けるイギリス、西インド及びインドに於けるオランダ等の活動は、西ヨーロッパ諸國のこの時代に於ける領土獲得の姿であつた。而して、この時代に於けるかゝる帝國主義的領土獲得の目的とするところは、主として、その地方に産出

する産出物の奪掠であり、従つて、その手段も暴力、脅迫、詐欺、誑詐等であつた。第十八世紀の後半に至つて、西ヨーロッパの各國政府は、自國産業を保護するとともに、すでに獲得した植民地を母國産業の發展のために利用すべくそれを繼續的に統制しなければならなかつた。しかし、第十八世紀の國家にとつて、距離の遠い、多額の費用と努力と根氣とを必要とするかゝる植民地統轄法は、頗る重荷であつた。加ふるに西ヨーロッパには當時七年戦役、アメリカの獨立を始めとして、幾多の戦争、内亂が勃發して植民地統治に留意する暇がなかつた。また、産業革命後ヨーロッパに於ける生産費は廉價となり、商品に對する需要は激増したので、わざわざ苦しい思をして植民地經營保持のために力を盡す必要がなかつた。その結果として、第二段階の反帝國主義的政策が採用された。イギリスはニュージブランドの植民、西アフリカの植民、ナタールの併合、スエズ運河建設への参加を中止または拒絶し、南アフリカのボア共和國が獨立し、ドイツがモザンビークを買収することを拒絶した例の如きは、かゝる傾向のあらはれである。千八百六十八年ビスマークは言つた。「母國のために主張されるすべての利益は、大部分、一つの幻想である。イギリスはその植民政策を棄てつゝある。それは、植民が非常に高價につくことを發見したからであ

る。」かゝる反帝國主義的政策は千八百七十年頃まで行はれてゐた。が、この反帝國主義的政策は、千八百七十二年の有名なるデイスレリーの帝國主義的宣言以來廢棄された近代帝國主義が再び復活した。デイスレリーの宣言に對して、ランベルトは次の如く言つてゐる。「デイスレリーの背後には、國外への資本投資の利潤多きを感じ始めたロスチャイルド家及びその他のユダヤ系の金融家の姿がほんやり見えた。」(註十八)

かくして自由黨内閣も帝國主義的政策をとるべく強要さるゝに至つた。この時代に至つてイギリスは獨りヨーロッパ市場を獨占することが出来なくなつた。アメリカ、ドイツ、フランス等が市場獲得鬭争に加はつた。そこで、市場をヨーロッパ以外にも獲得するの鬭争が始まつた。近代の帝國主義はこゝに第三段階に入つたのである。この時代には、交通機關は異常の發達をした。第十九世紀の後半、世界の鐵道の哩數は、二萬四千哩から五十萬哩となり、世界の電信は五千哩から百萬哩にまで飛躍した。このことは、帝國主義的發展の上に二つの重要な結果をもたらした。その一は、かゝる交通の進歩は本國と植民地の間の距離を短縮せしめ、従つて、未開地を開拓して植民地とし、それらの植民地を行政し、統御することを容易ならしめたことである。その

二として、就中重要であるが、鐵道の建設、海底電線の敷設、航通路の定期化等は、資本の投資を必要ならしめたことである。國內投資資本は第十九世紀の前半以來、漸次利潤がすくなくなり、むしろこれを資本すくなくして資本に對する需要の多い未開地に投資した方が利潤が多くなるに至つた。當時のフランスのある經濟學者は次の如く言つた。「フランスに於ける農業改革に於いて三乃至四パーセントの利潤を得る同じ資本は、アメリカ合衆國、カナダ、ラ・フラタ、オーストラリア、ニュージーランドに於ける農業に於いて十、十五乃至二十パーセントの利潤を得る。また本國に於ける工業の發達は、原料就中、熱帯産の原料を必要とした。イギリスの木棉工業が、インド、エチオピア産の棉花を必要とするに至つたごときその例である。その他、ゴム、砂糖、燐酸鹽、紅茶、コーヒー、ココア、石炭、鐵、石油に對する需要がヨーロッパに激増した。國民精神の勃興もまたこの帝國主義的發展を助長した。

かくして、資本に對する需要の高まるにつれて銀行の力を増加せしめ、銀行は産業を隸屬せしめ、海外投資を行ひ、金融資本が近代帝國主義の重要な基礎となり、それとともに、帝國主義的侵略はますます露骨となり來つた。

この第三段階に於ける帝國主義は、レーニンによる金融資本による獨占的帝國主義の段階である。「帝國主義とは、獨占と金融資本との支配が成立し、資本輸出が顯著なる意義をもち、國際的トラストによる世界の分割が始まり、且つ、最大の資本主義諸國の間に於ける地球の全領土が完了してゐるところの、かゝる發展段階に於ける資本主義である。」(註十九)

この段階に於ける帝國主義は、第一段階のそれと異つて、暴力、詐欺等によらずして、専ら平和主義的の假面を被つてゐる。アメリカ合衆國が、帝國主義的のアレーナに登場したのは、實に、帝國主義がこの第三段階に入つて以來である。

マヌイルスキーに依ればアメリカ帝國主義は、つねに、平和主義の假面をまといつてゐる。そして、それは、概略次の如き三段の發展段階を經過して來た。

その第一は千八百二十三年、大統領モンローによつてなされたモンロー・ドクトリン(Monroe Doctrine)の假面を被れるアメリカの帝國主義である。このドクトリンは、發布當時は帝國主義に反對する自由主義の性質を有してゐた。従つて、このドクトリンは、發布當時に於いては、イギリスの支持を得てゐた。ところが、アメリカが漸次經濟上に於いて發展し來るとともに、この

ドクトリンは、反對に帝國主義的色彩を濃厚に帯び來つた。千八百九十五年、ヴェネズエラ國境問題がおこつたとき、國務長官オルネイは「合衆國はアメリカ大陸全體の主人であり、その命令は、大陸に於ける人民への法律である。」と言つたときは、明白にそれを物語つてゐる。合衆國は、モンロー主義の旗の下に、先づラテン・アメリカに投資せる西歐諸國のために、その借金収集者となり、それに乗じて、南米、中米諸國の事件に干渉しはじめ、續いて、それを金融資本の手によつて、自國勢力圏内に引き入るゝに至つた。

第十九世紀、合衆國の資本主義が急激なる發達をなして、アメリカ大陸だけでは狹隘となるや、東洋方面に進出しはじめ、今度は、すでに東洋に勢力を扶植せるイギリス、日本の帝國主義を排除し、自國の帝國主義を發展せしめんがために「門戶開放」なる平和的、自由主義的、デモクラティックな標語のもとに、支那方面を中心として、アジアに帝國主義的魔手を延ばしはじめ、千九百二十三年には、資本の輸出に於いてすでに先進イギリスを凌駕するに至つてゐる。これ、アメリカの帝國主義が金融寡頭政治家、ジェー・ビー・モルガンの手を通じて、平和的なる「門戶開放」なる旗の下に、アジアに進出し來つた、第二段階である。

アメリカ帝國主義の第三段階は、歐洲大戰以後「ヨーロッパ復興」「ヨーロッパ救済」といふ平和的なる標語のもとに、モルガンが西ヨーロッパに魔手を延ばし、アメリカをして債務國より、一躍して債權國たらしめたところの一大活躍の時期である。ドイツ、オーストリア、フランスの財政窮乏救済の名のもとに、如何にアメリカ金融資本の觸手がヨーロッパに延びたことか。

——以上が、アメリカ帝國主義的發展の概略の鳥瞰的觀察であるが、次に、その箇々の事件について、やゝ詳細に、始終を叙述して見よう。

アメリカ帝國主義の歴史的發展を論ずる前に、先づその經濟的背景を概説しよう。
アメリカに於ける産業革命は、千八百四十年前後に、先づ東海岸に於ける紡績業に行はれ、續いて西部南部に傳はつた。千八百六十年代の初頭に行はれた南北戦争以後は、殊に經濟的發展めざましく、千八百七十年有名なスタンダード・オイル・カンパニーが設立せられ、同じく七十五年にはカーネギーがイギリスで發明されたベッセマー法を輸入して製鋼業を開始し、これとともに第二産業革命と言ふべき製鐵、製鋼業に於ける生産方法の變革が行はれ、鐵道の發展、石炭、鐵の採掘とともに重工業は飛躍的な發展を示した。しかし、概して言ふならば、千八百年代は、西部

への發展運動、太平洋沿岸までの資本と労働力の移動のために忙しく、企業家の専ら苦心したのは、労働力及び資本の外國よりの輸入とその労働力による大農業と、かくして得たる農業生産品の輸出とであつて、従つて、外國市場の獲得、資本の輸出、原料品の輸入等の外國への帝國主義的發展の要素は未だ充分發展しなかつた。加ふるに黑人奴隷と白人との鬭争、白人たる外國労働者の同化未完成の障害等のために、外國の事を考へる餘裕がなかつた。しかし、一面にはスタンダード・オイル・カンパニーやアメリカン・タバコ・カンパニーの如きトラストが發展しはじめ、千八百八十年代には工業生産品も徐々に輸出される傾向にあつたことを忘れてはならぬ。

千八百年の末葉より二十世紀の劈頭にかけて、アメリカの經濟は最早國內だけに満足せずして國外に虎視眈々たる眼を放ちはじめた。有名なユナイテッド・ステイール・コオポレーションが千九百一年には設立せられ、人口も耕地増加の割合に激増し、工業は農業を凌駕し、外國貿易、造船業は發達し、資本も幾分か餘裕を生じ來つた。

合衆國の帝國主義的發展は、先づ、モンロー・ドクトリンにて豫め外國の干渉を排除し來りし中米、南米に向つてなされた。千八百九十八年のスペインとアメリカの戦争は、アメリカの帝國主

義的發展の第一歩であつたといつてもよい。

カリビアン海にあるキューバ島は、當時スペインに屬し、物資豊富にして、國防上にも要地であつた。しかし、そこには、世界第二の産額を有する製糖業、カダコ栽培業、鐵礦、鐵道及び造船業に千八百五十年以來アメリカの資本が投下されてゐた。千八百九十三年には五千萬ダラーのアメリカ資本が輸出されてゐた。千八百九十四年、かつて合衆國の住民であつたキューバ人がスペインの支配に對し一揆をおこし、ために製糖業は大打撃をうけ、キューバの砂糖を精練する合衆國精糖會社は破産に瀕した。そこで、スペイン軍隊の殘虐なる行爲に藉口して、合衆國は戰艦艦隊を派し、スペインと戦争を開始し、その結果、平和條約に於いてスペインはキューバより撤退し、キューバは半獨立國として、アメリカの支配のもとに服するに至つた。こゝに注意すべきはキューバに投資したのは、主として、ザ・ナショナル・シティ・バンク・オブ・ニューヨークであり、この銀行は實に、後でものべるやうに、ジェー・ビー・モルガンとともに、アメリカの二大金融寡頭政治家の一たるクーン・ロエーブ（クーン・ロエーブはロックフェラーと近く、ロックフェラーの銀行を利用したので、クーン・ロエーブの代りにロックフェラーがモルガンと並稱さるる

こともある)の制覇下にあるといふことである。そして、このアメリカより資本を仰いでゐる製糖會社は、全産額の六割乃至七割を生産してゐる。

次に合衆國は、千八百九十九年から千九百一年にかけてフィリッピンを併合した。フィリッピンはゴムを産出することを以て有名である。また、フィリッピンは合衆國の工業生産品の販賣區域として重大な土地でもあつた。そこで、先づ合衆國はフィリッピンを解放するといふ名目をもつて、合衆國指導のもとに、教育制度を施行して恩恵を施し、遂にはウッド將軍をして之を併合せしめた。

千八百九十八年にはハワイを併合した。ハワイは砂糖の生産地として、アメリカの資本が多額に投下されてゐた。千八百九十年、合衆國はマッキンレー關稅を發して無稅で、ハワイの砂糖を輸入した。しかし、ハワイの砂糖はキューバ、ジャバ等の砂糖と競争することを得ずして、ハワイの經濟界には恐慌がおこつた。アメリカの投資家はその損害に恐れて政府に援助を求めた。政府はそこで海軍を派遣して、ハワイを併合した。金融資本と政治機關との關係を明瞭に物語つてゐるのではないか。ハワイの製糖業は今日アメリカ・砂糖トラストの完全なる獨占下にある。その

トラストが金融資本家に統制せられてゐることは勿論である。

次に、アメリカは、カリビアン海をとりまく、ハイチ島(ハイチ共和國及びサン・ドミンゴより成る)及びニカラグアを保護國とした。千九百六年、サン・ドミンゴは財政的に破産せんとしたので、そこに投資してゐる諸國は、アメリカをして關稅を徵收せしめ、その五十パーセントをこれらの諸國に與へる代りに、アメリカをしてサン・ドミンゴの上への財政的保護を認めた。そこでアメリカは、収入の半分の支拂を求めたが、サン・ドミンゴは支拂ひ能はざるの故をもつて、アメリカ政府は、アメリカの金融寡頭政治家たるクーン・ロエアをして二千萬ダラーをサン・ドミンゴに貸し、その代りに五十年間の關稅をこのフィナンシャールのためにさし押さへせしめんとした。しかし、それに應じないので、海軍を送り、遂に保護國たらしめた。續いて、ハイチ、ニカラグアをも保護國たらしめ、もつて、カリビアン海沿岸を全部アメリカ支配の下に置いたのである。中央アメリカはかくして、完全にアメリカ資本の自由なる搾取地となつた。

中央アメリカが、アメリカ合衆國の手に歸するや、合衆國は、今後は如何にかして、大西洋と太平洋を通ずる運河を開鑿せんとした。しかし、パナマの地はコロンビア共和國に屬し、コロンビ

アは、合衆國のために、パナマの地を九十九年間貸すことを拒んだので、合衆國は策略を弄して、パナマをコロンビアより獨立せしめ、千萬ダラーの現金と若干の年賦金とをもつてパナマ共和国より土地を租借し、そこに運河工事を開始した。千九百二十年パナマ運河は完成した。始め、アメリカは、運河完成の暁は、そこを嚴然たる中立地とし、要塞を設けざることをイギリスに約したるに拘らず、イギリスが千九百一年、ボア戦争のために力をつくしつゝある暇に乗じて、パナマと特別の協定を結び、運河完成後はそこに要塞を設けた。

更に重要な事は、合衆國のメキシコへの進出である。メキシコは、銀、金、錫、銅、石油の重要な産出地で、列國帝國主義の眼の常に集中したところである。殊に石油の如きは、世界産額の約五分の一を産出した。アメリカの資本家は、スタンダード・オイル・カンパニーを通して資本を投下し、スタンダードは、マデロ等のメキシコ人を利用して政變をおこし、もつて合衆國帝國主義の手を延ばすことに成功した。千九百二十四年の統計によれば、メキシコにはアメリカの資本が二億五千萬ポンド（その内鐵道に三千二百萬ポンド、鑛山に六千萬ポンド、石油に一億ポンド、木材及び植林事業に四千萬ポンド）投下され、イギリスの資本は一億五千萬ポンド、その他

の外國の資本は一億ポンド投下されてゐる。即ち、メキシコの輸入資本の半分は合衆國金融資本家たるロックフェラー（或はクーン・ロエブ）によつて投資されてゐるのである。メキシコは全く、その金融資本の制覇のもとにあるといふも過言ではない。

中央アメリカ、南アメリカを完全に、その金融資本下に置いたアメリカは、更に東の方、支那に眼をつけた。千八百九十九年及び千九百年の國務卿ヘーの門戸開放の提唱に伴ふスタンダード・オイル・カンパニーの支那侵入、千九百二十年に於ける新「コンソルチウム」——これはアメリカの二大金融政治家たるモルガン及びクーン・ロエブ兩フィナンシャールの投下資本を基礎とする——の提唱の如きは、金融資本を中心とするアメリカ帝國主義の明白なるあらはれではないか。

アメリカは、歐洲大戰前に於ける資本輸出の額は約二十六億ダラーに達してゐた。しかしそれと同時に、約五十億ダラーの外國資本が輸入されてゐた。従つて約二十四億ダラーの外國資本を債務として所有してゐた。それはアメリカに貯蓄預金の額のすくなかつたこと及び銀行制度の不完全なるがためであつた。

所が歐洲の大戦を境として、アメリカには莫大な金が流入した。千九百十五年から、二十四年の間に、三十億ドル以上の金が流入した。大战中及び大战後、ヨーロッパ諸國は、軍需品の購買、借款等によつて全くアメリカの金融資本の前に屈服した。アメリカは俄然として債務國から債權國に一躍した。いま重なる西ヨーロッパ諸國のアメリカに負ふ所の負債を舉ぐれば、次の如くである。

イギリス	四十二億七千七百萬ダラー
フランス	二十九億九千七百五十萬ダラー
イタリア	十六億四千八百萬ダラー
ベルギー	三億四千九百二十萬ダラー
ロシア	一億八千七百七十萬ダラー

その他を合して九十六億二千六百八十萬ダラーに達する。(ニヤリング・フリーマンのダラー・デ
イブロマシイによる)

次に、アメリカの資本輸出の大陸別の年度表を左に掲げよう。(ダンのアメリカン・フォレン・イ

ンヴェストメントによる。單位は百萬ダラー)

	一九三三年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
	金額	%	金額	%
カナダ及ニューファンドランド	七五〇	二九	二四三〇	二七
ラテン・アメリカ	一三〇〇	五二	三三〇〇	四四
ヨーロッパ	三三〇	一三	一〇〇〇	二二
アジア及オーストラリア	一七五	七	五九五	八
			六九〇	八
				八七〇
				八

右の表より見る時は、前述のラテン・アメリカ、ヨーロッパ、アジアのみならず、カナダ及びニューファンドランドへの資本輸出が激増せることが判る。カナダの農業可能地面積はアメリカより大であり、カナダは世界の石炭保有全額の六分の一を有し、森林も亦アメリカより廣大である。ニューファンドランドは約三十六億萬噸の鐵礦を有してゐる。カナダ及びニューファンドランドは、歐洲大战前は、第一にイギリスの資本を仰いでゐた。ところが、大战後は専らアメリカの資本を輸入してゐる。かくして、アメリカは、カナダの全産業の三分の一を所有し、全鐵山の同じ

く三分の一を所有してゐると言はれてゐる。

かく觀じ來れば、全世界は正にアメリカの金融資本の絲に操られてゐるといふべく、アメリカは正に二十世紀に於けるシャイロックである。

最後に世界の産業を操縦するアメリカの金融資本家は誰であるかを述べよう。

アメリカの金融寡頭政治家としては、ジュー・ビー・モルガン商會と、クーン・ロエブ商會がある。モルガン系の銀行としては、ファースト・ナショナル・バンク、ガラシティ・トラスト・コンパニー、バンカース・トラスト・コンパニー、チエーズ・ナショナル・バンク等があり、これらの銀行は各そのもとに大小多くの銀行を支配してゐる。また、今はクーン・ロエブ系の銀行となれるナショナル・シティ・コンパニーにも投資してゐる。モルガン商會は、これらの銀行を通して、それらの銀行資本をもつて、有名なる製鐵トラストたるユナイテッド・ステーツ・スティール・コーポレーション、海運トラストたるインターナショナル・マーカンティル・マリン・カンパニー、大北鐵道及び北太平洋鐵道、銅鐵業トラストたるグッゲンハイム系のケネコット製鋼會社、製糖界のキューバ・クーン・シューガー・レファイニング・カンパニー、自動車トラストとしてフォードと對峙するジェネラル・

モーター・カンパニー、電氣トラストたるジェネラル・エレクトリック・カンパニー等の大經營を支配し、それらを通じて、それらのトラストに屬する中小の經營を支配してゐる。而して、モルガン商會はその所屬に屬する諸銀行を通じて直接に、または、海外に存在するモルガン系の銀行、例へば、ロンドンのモルガン・グレンフェル・エンド・カンパニー、パリーのモルガン・ハリス・カンパニー、ローマ、ミラノの支店、オーストリア土地信託會社を通じて、その金融資本をもつて、世界の産業を支配してゐる。ジェー・ビー・モルガン商會の主人は乃ちジェー・ビー・モルガンであり、彼こそはアメリカ否世界の二大ファイナンシャリーの一人として時めく金融資本家である。この系統に屬する富豪として有名なのは、カーネギー、ヒル、グッゲンハイム等である。歐洲大戰後のヨーロッパ投資はもっぱらこのモルガン・カンパニーによつてなされたものである。歐洲大戰に協商國側が勝ち戦後その疲弊より起き上ることを得たのも一に、モルガン金融資本の御蔭である。

クーン・ロエブ系の銀行としては、ナショナル・シティ・バンク、インターナショナル・アクセプタンス・バンク、デロン・リード・カンパニー及びロックフェラー系の諸銀行等があり、それらの

銀行を通して、有名なるスタンダード・オイル・カンパニー、アナコンダ製銅會社、ペンシルヴェニア鐵道、外多くの鐵道等の大經營を金融資本をもつて支配してゐる。日露戰爭の際の軍事公債は實はこのクーン・ロエブによつて引受けてもらつたものである。クーン・ロエブ・カンパニーの主人はシフであり、同系の資本家としては鐵道王ハリマン、石油王ロックフェラー、銀行王ヴァンダーリップがある。

この二大金融資本家たるモルガンとシフこそ、實に世界をその金融資本をもつて操る二大シャイロックであるのだ。(註二十)

- (註一) Faulkner, Economic History of the United States. p. 156
- (註二) Beard, Contemporary American History. 恒松安夫氏譯、米國近世政治經濟史。
- (註三) Waltershausen Zeittafel zur Wirtschafts-Geschichte. S. 105
- (註四) Bogart. Economic History of the United States. p. 292
- (註五) Lippincott. Economic Development of the United States. p. 332
- (註六) ビヤード氏著、恒松氏譯本、第三十五頁。

- (註七) Faulkner, Ibid. p. 163
- (註八) Faulkner, Ibid. p. 164—163
- (註九) Arnot, The Politics of Oil. 風間信三氏譯、帝國主義と石油問題。第八頁—九頁。
- (註十) 風間氏譯、前掲書、第四頁。
- (註十一) Lippincott, Ibid. p. 465
- (註十二) Lippincott, Ibid. p. 635
- (註十三) Nearing, The American Empire. 邦譯、角田敬三氏譯、大資本の制覇。第百九十一頁。
- (註十四) Die Rote Gewerkschafts Internationale, 9 Jahrgang, Nummer 12, S. 487
- (註十五) Strauss, Der Konzentrationsbewegung im deutsche Bankgewerbe. S. 174 ff.
- (註十六) Ely, Evolution of the Industrial Society. 文明協會譯、産業社會の進化。第百四頁。
- (註十七) ヴァルガ、經濟年報(經濟批判會譯)第一冊、第七十九頁。
- (註十八) 拙稿『アメリカに於ける獨占組織の研究』——大倉高等商業學校會誌昭和五年五月號所載——を参照され度し。

(註十九) Lambert, Modern Imperialism. p. 5

(註二十) Lenin, Der Imperialismus als jüngste Etappe des Kapitalismus. S. 91

(註二十一) 上の節は主として次の三書による。

Meyer, Die grossen amerikanischen Vermögen 2 Bde.

Nearing and Freeman, Dollar Diplomacy.

Jones, The Trust Problems in the United States.

第八章 世界大戦とアメリカ合衆國

アメリカ合衆國は、自然的富源にめぐまれ、發達したる機械、大規模の經營、豊富なる資本等によつて千八百六十四年の南北戦争以來、不斷の經濟的進歩が行はれ、資本主義は爛熟し、今日では資本主義經濟に於いて、世界の最前線に立つてゐる。ドップは、このアメリカの資本主義的發展の特徴としてつぎの五點を指摘してゐる。(註一)

- (一) 南北戦争以來の急速度の經濟的發展、これは莫大なる國富と、大工業指導者の力による。
- (二) トラストの優勢。
- (三) 工業に於ける特殊化と地方化の高度の發達。
- (四) 農業の大規模の資本化。
- (五) 海外市場へ注意を轉じたことがおそかつたこと。南北戦争以前の輸出は主として農業生産物で、工業生産物は大部分内國で消費された。千八百九十八年(スペインとの戦争およびフィ

リ・ピンの併合) 以來、はじめてアメリカ資本主義は帝國主義的段階に入つた。かゝる資本主義の發達は、巨大なる小數の資本家を發生せしめ、その資本家の手に、多くの産業が隸屬した。

『南化戦争から千九百十四年までのアメリカの經濟生活の革命的變化は富豪社會にとつての絶好の機會となり、その間、彼等は馬上の指揮者であり、敏速で先見の明に富み、かつ宣傳に巧みな権力者であつた。この革命的變動を通じて、ヒルス、ハリマン、サイドナー、ウエヤハウザー、グッゲンハイム、ロックフェラー、カーネギー、モルガンの徒は、あたかもナポレオンがフランスの政治組織に對したやうにアメリカの經濟組織を全く占領して終つた。』(註三二)ニアリングは、南北戦争以來のアメリカの經濟的發達をつぎのごとく要約してゐる。

『合衆國が世界問題に参加する準備は、南北戦争以來すなはち千八百七十年から千九百年に至る三十年間に着々成熟し、この間、合衆國の人口は九十七パーセントの増加を示せるに對して、小麥は年産額二億三千六百萬ブッシェルより五億二千二百萬ブッシェルに、玉蜀黍は十億九千四百萬ブッシェルより二十一億五百萬ブッシェルに、棉花は四百三十五萬二千俵より一千十萬

二千俵に、石炭は二千九百萬噸より二億四千一百萬噸に、石油は二億二千一百萬ギャロンより二十六億七千二百萬ギャロンに、鉄鐵は一百六十六萬噸五千噸より一千三百七十八萬九千噸に、鋼鐵は六萬八千噸より一千八十八萬八千噸に、銅は一萬二千噸より二十七萬一千噸に、セメントは千八百八十年に二百萬樽より一千七百萬樽に増加した。食料品類は人口増加の割合を超過し、新興産業の基本となつた石炭、石油、鉄鐵、鋼鐵、銅、セメントの産額は人口増加よりも更に急速であつた。この僅か三十年間に合衆國は殆んど信じ難いほど急速に産業の新世界に優越者たるべき基礎を築き上げた。』(註三三)

第二十世紀は、アメリカの經濟が更に飛躍することをもつて開幕した。この當時では鐵道はすでに完成し、鐵道に投ぜられてゐた莫大なる資本は工業界に投ぜられ、鑛業・工業は大發達の可能性を與へられた。勞働力も、毎年百萬人を超過する移住者によつて豊富となつた。それに反して農業は、農産物の價格騰貴、農地の騰貴のため、相對的にはあまり發達しなかつた。従つて工業に参加するもの多く、國民は全く工業化するに至つた。富の蓄積は、海外への投資となり、かくして、世界大戦の前夜には、アメリカ合衆國は世界第一の富有國となつてゐたのである。そこへ千

九百十四年帝國主義戰爭である世界大戦が勃發した。この世界大戦勃發は、先づヨーロッパ市場を閉鎖せしめ、従つて、アメリカはその餘波をうけて短い期間不景氣に襲はれた。が、戰爭が繼續するとともに、ヨーロッパの生産機構は破壊せられ、農業が衰微したので、ヨーロッパは全くアメリカの農産物、工業産物に依存するに至つた。そのことはアメリカの農業・工業の發展・擴張に大刺激を與へ、千九百十七年アメリカが參戰するや工業は更に膨脹を強制せられ、貿易も亦増加し、千九百十四年と二十年の間に四倍化したと言はれる。ヨーロッパへの商品の輸送、ドイツ潛航艇に對する對抗策のために、政府は商船を増建した。千九百年の登録商船の總噸數は七十八萬二千五百七噸であつたのに、千九百二十年には九百九十二萬四千六百九十四噸に増加し、アメリカ船によつて行はれる貿易は、八・七パーセントから四〇・三パーセントに激増した。戰爭中に於ける貿易の統計をかゝれば次のごとくである。(註四)

	輸出(ダラー)	輸入(ダラー)	輸出超過額
一九一四	二、三六、七九、二四八	一、八三、九五、六五七	四七二、八四一、五九一

一九一五	二、七六、五九、三〇〇	一、六七、四一、七四〇	一、〇九、一八、五六〇
一九一六	四、三三、四八、三八五	二、一九、八三、五二〇	二、一三、六五、八六五
一九一七	六、二九〇、〇四八、三九四	二、六五九、三三三、一八五	三、六三〇、六一五、二〇九
一九一八	五、九一九、七二一、三七二	二、九四五、六五五、四〇三	四、〇二六、〇六六、〇〇〇
一九一九	七、九二〇、四二六、〇〇〇	三、九〇四、三六五、〇〇〇	

輸出の主要なるものは、輸出額順に列擧すれば、火薬、化學品、染色品、藥品、鋼、鐵、肉及び肉製品、麥、麥粉である。

かゝる好況は、アメリカ國民の消費を増し奢侈を増加せしめた。『値段のことも考へず、未來のことも考へず、アメリカ國民は例外なく物品殊に贅澤品を要求した。』(註五)

この好況は、續いて、その反動として、千九百二十年から千九百二十一年へかけて二年間の不況時代を招來せしめた。ヨーロッパ諸國は窮乏してアメリカから生産物を購入する金なく、従つて生産は減退し、勞賃は下り、破産が頻出した。千九百二十一年には一萬六千六百五十二個の

經營が破産したといはれる。失業者も激増し千九百二十一年には三百五十萬に達し、その大部分は自動車工業、建築業、製鐵業に従事せる勞働者であつた。もつてそれらの企業が不況によつて如何に打撃をうけたかが想像される。農産物の價格も低下した。しかし、この不況は千九百二十二年に至つてやゝ回復した。

回復後は、獨占と産業合理化との強行によつて、生産を回復し、今日依然として世界經濟の最尖端に立つてゐる。

アメリカは歐洲大戦によつて、多大の資本をヨーロッパに輸出し、その金融資本をもつて、ヨーロッパの生産を支配してゐる。のみならず、ドーズ・プラン以後、歐洲の復興を助け、經濟的にも政治的にも、ヨーロッパを支配するに至つた。

歐洲大戦以前には、資本輸入國であつた。合衆國に投下された外國資本の額は次のごとくであつた。(註六)

	外國資本額 (ダラー)
一八四三	一五〇,〇〇〇,〇〇〇
一八六〇	四〇〇,〇〇〇,〇〇〇
一八七三	一,五〇〇,〇〇〇,〇〇〇
一八八〇	二,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇
一八九〇	三,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇
一九〇四	三,九〇〇,〇〇〇,〇〇〇
一九一四	五,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇

これに對して、アメリカは千九百十四年に、二十六億ダラーの資本を輸出してゐた。従つて、千九百十四年にはなほ、約二十五億ダラーの資本を外國より仰ぐ資本輸入國であつた。ところが、歐洲大戦にはアメリカは多大の資本をヨーロッパに輸出したので、これを劃期として、世界一の債權國となり、一大シャイロツクとして世界に君臨するに至つた。

いま、ヨーロッパ諸國のアメリカへの債務の統計をかゝれば次のごとくである。(註七)

	債務元金(ダラー)	利息(ダラー)	總額(ダラー)
イギリス	四、六〇〇、〇〇〇	...	四、六〇〇、〇〇〇
フランス	三、三〇〇、〇〇〇	三六七、〇〇二、三三七	三、九六〇、〇〇七、〇〇六
イタリア	一、六四七、九七〇、〇五〇	六五〇、〇五一、三三九	二、〇一五、〇七九、三九七
ベルギー	三七七、〇三九、五七〇	七、四三三、六〇三	四四四、四六三、一七三
ロシア	一九二、六〇一、二九七	四九、三〇一、七七五	二四一、九〇三、〇七二
チェコスロヴァキア	九二、八七九、六七一	一九、〇一六、〇五三	一一〇、八九五、七二四
その他諸國	三八、三九五、三三三	五八、六〇五、八九七	三八七、〇〇一、七三〇
合計	二〇、五七八、五九三、三三〇	一、三三二、五〇〇、九〇四	二一、八〇〇、〇九四、二三四

資本の輸出、金融資本による世界の征服は、乃ちアメリカ合衆國の帝國主義の進出である。

「世界戦争はアメリカ帝國主義の第一歩を完成した。それは國內財閥を強力ならしめ、アメリカ

カの海外に於ける名聲を高めた。千八百九十八年に於いてその曙光を呈したアメリカの帝國主義時代は、千九百十四年に至つての曉の光を赫々と投げかけた。孤立と國際的不干涉主義との夜は去つて、帝國主義的覇權の日は昇つたのである。(註八)

千九百十九年以後の工業生産の物價指數をかゝける。指數の單位は、千九百二十三、四、五年の三ヶ年の平均一日當り生産であつて、アメリカ聯邦準備局の發表である。(註九)

一九一九	八三
一九二〇	八七
一九二一	六七
一九二二	八五
一九二三	一〇一
一九二四	九五
一九二五	一〇四
一九二六	一〇八

次に大戦後の外國貿易の趨勢を見よう。

	輸出(ダラー)	輸入(ダラー)	輸出超過額 (ダラー)
一九二〇	八、三六、〇一六、〇〇〇	五、二六、四八一、〇〇〇	二、九四九、五三五、〇〇〇
一九二一	四、四八五、〇三二、〇〇〇	二、五〇九、一四八、〇〇〇	一、九七五、八八三、〇〇〇
一九二二	三、八三二、七七七、〇〇〇	三、一一三、七四七、〇〇〇	七一九、〇三〇、〇〇〇
一九二三	四、一六七、四四九、〇〇〇	三、九二二、〇六六、〇〇〇	三七五、四八三、〇〇〇
一九二四	四、五九〇、九八一、〇〇〇	三、六六〇、五三三、〇〇〇	九三〇、四四八、〇〇〇

アメリカは、ヨーロッパ戦後、世界資本主義の頽勢に應じて、産業合理化と獨占との施行によつて、下降し行く利潤率を引上げんとしてゐる。産業合理化運動の模型は、フォード自動車會社の經營に於いて最も典型的に示されてゐる。

全産業の五〇、六〇、あるひは九〇パーセントまでがトラスト化せられてゐる。いまアメリカ合衆國の二大金融資本家といはるるモルガン財閥とロックフェラー財閥の統制下にあるトラスト

王國を見よう。モルガン(Morgan)王國內には、合衆國鐵礦石産出の三分の二、鋼鐵生産額の殆んど全部を手中に握る垂直的コンツェルンたるユナイテッド・スチール・コルポレーション(United States Steel Corporation)を中心にして、電氣トラストたるジェネラル・エレクトリック・カンパニー(General Electric Co.) 國際汽船業に重要な地位を占むるトラスト、インタナショナル・マーカンティル・マリン・カンパニー(International Mercantile Marine Co.) 五百の大企業を包含する生活資料品トラストのうち最大なるビーフ・トラスト(Beef Trust)等がある。その各は更に、これ以外の企業に、或は貸本を通じ、或は參與制度を通じて多くの企業を支配してゐる。しかして、この巨大なるモルガン王下の全企業を統制するものは、實に、アイ・ビー・モルガン銀行(T. P. Morgan Co.)である。ロックフェラー(Rockefeller)財閥のもとには、有名な石油トラストたるスタンダード・オイル・カンパニー(Standard Oil Co.) 製銅トラストたるアナコンダ(Anaconda)その他セメント・トラスト、亜鉛、鉛の探掘、電信、電話企業、インタナショナル・ハーヴェスター・カンパニー(International Harvester Co.)等が包含されてゐる。(註十)

アメリカの資本主義は、ヨーロッパの資本主義が下降しつつあるに拘らず、今日尙ほ上向線をたどつてゐる。國內の富の豊富は労働者の生活を保證し、いまだヨーロッパのプロレタリアのごとく資本の陣營にせまるほどアメリカ・プロレタリアートは革命化されてゐない。しかし、だからと言つてアメリカを超資本主義國としてその資本主義が永續の性質を有するものとするは大なる誤謬である。何故なら、そこにはかゝる繁榮の途上にも、なほ多くの矛盾がかくされ、それが増大する傾向を有するからである。失業の發生・増加、生産制限、農業恐慌の危険性等はそれを物語つてゐる。最近、イギリス労働内閣のトーマス大臣は、議會に於いて、公の統計にもとづいてアメリカの失業者が漸次増加して、今日までは六百萬に達したことを明言してゐる。

アメリカ資本主義の將來を暗示する一つの現象としての、千九百二十九年末にアメリカを襲つた株式恐慌について、次に一言しよう。

千八百二十八年の初めアメリカでは小規模の恐慌が來たが、後半には恢復し、千九百二十九年に入るや上景氣となり、自動車工業、鑛業、化學および電氣工業は非常なる發展を示し前年度の同期より一割の増産を示した。株式は、かゝる生産の發達に應じて、過去五年間、多少の低下は

あるにしても、漸次昂騰しつつあつた。二十九年四月以後には、資本主義の歴史に例を見ないほど株式の無禮講が行はれ、中小の有産者、労働者にして蓄財せるもの等は、金融資本家達に煽動せられてその音頭取りで、景氣騒ぎをして、有する資財を株に投出した。バブソン (Roger Babson) 氏は、この有様を見て、株式恐慌の近づきつつあるを指摘したが、政府、聯邦銀行、金融資本家、それらに支配せらるるすべての新聞は、バブソン氏を不吉の流言をなすものとして攻撃した。所が、十月二日に至つて突然株式界に大地震が勃發した。二十五の主要株は約半分に慘落し、十月には二億の株が株主を失つて終つた。公式の取引所統計によれば、十月一日のニュー・ヨーク取引所の全株式価格は八百七十億ドルであつたのに、二十九日には四百八十億ドルに慘落した。合衆國全部の取引所に於ける、恐慌後一週間後に於ける株の喪失は、七百五十億ドルに達したと言はれる。恐慌はやがて、やゝ回復した。從來、なけなしの金をつぎこんだ中小の有産者、労働者は株の暴落に會つて、投出し、一文なしになつた。所がそれに反して、巨財を擁する資本家は慘落せる株を廉く買収して、景氣の回復とともに莫大なる利益を掌中にをさめた。

かゝる株式恐慌が勃發するや、以前この恐慌を豫言したバブソン氏を攻撃した諸新聞は今度は

一聲に悲鳴を擧げた。例へばコンマーシャル・エンド・フィナンシアル・クロニクル誌 (Commercial and Financial Chronicle) は、次の如く書いた。

「この週の取引所恐慌は、數百年間の最大の恐慌であつて、アメリカの歴史のうちで疑もなく最悪のものであつた。かゝる大規模な貨幣損失は従來の取引所に全く例がない。恐慌後相場はやゝ恢復したが、この恐慌は取引所の全機構を破壊した。相場の恢復は、この週間すべての人が失つた不幸をとりもどすことは出来なかつた」

アナリスト誌 (Annalist) は、この恐慌によつて従來の取引所、投機理論は全くくつがへされ、アメリカ資本主義は「永久の繁榮」なりとする説は虚偽なりとした。

もつとも、大資本の宣傳誌、例へば「マヌファクチュア・レコーズ」(Manuf. Record) のときは、景氣の恢復は「アメリカに再び太陽が上つた」と言つてはるるが、それは資本家の上に太陽が照ることであつて、一般大衆は反對に、迷へる羊となつて取引所から追ひ出されたのである。

この株式恐慌は、従來經濟界の半自動的調整器であつた取引所が、投機なくしてはやつて行けなくなつた金融寡頭を中心機關となり、従つて、アメリカ經濟に於ける取引所の役目は、アメリ

カ資本主義の寄生的墮落と怠惰の徴表となつたことを、事實を以て示したのである。

恐慌の結果、資本家は懺悔株を買つてますます富み、中小有産者、勞働者は多年の血の結晶である蓄財を失つた。従つて、一般大衆の購買力は激減し、その結果、一般の生産は制限せられ、事業は短縮せられた。例へば、鋼鐵の利潤は十二・六減で、ビッツバーグやシカゴの製鐵事業は二十五パーセント減じた。石炭、木綿工業等も減じた。アナリストの報ずる所によれば、一般の工業の生産は、三・五パーセント減じたと言つてゐる。十一月に入るとフォード (Ford) はモンタージュ會場を閉鎖し、ジェネラル・モーターズ (General Motors) も事業を制限した。この生産制限に伴ふものは、當然に失業者の増加である。一例としてフォードはデトロイトで三萬人の勞働者を解雇し、デトロイト市には十萬人の失業者が発生し、フィラデルフィアでは七萬五千の失業者が一時に発生したと言はれる。「取引所恐慌は商業および工業恐慌の前徴・先驅である」と言つたヒルファディングの言葉 (金融資本論) は全く正當であることが、この恐慌によつて證明されたのである。

以上は、ルービンシュタインの論文「アメリカに於ける取引所恐慌と迫りつゝある經濟恐慌」(註

十一) によつて、最近のアメリカ經濟界の姿を紹介したのである。これによつても、アメリカ資本主義は決して金城鐵壁でなくして、世界經濟の一連環として、苦惱しつゝあることが、明である。

- (註一) Dobb, The Development of Capitalism. p. 16
- (註二) Nearing, The American Empire. 邦譯、第百九十七頁。
- (註三) ニヤリング、同邦譯、第二百四十一—四十二頁。
- (註四) Lippincott, Economic Development of the United States. p. 722
- (註五) Lippincott, Ibid. p. 726
- (註六) ヴァルガ、世界經濟年報(邦譯)第一卷、第八十七頁。
- (註七) Lippincott, Ibid. p. 736
- (註八) ニヤリング、前掲書、邦譯、第百九十六頁。
- (註九) ヴァルガ、前掲書、第一卷、第六十八頁。
- (註十) Rubinstein, Die Konzentration des Kapitals, S. 19 ff.

- (註十一) Rubinstein, Der Börsenkrach und die heranahende Wirtschaftskrise in den Vereinigten Staaten (Die Rote Gewerkschafts Internationale. 9 Jahrgang, Nummer 12)

第九章 結 論

資本主義胎内に於ける矛盾の一大表現としてのヨーロッパ大戦は、その結果として、アメリカを資本主義の最尖端に押しすゝめると同時に、ロシアに資本主義の否定たるサヴェート聯邦を現出せしめた。而して、この兩國は、全世界の今日の特徴をもつとも尖鋭に表現せる國家である。「現在の世界政治の最も重要な傾向は、二大陣營への世界の分裂である。乃ち資本主義的、保守的、反革命的陣營への分裂だ。サヴェート聯邦は革命的陣營の中心點を形成してゐる。合衆國は革命的陣營の中心點としてますます／＼結晶しつゝある。全世界の國民革命運動が必然的にその支持をもとめ、全資本主義諸國のプロレタリアートの革命運動が向つて行く所はサヴェート聯邦であるに對して、合衆國の經濟的優越は、ますます／＼明らかに資本主義世界に優越的地位を確保して行く。二大陣營へのこの分極化は、世界政治全體の最も重大なる出來事である」といふヴァルガの論はまことに正當である。

資本主義的經濟制度を維持しながら、矛盾に苦惱しつゝある今日の爾餘の國々は、この尖端に立てる二大國家の制度、經濟、政治、文化の影響のもとにある。我日本ももとよりそれから例外であり得ない。次に日本へのこの兩國の影響を一瞥しよう。

一國の思想は、その純粹なる意味に於いて、その國特有のものはありません。個人が物質的であると精神的たるとを問はず、その生活に於いて、社會の範疇より獨立し、それから離脱し得ないがごとく、一つの社會もまた他の社會との交渉に於いて他の社會から全く自由ではあり得ない。ある一國に於ける特有の文化乃至思想と言はるゝものも、その形成または發展の過程に於いて、他の國々の文化乃至思想との相互的作用に於いてはじめて可能であつたのである。

日本民族そのものすらその成生の過程に於いて、決して、單一なる地方より發生し、單一なる文化を有する單一なる種族より成り立つてはゐない。日本國家發生の當初にあつて、日本民族はすでに、西部アジアを故郷とする白人種たるアイヌ、滿洲蒙古沿海州を故郷とするツングース族、南部支那をその故土とする苗族、南洋方面より來つたインド・ネチアン族、黒人系のネグリト族、その他の、別々の故土と別々の文化とを有する種族より成りたつてゐた。日本國家成立